

浄空法師の講話

仏教を知ろう

——至善で円満なる教育



序

仏教を正確に認識することは、初心者にとって大変重要です。数多くの仏教修行者の仏教に対する観念は誤っていますので、その為、我々は本書を多数刊行し広く行き渡らせ、初学者の方々を助け、仏教に対する正確な観念が確立できることを目指しています。ここでは本意を完全に表すことはできませんが、我々の誠心誠意な願いを込めて、大衆への真摯な供養を願っております。ご縁があり仏法に関心を持つ方々に本書を喜んで読んで頂き、真実を受入れ、法益を授かるよう心より願っております。



一、仏法とは何ですか？	6
二、仏教とは何ですか？	11
三、現代の異体仏教	14
四、仏陀の教育目標	17
(一) 仏教の学位制度	17
(二) 仏教の教学目標	19
五、仏教教育の入門―地蔵経	21
(一) 大円満	21
(二) 大乘円満法／地蔵・観音・文殊・普賢	29
六、仏法修学の五大科目	32
(一) 三福	32
1. 人天福	33
2. 二乗福	41
3. 大乘福	58
(一) 六和敬	76
(三) 三学―戒・定・慧	87
(四) 六度	91
1. 布施	91



(1) 財布施	92
(2) 法布施	96
(3) 無畏施	98
2. 持戒	100
3. 忍辱	101
4. 精進	104
5. 禪定と般若	108
(五) 十願	112
七、仏法の修学次第	136
(一) 信解行証	136
(二) 戒定慧を同時に修行すること	140
八、仏法の教学芸術	146
付録	
「国連十年生涯教育」アジア非政府情報ネットワーク組織会議に於いて	158
仁愛平和教育を根付かせるために	164
二五五〇年ウェーサーカ祭活動概覧	179
墨書	190
感謝の世界に生きよう	192



一、仏法とは何ですか？

親愛なる仏弟子たちへ：

仏法を修学する前に、仏法に対する正しい認識を持つことは大切です。もし法を間違って捕らえていたら、多くの時間を費やしても効果を得られないでしょう。せつかくの努力も無駄になりかねません。その為に、仏法というのは何なのかをここで簡単に瞭に説明します。

仏教の創設者は釈迦牟尼仏（世尊）です。世尊は、中国の歴史記載では、三千年前に北印度に誕生されました。中国歴史によりますと、世尊は周昭王二十四年（甲寅）に誕生され、周穆王五十三年（壬申）に入滅され、七十九年間に亘ってこの世間に住世されました。現代中国仏教に記載されている仏涅槃の記念日を先輩の高僧方はこの暦によって定めました。歴史文献によりますと、世尊は、無上正等正

覺を得た三十歳より、四十九年間の歳月を費やし衆生の為に説法をされていました。仏入滅の千年後、すなわち中国東漢明帝永平十年（西暦六十七年）の時、仏教は初めて中国に伝来しました。

仏教を知るに当たって、まず知らなければならぬのは、次の事であります。

「仏」

「法」

「仏法」

「仏教」

これらの仏語は我々の修学に大いに関係しています。「仏」という字は梵語より音訳されたもので、「智慧」と「覺悟」の意味を表しています。当時は直接「智」「覺」と訳さず、「仏陀」という音訳文字で訳しました。それは「仏陀」という言葉には無限で深い意味が含まれているからです。中国言語の「智」と「覺」では完全にその深意を包括すること



は出来ません。それ故、音訳を採用し、それに注解を加えることにしました。「仏」という字は「体」と「用」で構成され、本体（体）から言えば「智慧」、作用（用）から言えば「覚悟」という意味です。

「体」には、三種の智があります。

第一、「一切智」：現代哲学名詞に言い換えれば、正確に宇宙真相と本体を知ることです。この様な智慧は、仏教において「一切智」と言います。

第二、「道種智」：種とは種々繁雑な現象を意味しています。宇宙の現象は莫大で無限な種類があります。このような現象はどのように現れ、どこから来て、どのような過程を経て、そして様々な結果に結びつきます。正確明瞭に宇宙万象を知る智慧を「道種智」と言います。

第三、「一切種智」：宇宙人生の真相を究極に明瞭化し、些かの迷いもなく、更に些かの誤差も無い

こと。このような智慧を「一切種智」と言います。

釈迦牟尼仏はこの三種の智慧をすべて具えておられます。この智慧から作用が働き、すなわち完全かつ正確に宇宙人生の真相に対する理解を得られます。智慧より覚りが生じます。教典の中の「覚」には三種類あります。一、自己覚悟。二、他人を覚らせること。三、円満なる覚悟。小乗阿羅漢、辟支仏、このような人達は自分だけが覚りを得るということ。この人達は人を覚らせ、人を助けようとする菩提心を起こしていないため、小乗に属します。大乘に属する菩薩は自分自身が覚った後、自然にすべての覚りを得ようとする人達を覚らせます。「覚りを得よう」ということは、機縁が熟したことを意味します。菩薩は必ず主動的に手助けをします。その人が自覚から円満究極なる覚悟に至るまで見守って下さります。「円満究極なる覚悟」とはキリスト教の「全知全能」の主——上帝（イエス）と同じく、



仏教では「仏陀」と称します。仏曰く「すべての衆生は本来この円満なる智慧と徳用（覚はその徳性が作用すること）が具わっている」『円覚経』には

「すべての衆生は本来仏である」と、また『華嚴経』には「すべての衆生は皆、如来の智慧と徳相を持っている」と記述されています。衆生は仏と平等で、少しも違うことを表しています。現在では、我々の智慧徳用は失われております。どうやって失ったのかは、仏の一言、「すべては妄想と執着がある為、覺りを開けない」で説明出来るでしょう。言い換えるとこれは病の根本です。妄想と執着はすべての苦の原因であり、一切の迷い、惑いと災難の原因となり、生と死、そして脱出できぬ輪廻転生の原因でもあります。妄想と執着を除けば自在を得られ、その上、智覺を回復させることが出来ます。もし一切の妄想と執着を徹底的に取り除くことが出来れば、我々の仏性が再び回復されるでしょう

う。この事実真相は大乗經典に明白に記述されております。

大智大覺の対象になるものは、限りのない時空に包容されている森羅万象のことであります。この「万」は数字の単位ではなく、無量の表し、いわゆる極めて多いことであるの喩です。經典では、体の一本のうぶ毛、または微塵という字で表し、これは「小」の面から言うことです。すなわち「正報」（自分自身のこと）は繊細な毛のかげらで、「依報」（生活環境のこと）は微塵です。大きい面から言えば空虚法界に遍在する一切の物事に喩えられ、この一切の物事は智慧と覺悟の対象となります。仏は一つの代名詞でこれらの万事万物を表し、すなわち「法」ということです。そうすると「仏法」という二つの字の綴りは限りのない智慧と覺悟という意味に転じます。中国の古い諺で「仏法無辺」（仏法には辺界と限界がない）と云い、本当にその通りで



す。覚る客体は限りがなく、覚る主体である智慧も限りがありません。この無量無辺の智慧と覚悟は自身の本能です。

但し、仏法には、理論上分り難いことがあります。仏は「我々の本来ある智慧と覚悟は、智慧と覚悟の対象になる物とは一体で、二つのものではない」と申されました。このことは理解し難いでしょう。もし仏の言葉が本当であるなら（実際は真実に違いがありません）、この智慧と覚悟は究極円満なるものです。すなわちこのことを信ずるべきです。もし「能知」（主体である智慧）と「所知」（客体である智慧の対象）は対立するものなら、この智慧と覚悟は円満である法則に反することになるでしょう。それは有限であって、究極円満ではありません。しかし、仏は「能知、能覚」（智慧、悟り）と「所知、所覚」（智慧の対象、覚りの対象）が一であり、不二、一如（一は不二、如は不異）のことです。これは仏法の中で熟知される「一真法界」（円

覚を得た仏の世界）及び「華嚴世界」で最も真実性のあることで、最も円満なることで、最高の領域となります。浄土宗でいう極楽浄土は一真法界に属しています。以上の説明で、我々は「仏法」に含まれている意味の一通り認識を得たでしょう。

民国初年、歐陽竟無という名の方は当時の一大仏学者でありました。彼は南京にて支那内学院を創立し、出家と在家の両方を含め数多くの仏教人材が輩出しました。この大師は民国十二年に第四中山大学（現南京師範大学）で「仏法は宗教でもなく、哲学でもなく、今日の必需である」という題目の講演をされました。これは当時、中国の仏教界で大きな反響を巻き起こしました。彼は沢山の事例にて仏法を正しく理解することと、仏法の正確な概念を陳述しました。この講演の内容は、王恩洋居士によって整理され、一冊の本となって出版されました。台湾でもこの本が出版されています。皆様、このような事で、彼の観点は非常に正しいものと言えます。



佛教是釋迦牟尼對一切衆生
多元至善圓滿的社會教育
直示諸法平等自性本真德
用之宇宙人生真相說法教人
同修同證心色太虛量周沙
界真誠清淨平等正覺慈悲
存心看破放下自在隨緣入世
學為人師行為世範故釋迦世
尊是一位仁慈的多元文化社
會教育工作者吾人應知應學

一九九九年十月三十一日

釋淨空



仏教とは、釈迦牟尼が一切の衆生に対して行う多元的で至善圓滿な社会教育である。

釈迦牟尼は、諸法（この世に存在する有形・無形の一切のもの）は平等であり、自性（そのものが本来備えている真の性質）は本来偽りのないものであり、功德の力を持った宇宙の人生真相であると述べられた。

真誠、清淨、平等、正覺、慈悲存心、看破、放下、自在、隨緣、入世。

學びて他人の師となり、行動を以てて他人の手本となる。

故に釈迦世尊は、思いやりがあつて情け深い多元的な文化社会教育者であつたといえる。我々はこれを知り、これを學ばなければならない。

1999年10月31日 釈淨空



二、仏教とは何ですか？

仏教とは一体どういうことですか？これは仏教を学ぶ人にとって知らなければならない事です。「仏教」は仏陀の教えです。仏が九法界の衆生に対する至善で円満なる教育です。教えの内容は無量無辺な事柄と道理を包括しており、大学での授業の全学科よりも内容は更に豊富です。時間の観点から言えば、過去・現在・未来を論じるものです。空間の観点から言えば、今現在の生活から限りのない宇宙世界まで探究することにあります。それ故、仏教は仏の教えであり、教育であります。宗教ではありません。それは智慧によって宇宙人生を覚るという教育です。中国孔子の教育は一世「一生」で、生から死までの教育であり、仏法は三世にわたる教育です。すなわち過去・現在・未来がすべて含まれていると

いうことです。

「仏教は本当に教育ですか？」という疑問を持っている人は、以下の点をよく観察して見れば分かるでしょう。日常生活の中では、教育体制に於いてのみ師と生徒の呼び方をします。我々は釈迦牟尼仏を元祖、始祖と称呼し、すなわち本師、根本の師であるという意味です。いわゆるこの教育は世尊によって築かれたものであり、世尊は創始者です。我々は自分のことを「弟子」と呼びます。弟子は中国古来の学生が自分に対する呼名であります。これらのことから、衆生と仏の関係は生徒と師の関係であるということが一目瞭然でしょう。宗教上は上帝と信者の関係は、師と弟子という関係ではありません。仏教では、はつきりとこの事を解き明かしております。仏は我々の師であり、菩薩は我々の同級生及び先輩に当たります。菩薩と我々の関係は先輩と後輩の関係にあります。日常生活で、我々は出家の人々



を「和尚」と呼びますが、実際に、各寺院に「和尚」になれる方は一人だけです。「和尚」は梵語で、訳されると、「親教師」で、すなわち直接教えてくれる師という意味にあります。直接の指導教師で、生徒と非常に親密なる関係です。直接指導してくれる師以外は「法師」と呼びます。このことは学校で沢山の教師の中で、自分を指導したことの無い教師の場合と類似しています。「和尚」と「法師」の違いはここにあります。「和尚」を代表して授業する人は「阿闍梨」と呼ばれます。阿闍梨の言行は我々の模範で、阿闍梨は我々の真の師であります。それ故、我々は阿闍梨を師と尊敬します。これらの呼名は教育界の専属名詞で、宗教界には同様な言葉は見当たりません。それは宗教ではなく、教育であることを証明出来ます。

尚、仏教道場の組織から見れば、寺院は仏教教育と仏教芸術が融合された産物機構です。現在の学校と博物館が合併された形式と似ています。いわゆる

る現代でいう芸術教育のことです。現代人はいつも芸術ということを口にしますが、仏教の教育では二、三千年前からすでに芸術教育が浸透しております。寺院の組織から見ても現代の学校と類似することが伺えます。

「和尚」とは学校の学長に相当し、教育政策を練る人であり、講義内容を定め、教師を招聘します。これらのことは和尚の職務であり、和尚の下に三人の助手が設けられており、仏教の寺院では主事と言います。教務を担当する人は「典座」（てんざ）で、訓導を担当する人は「維那」（いな）で、総務を担当する人は「監寺」です。これらの名称は学校と異なりますが、執行される職務は全く同様であります。従って、寺院の組織は学校と同様、しかもよく完備されている学校です。仏教の創始及び中国仏教が成立に至るまでの過程を顧みると、その体制の一貫は教育体系にあることは明らかです。この事実を明白に認識して欲しいと思います。





▲ 第八相 超金剛座 佛在菩提樹下敷金剛師子座，就是教導我們在任何場所與人接觸，都要保持身心清淨，沒有畏懼，這就是「坐師子座」的意思。

The Diamond Throne

Buddha of the Vajrasana, or Diamond throne, beneath the Bodhi tree. This shows that as we interact with people, we must maintain purity of the mind and the body. There will be no fear. This is the meaning of Diamond Throne.



▲ 第四相 善巧技藝 佛為教化一切眾生，必與教學同時進行，教學相長，永無止境。

Strength and Prowess

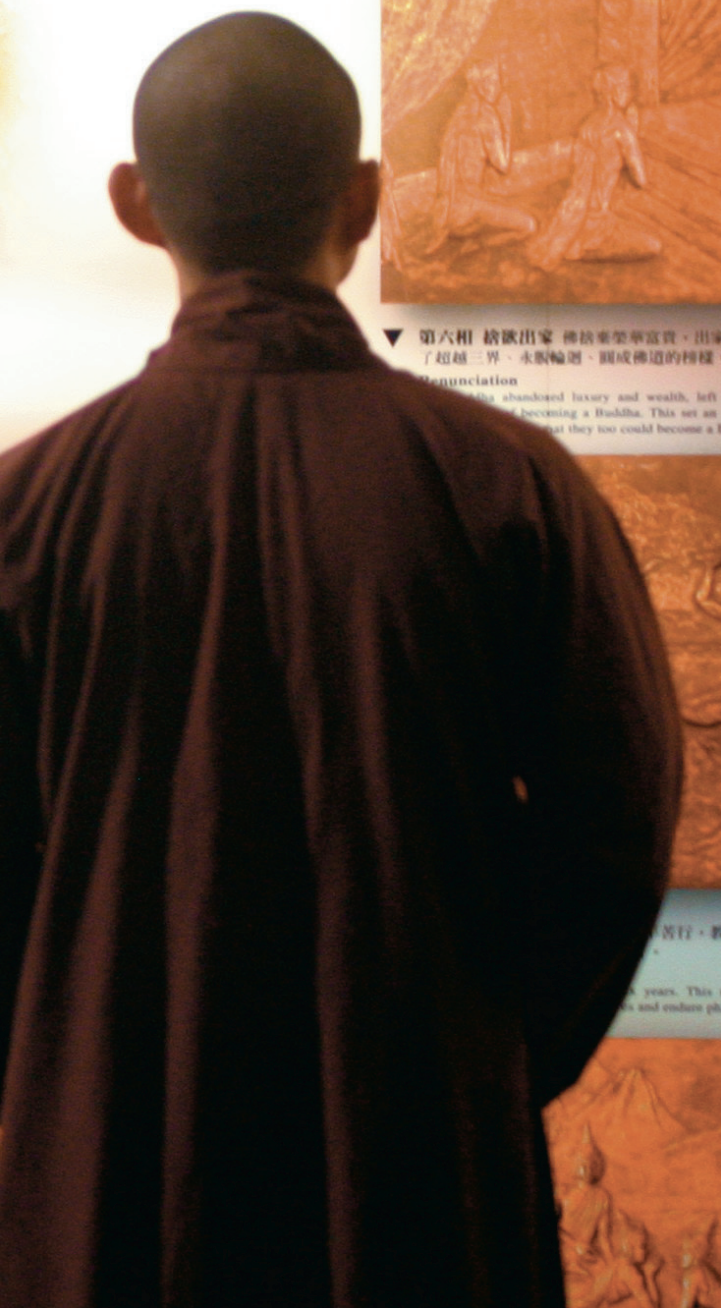
In order to teach and transform all beings, a Buddha's skills acquired through self-realization and teaching never stop.



▼ 第六相 捨欲出家 佛捨棄榮華富貴，出離了超越三界、永脫輪迴、圓成佛道的種種

Renunciation

Buddha abandoned luxury and wealth, left behind the cycle of becoming a Buddha. This set an example that they too could become a Buddha.



三、現代の異体仏教

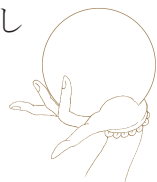
現在社会では、仏教には少なくとも四種類の異なった形態があります。この四種類の形態は、分別のつかない人々を困惑させています。

第一、伝統的仏教。すなわち「仏陀の教育」であることを述べられました。これは釈迦牟尼仏本来の主旨ですが、現在では伝統的仏教は珍しくなっており、よく見かけるのは多少変質している仏教です。

第二、宗教的仏教。仏教は本来宗教ではありません。しかし、現在では宗教になりました。このことに対し我々も反論出来ません。どうしてかと言うと、外見上は本当に宗教に見えるからです。かつての寺院では、毎日八時間の授業をするのは普通でした。しかし、今はどこにも一日に八時間の授業をする寺院が見つかりません。古代の中国の寺院は毎日

八時間の授業をし、八時間の修行をしております。修行方式には坐禅と念仏の二種類の修行がありました。すなわち毎日十六時間の修行を保つことが出来、「解」（理解）と「行」（実行）は相応していることです。授業は聴講と研究討論によって構成されています。それは理論上の事を指します。清浄心を養い、「覚、正、浄」を探り求めます。毎日十六時間を修行に費やしていれば、妄念は自然に少なくなり、成就も早まります。しかし現在よく見かける仏教の道場は、ただ毎日仏を拝む所が多く、少しの福報を得られるだけのことでしょう。このままでは、仏教は本当に宗教に変身しかねません。

第三、仏学。仏教は学術と哲学に転じた結果です。現在一部の大学で「仏教哲学」という学科が設けられています。仏法は哲学として研究されることです。どうして仏法を哲学として研究されることは、間違いと言われるのでしょうか？皆さんよく考



えてください。仏教教育はよく完備されている大学の教育であり、各学科全部含まれています。しかし哲学になりますと、この一科目だけに限定してしまいます。その為、この見方も間違っています。欧陽氏は素晴らしいことを演説しました。仏教は哲学ではなく宗教でもありません。仏法は仏法そのものであり、一切の衆生にとって必要なことです。どうしてもこのように言い切れるのでしょうか？仏法は我々生活の中ですべての直面している問題を解決出来ます。現在の生活問題から将来の生死一大事まで解決出来ないことはありません。我々の理解している仏教の教育内容の奥深さと幅広さは氷山の一角で、學術と見なされることは完全な間違いです。

第四、邪道の仏教。これは最近三、四十年の間に出現したことであり、非常に不幸な事です。皆さんが周知の如く、仏教は善の教えを主旨にしています。人が良い人間になる事を勧めています。學術仏

教は真理を求め知識を研究しており、社会に危害を加えることはありません。もし邪教になれば、正しい道から外れ、人間性の弱点を利用し仏教の名義で衆生を騙し、傷付け、社会秩序を乱し、民衆の安全を脅かす等の不良事態になります。そういうことは変質しており、変わり過ぎています。しかし、邪教は宣伝文句を使い、人々を誘惑しています。一旦邪教に関わってしまい、騙されたと気づいた時は後悔しても遅いでしょう。

みなさん、現代社会の中には主にこの四種類の仏教があります。我々は目を光らせ、よく見分け、よく考え、一体どういう仏法を学んだら我々が真に幸福をつかめるのかを明白に認識する必要があります。





天から降臨し、弟子がこれを迎える

釈尊が実母のための説法を終え、忉利天宮から降臨した折、大梵天王（マハーブラフマー）が釈尊に説法をお願いした。釈尊の4人の弟子たちは先を争って、我こそ最初に釈尊を迎えようとした。ウツパラバンナは神通力を使って、一番早く釈尊を迎えにいった。一方、スプーティはそこ山の中におり、瞑想状態の中で釈尊を迎えた。釈尊は弟子たちにこう言った。自分にはスプーティの報身が見えた。故に、解空第一のスプーティにそが、自分を最初に迎えに来た者であると。

四、仏陀の教育目標

(一) 仏教の学位制度

仏教が教育であれば、その教育目的は何ですか？

釈迦牟尼仏はたくさんの方の経論の中で度々「阿耨多羅三藐三菩提」を言及します。これは梵語音訳で、尊敬のため訳さず、この事は仏教教育の総目標です。

中国語に訳されると「無上正等正覚」という意味です。それでは三段階に分けて説明いたします。この三段階とは「正覚」、「正等正覚」、「無上正等正覚」であります。

世尊は、世間の人でも宇宙人生に対する覚悟があるが、但し覚悟の程度は円満ではないと説かれました。科学者、哲学者、宗教家たちは、世間の物事をよく知っていますが、まだ「正覚」とは言えませんが、どうしてかという、彼らは覚悟しています。が、煩惱はまだ断ち切れておりません。未だ「貪、

瞋、痴、慢」があります。それに是と非、他人と自我があります。言い換えれば、彼らは凡夫であり、聖人ではありません。それ故「正覚」とは言えませんが、もし貪、瞋、痴、慢、人と我、是と非、煩惱を全て断ち切って煩惱を払えたら、仏は初めてこの人を「正覚」と認めます。「正覚」という学位を獲得出来ることです。仏教ではこの人に「阿羅漢」という称号を与えます。これは最初の学位です。「阿羅漢」の次の学位は「正等正覚」となります。「等」とは仏に等しいことです。しかし、まだ仏になっていません。「等」というのは心の用い方が仏と同じであることです。「阿羅漢」の心の用い方は仏と違い、我々と同じなのです。阿羅漢が我々と違うところは、我々に煩惱があり、彼らには煩惱がありません。この心を仏教では、「識心」と言います。本物の心ではなく、真の心ではありません。我々は、本物でない心、すなわち妄心の働きによって生きています。ですから、人との付き合いは度合いを過ぎない



いよう心掛けるべきです。人に好かれた時には、真実ではないことを悟るべきです。本物ではない感情の前で本気になってはなりません。本気になったら煩惱が起こります。世間の人は、よく好きな人に対し、愛していると言います。しかし、結婚して間もなく、いつの間にか離婚してしまいます。これは人生を真剣に生きていないことです。ですから、感情は真実ではありません。菩薩は真心を使います。真心は永遠に変わらないことです。仏は真心を使い、菩薩も真心を用います。仏の心は「円満的真心」であり、菩薩の心は「分証的真心」です。仏は、經典の中で月に喩えて説かれています。仏の心は十五夜の満月の如きです。そして、菩薩の心は三日月の如きです。三日月の月光にしても、本物の光であり、只まだ円満になっていないだけのことです。欠けた月も菩薩の心であり、真心であり、ただまだ円満になっていないだけのことです。満月になると、「正等正覚」になります。阿羅漢と辟支仏が用いる心

は、水面に映っている月と鏡に映っている花の如きであり、それは「鏡花水月」のことで、本物とは言えません。心の持ち方から見ると、菩薩と仏の心は極めて相似しています。本物の心です。初心の菩薩は一品の無明を破り、一分の法身を証得すれば、その心も本物の心になり、絶対に虚偽がなく、「正等正覚」になります。この段階の学位は「菩薩」と称せられます。阿羅漢が学士、菩薩が修士、仏が博士に喩えられます。其の為、仏とは通称であり、釈迦牟尼仏は一人の専属名字ではありません。衆生は智慧が究極円満に達したら、真心円証の仏となります。仏が達した境地は「無上正等正覚」のことです。前述したように仏、菩薩、阿羅漢は仏教学位の名称であることが分かりました。仏菩薩等は人間で、仙人や神ではありません。仏菩薩を神様と思つたら間違いです。要するに仏は宇宙人生の真相を完全に明瞭にし、円満なる智慧を獲得している人です。円満なる智慧を得ることは仏教の教えの最終目標



です。従って、仏法は智慧の教育であり、智慧の教育学であります。

(二) 仏教の教学目標

仏教教学の目標は、徹底的に「迷信」を除くことにあります。仏法では、よく「破迷開悟、離苦得樂」と言います。「迷」とは、自分自身と自分が生きている環境の真相について明瞭にしていないことです。真相が分からず、見方と考え方が誤っている故、行動も間違ってしまうです。その結果、苦を招きます。もし真に宇宙人生について理解することが出来て、見方、考え方、遣り方が全て正しければ、人生が楽しくなります。ですから、「破迷開悟」（迷いを除いて悟りを開くこと）とは、原因の事を言います。「離苦得樂」（苦を離れて樂を得ること）とは、結果を表す事です。この目的を達成する為には、「破迷開悟」（迷信を除き、真の智慧が開けること）をしなければなりません。これによつ

て、現実の環境の中で識別能力が備わるようになります。何を識別するかと言うと、真、妄、邪、正、是、非、及び善、惡、利、害などのことです。そしてすべての衆生が理性、大覺（仏のさとりを得ること）、奮発、積極性、樂觀、前向きで慈悲心を以て世間に利益を与えるような宇宙人生觀を築ける助けとなります。仏教は消極的ではなく、時代遅れでもありません。我々に真の利益をもたらしてくれる事は明らかです。『無量寿經』に曰く、仏教はあらゆる面から衆生が直面している苦難と問題を解決してくれます。我々各人に、一生の中で幸福、家庭円満、社会調和、豊かな国家、世界和平という目標を実現させてくれます。これこそが仏教の世間に於ける目標です。更なる遠い目標は、煩惱を断ち切り、三界を越すことで、更なる殊勝な事です。所以に仏法は教学であり、真、善、美、慧、及び永遠なる真実と幸福などの教育成果をもたらしてくれる事を認識すべきです。



為佛弟子當行



孝道孝乃人之本心

若無孝行他善雖多

皆偽必不成德譬如艸

木失其根本也若行

孝道修德易成



仙の弟子として孝道を歩もう。孝は人が本来持つものであり、心に孝がなければ、いくら善行を積んでもそれはすべて偽善であり、徳にはならない。それは根を失った草木のようである。行為に孝道があれば、徳を積むことは容易である。



五、仏教教育の入門―― 地蔵経

(一) 大円満

仏教の教学目的と方針について勉強しました。これからは仏が一生の中で説法した法のことを説明しましょう。仏はどういう法を説いたのでしょうか？それは宇宙人生の真相を説き明かして下さいました。後に仏の弟子たちがそれらを文字として記録し、現在の経典になっているのです。経典は仏教の教科書で、大乘仏教の啓蒙となる経典は『地蔵経』であります。仏教の入門書です。仏法に含まれている真実なる意義は『地蔵経』の中に明白に表されています。但し言語ではなく、光を発することによって示しています。仏はこの法会の始まりから大いに光明を発し、無量なる光明を発していました。経文

には次のように記載されています：大円満光明雲、大慈悲光明雲、大智慧光明雲、大般若光明雲、大三昧光明雲：大讃嘆光明雲までと記しています。十の光明雲は法を表しています。十種類のみではなく、無量無辺の意味を表す事です。中国人の一般的な考えでは一から十までは、完成する意味があり、「十」は円満を表す数字であり、これは『無量寿経』の「無量」と全く同じ意味です。『無量寿経』の「無量」はいわゆる『地蔵経』の「円満」と同じ事です。円満とは、十種のことを述べられました。が、無量と言えば「寿」だけを挙げました。この中に深い意味が含まれています。無量な寿だけではなく、すべてのことが無量です。一切の無量の中で、寿命が一番重要です。どういう訳でこのように言えるでしょうか？譬え無量なる土地と無量なる財宝を所有しても、もし寿命がなければ享受することは出来ません。その為、浄土宗では単なる「寿」で一切



の無量を代表し、代わりに『地藏經』では十種類の光明雲で代表しています。「一即是多，多即是一」（一は即ち多数で、多数は即ち一である）。無限な宇宙人生をすべて説明し尽くせます。仏はどういう事に基づいて説法され、宇宙人生の真相を説明されたのでしょうか？第一は、「大円満光明雲」です。

密宗の「大円満」は顯宗の「真如自性」の事です。真如自性はすなわち大円満です。真心、一番である真諦は皆大円満を示しています。これから述べられる九種類の事は皆「大円満」を説明するものです。「慈悲」、「智慧」は円満で、すべてが円満であり、万事が円満です。円満でない事ありません。これを大円満と言ひ、すなわち我々の真如本性です。仏はここから無量無辺な經典を説かれ、宇宙人生の真相を教えて下さいました。説かれた全てのは我々が本来具わっているもので、元々持っているものです。そのために世尊が四十九年間にわたり

説法されたのは、すべて我々自身の事に対してのものです。ですからこの教育は他の一般的な教育と違って、我々自身と関り切れないものです。要するに、世尊は一切の衆生にどういう法を説いたかという、一言で言えば大円満なる法を説かれていました。

世間の人々は毎日何の為に苦勞して一生懸命働くのでしょうか？どういう原動力で、毎日早く出て遅く帰るような事を維持させているのでしょうか？みなさんが周知の通り、「名」と「利」の為です。「利」は「名」より重要視されています。もし何も報酬がなく一文も貰えなかったら、皆さんはまだ仕事を続けるでしょうか？自然に気が落ちて、氣力が失われて仕事を辞めてしまうでしょう。つまり社会機能を回転させる原動力は「利」があるからです。その次は「名」（名譽）の為です。仏と菩薩が我々より大変辛勞で十法界の中で努力し、真面目に教学



をするのはどういう力に動かされているのでしょうか？この力は二番目の「大慈悲光明雲」によるものです。母親が自分の子に、特にまだ赤ん坊である子に対し、至れり尽くせりで面倒を見るのは何の為でしょうか？利の為でしょうか？それとも名の為でしょうか？どちらでもありません。それは内心からの愛によるもので、この愛を込めている心を慈悲心と言います。仏は大慈悲の心で一切の衆生を見守っています。この愛は平等で無条件なものです。この大慈大悲は表し切れない強大な力で永久に諸仏、諸菩薩を動かしています。諸仏、諸菩薩は終わりなく十方世界で無量無辺の衆生を教化されています。慈悲とは重要な事であり、「大円満光明雲」の次に重要なのは「大慈悲光明雲」になります。仏法を学ぶ事は、自分自身に対する修行であり、他人にも勧め、法を押し広め、衆生を利益する殊勝な行爲です。仏法を他人に紹介し、勧めるのはどういう力

からなるのでしょうか？これも慈悲の動力によるものです。これが本当の仏法です。もし「名」の為、すなわち知名度の為に説法するなら、或いは「利」の為、一回の講演にいくらかの報酬をもらう為であるならば、大間違いです。それは仏法ではありません。完全に仏法の精神に反する事です。仏法では、自分が修行する事と、他人を教化する事は完全に無条件です。仏法の流通も同様です。現代版の經典には、よく「著作権により複製禁ず」という文字が書かれています。これは商売であり、衆生を利益することではありません。私は仏教の本を貰ったら、まず版權ページを見て、もしそのような文字があれば、絶対に読みません。どうしてかというと、眞の善知識は衆生に恩恵を受けさせる為であり、版權は決して要りません。その上、複製を歓迎します。眞の善知識は、常に広大な心、報恩、慈悲、救済の精神を最優先とし、心と行は相応し、内から流れ出た



言語と教誨は真実性があり、必ず後世の参考と為になります。心の狭い人、すなわち名と利を捨てられない人は、良いものが書けません。大円満を語るのは無理です。そういう本を読むという事は時間の無駄であり、全く意味がありません。

慈悲とは理性に基づくものであり、感情的になつてはいけません。感情的になるのは迷いであり、間違いです。仏教では、よく「慈悲為本、方便為門」（慈悲を原則とし、方便を方法とする）と言います。これは仏が衆生を教化する二大原則です。仏教では、又「慈悲は災難を生み出し、方便も卑劣に繋がりがねない」と別の言い方があります。これは最初の説と正反対になります。その理由は、もし理性を失ったら、感情で事を判断し行動するとなると、慈悲は災難になり、方便も卑劣になります。そこで続けて「智慧大円満」を説きます。円満なる智慧より円満なる慈悲が自然に外に現れます。智慧は方便

法です。種々多様な方法手段と大慈悲の力で押し動かして、このように無尽な衆生が迷いを除き、悟りを開き、苦を離れ快樂を得ることが出来ます。四つ目は「大般若光明雲」、円満なる般若。「般若」と「智慧」はどういう違いがあるのでしょいか？『大般若経』では、「般若は無知、無所不知」（自性の智慧は何も知らない、作用すれば知らない事はありません）と説かれます。「無知」とは「般若」のことで、「無所不知」とは「智慧」の事です。言い換えれば、ひとつは「体」で、ひとつは「用」（作用、受身）です。亦は別の角度からより明白になります。宇宙現象を説明できる智慧は「智慧」で、煩惱と妄想を断ち切ることの出来る智慧は「般若」です。般若である智慧を「根本智」と言います。宇宙現象を説明できる智慧は「後得智」と言います。「後得智」は「根本智」より生み出されたものであります。もし宇宙が大円満であることを体得出来な



ければ、その事実を説明できないでしょう。中国の禅宗も単に禅波羅蜜と言うだけではなく、「般若波羅蜜」と言います。六祖恵能大師は『壇經』の中で、いつも「摩訶般若波羅蜜多」を唱えるように弟子に勧めています。つまり禅宗は禅定だけではなく般若も修しています。

般若、智慧とは、智慧の体と智慧の作用で、「無知」と「無所不知」のことでもあります。無知である般若でしか煩惱と妄想を断ち切ることは出来ないのです。妄想と煩惱が完全になくなら、自性の大円満を体得出来、本来ある能力が回復されて来ます。作用が働けば知らないものがなくなり、出来ないことがありません。智慧と般若の光明雲にはこういう深い意味が含まれています。この二種の智慧、般若と智慧は、共に前に言及した教学の目的である「無上正等正覚」の事です。すなわち、究極で円満なる智慧です。

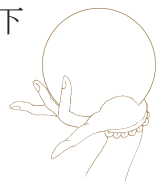
智慧とは、我々の本能と自性が本来具わっているもので、元々あるものです。それでは、どうして今はなくなったのでしょうか？ 仏はその真相を教えてください。それは我々が迷ってしまったからです。でも本当は失ってはいません。覚悟すればまた智慧を取り戻せるのです。どういう方法で迷いを除き、本性にある円満なる智慧を取り戻せるのでしょうか？ 仏はこの方法を禅定にあると教えてくれています。『地蔵經』でいう「大三昧光明雲」です。「三昧」は梵語で、「正受」と訳され、すなわち禅定のことです。

仏法で修行とは、修は修正で、行は行為です。すなわち間違った行為を修正することです。行為は言い切れないほど多く有ります。ですから仏法は無量無尽な行為を主に三種類にまとめています。一、身体より生じた身業行為です。二、言語より生じた口業行為です。三、心に念頭が起きるといふ意業行為



です。幾ら多様な行為があっても、全部身口意に包
括されます。つまり「三業行為」と言います。考え
の間違い、見解の間違い、話の間違い、動作の間違
い、これらを間違った行為と言います。一切の間違
いを修正することは修行になります。三業行為を修
正することは心を主とします。禅宗に曰く「修行は
根本から為すべきである」何を根本というのでしょ
うか？「心」は根本になります。念頭が起きること
は根本のことです。心が正しければ、言語と行動は
必ず正しいし、心が正しくなければ、真似しても、
本物にはなれず、すぐに見破られてしまいます。と
いう訳で、心から修正する事が大切です。三昧は
「心定」（心は定に維持されている状態のこと）で
す。仏法の行門は無量無辺にあります。八万四千の
法門（法は方法、門は戸と道のこと）があります。
この沢山の方法と道は、すべて禅定を修する為にあ
ります。禅宗だけが定を修するという誤解を無く
して下さい。実はどの宗派でも禅定を修していま

す。浄土宗の「二心不乱」とは、禅定です。教下
では「止観」を修し、止観は禅という事です。密宗
では「三密相応」（身、口、意が清浄になること）
と言います。相応とは禅の事です。従って、仏教各
宗派と法門で用いられる名称は違いますが、實際に
は同じ事を指しています。ですから、法は平等であ
り、異なる道でも同じ終着点に到着出来、上下の順
位はありません。自分自身に合った方法で、自分が
使いやすく自由自在に發揮出来る方法を選ぶべきで
す。仏法の学習で最も大切なのは、一種の法門に専
念する事です。たくさんの方門を勉強すれば迷いを
生じ、かえって成就が難しくなります。これは非常
に重要な認識です。「三昧」は仏教で最も大切な部
分と要点です。戒、定、慧という三学科で、戒があ
るため禅定を得られ、禅定があるため智慧が開きま
す。いわゆる、般若智慧は禅定より生み出されたも
のです。自性は元々定の状態にあり、動く事はない
ません。これを「大三昧光明雲」と言います。



十種の光明雲の前半は原理で、後半は原則になります。原則の一番目は「大吉祥光明雲」です。吉祥とはどういう意味でしょうか？本来得るべきものが獲得出来たら「吉祥」で、貰うべきではないものを得たら吉祥ではありません。これが吉祥の定義です。ここには非常に深い意味が含まれています。無尽な時空と法界まで、理論であつても、現象であつても、すべて我々の知るべき事で、一切の万事万物の受用も我々が得るべきものです。これを「大吉祥」と言います。例えば、念仏し、西方極樂世界を一心に思うと、西方極樂世界での依正莊嚴（自身と環境が殊勝である）が享受出来ます。もし華藏世界に生まれたら毘盧遮那仏の依正莊嚴が享受出来ます。これは吉祥の本来の意味です。仏が機に応じて説法することは最吉祥な事です。仏が法を説く原則は、一、真理に反しない事、すなわち決して宇宙人生の真相に反する事をしません。二、衆生の程度に適合する事です。もし程度が釣り合わなく、程度の

浅い人に深い意味を説くと理解出来ません。これは無駄で、不吉祥になります。程度の高い人に易しく説くと興味を失い、不吉祥になります。ですから、機と理に適合した説法が最も吉祥な事で、説く側も聞く側も無駄がありません。真実なるご利益を得られて、これが最も吉祥な事であり、大いなる吉祥で円満なる吉祥です。

次は「福德」に入ります。大吉祥は機と理に合つて、衆生の基礎に適合する事です。現代の人々は、いつも思い求めているものは富、智慧、健康と長寿です。これらは今の生活に欲しいもので、「福德」の事です。もし仏がこれらのものを与えてくれなかったら、仏法を学ぼうとする人々は振り返る事もなくすぐに去って行くでしょう。どうしてでしょうか？今欲しい物が手に入らなければ、将来の大福報というのは見通しもつきません。いつ享受出来るのかには疑問が生じます。因って、目の前の福利を必ず得られてから、将来はもっと大きな福報がある事



を信じてもらえるのです。花と果実のように、美しい花からきつと良い実が実ります。もし花が咲かなかったら、良い実を結ぶと言うことを信じてもらえないでしょう。ですから、吉祥の後は必ず大福德があります。「福德」は果報であり、果に応じた因があります。一定の因は一定の果を生みます。

仏教では「功德」と言うのは、福德と違って、真実性のあるものです。諸仏は仏果を証得した後でも、百劫をかけて一途に福報を積みまます。その理由は、福報が無ければ衆生を救えません。説法が出来ても、福がなければ信じてもらえないからです。もしある人が、自分の大福德は修行によって得たものと言え、見る人は羨ましく思い、自然にこの人を学ぶようになるでしょう。ですから、智慧の上に福德があれば、衆生を済度することが出来ます。所謂「戒によって定が生じます。定によって慧が開く」事です。「戒、定、慧」という三学は功德に属しま

す。これは仏法が教えてくれる真の事で、福を修し、慧を修し、福德と智慧を共に修する事です。

修行には方法が大事です。方法の中に標準は重要になります。ここで頼る標準は「大帰依」の事です。

大帰依とは、普段で言う「仏、法、僧」三宝に帰依する事ではなく、大円満なる自性に帰依する事にあります。すなわち円満なる自性三宝であり、「覚、正、浄」に帰依する事です。最後は、「讃嘆」になります。讃嘆とは、実を言うと、衆生を教化することです。自性の円満なる功德を讃嘆し、自性の無量なる功德を讃嘆する事です。仏の教えは我々の円満なる自性を悟らせることです。禅宗ではよく「生まれる前に本来の姿」と言います。「本来の姿」とは、大円満なる自性ということです。仏法の教えと学びはすべてこれを目標にし、方向とします。

以上述べたのは『地蔵菩薩本願経』に拠るものです。経文の始めには世尊が光を放たれ、無量無辺の



意味が含まれています。ここで十種（十は円満の意味を代表する）を略説しています。この経文は、よく簡単にそのまま読み通されます。この中に深い意味が込められていることを知らないからです。『地藏経』だけがこれを基本にしているのではなく、仏の説く無量無辺の経論は「大円満」の顕れです。前の五句は大円満の自性で、後の五句は大円満の起用で、すなわち大円満が作用する事です。これは仏陀教学の依拠で、このような経文は仏が大乘經典の中でよく説かれています。時に言語で表し、時に光を放つ事によって表します。こういう事を知らなければなりません。理解した上で誦経すれば味わいが出て来るでしょう。

（二）大乗円満法／

地藏・観音・文殊・普賢

大乘仏法の学習の次第は四大菩薩を代表としま

す。第一位は九華山の「地藏菩薩」、第二位は普陀山の「観音菩薩」、第三位は五台山の「文殊菩薩」、第四位は峨嵋山の「普賢菩薩」で、四大菩薩が全体の仏法を代表します。

「地」は大地で、大地に育つ植物と穀物が我々を養っています。我々は大地を離れたら生存出来なくなり、地下の資源と宝蔵は我々の生活を満足させてくれます。よって、仏は「大地」を我々の「心地」（本心、心性のこと）と喩えます。我々の心地は実に円満で、本来無量な慈悲、無量な智慧、無量な般若、そして無量な吉祥、無量な福德が具わっています。ですから仏の説く、一切の経論は無量です。一切の經典ばかりではなく、一部の経、更に一文字まで大円満です。みなさん、この道理が分かればその味わいが無尽である事を理解出来るでしょう。『地藏経』は主に仏教に入門する時の最初の学習方法、「孝行」と「尊師」という事です。仏教教育は「師



「道」で、「師道」は「孝道」の基礎の上に成り立っています。親孝行の心がなければ、師を尊敬出来るとは考えられません。老師を尊敬しなければ、いくら学問と能力のある師でも学問と能力を伝授出来ません。ですから、「尊師重道」（師を尊敬し、道を重んじること）は学業を成就させる事です。『地藏菩薩本願經』は仏教の『孝經』です。「孝道」は大円満の大いなる根本です。一切の円満はここから始まります。大円満を広げて進展させると、「孝行」と「尊師」になります。孝行を発揚すれば、一切の衆生を孝順することとなり、分別、執着を無くし、一切は平等です。無尽な時空と法界にある一切の衆生を孝順する事は観音法門となります。観音は地藏を發揚させたものです。地藏がなければ観音もありません。建物を建てるのと同じように、一階がなければ二階もあります。観音は地藏の延伸で、大慈大悲という事です。「孝、慈」とは、感情に任せ

て物事に当たってはいけないという意味です。理性に基づいて真実な受用が得られ、正面の利益になります。第三位の菩薩は文殊菩薩で、智慧を代表します。普賢菩薩は「実践」を代表し、孝、敬、慈悲、智慧を日常生活に応用させる事です。我々は朝から夜まで、対人、対物、対事などあらゆる面に於いてこの原則に反していなければ、普賢菩薩です。普賢菩薩はどういう修行をされていたのでしょうか？誰でも普賢になる事が出来、普賢法門は円満なる法門です。『華嚴經』に曰く「普賢行を修しなければ仏道は円覺出来ない」。それは普賢の心は大円満であり、すべての願は大円満であり、すべての行（行為）は大円満であるからです。この中に真実の智慧がなければ普賢の大願は円満にはなれません。四大菩薩はこの意味を表し、大円満なる仏法を代表しています。所以に、地藏から孝行を学び、更に観音の大慈、文殊の大智、普賢の大願大行を学びます。



南無阿彌陀佛

真誠清淨平等正覺慈悲

看破放下自在隨緣念佛



六、仏法修学の五大科目

(一) 三福

仏の説法は非常に生き生きとしていて、異なる人々にそれぞれ相応する教化をし、決まった法はありません。仏の教え方はどういように変化しても大円満から離れません。言い換えれば、自性からの表れです。すなわち法門は平等であるという事が分かります。『華嚴経』で述べた主従は円満です。主があれば、その他は従となります。世尊釈迦牟尼仏が主であれば、他の諸仏はみんな従になります。毘盧遮那仏が主であれば、釈迦牟尼仏は従になります。阿弥陀仏が主であれば、毘盧遮那仏は従になります。任意のどの仏でも、主になって従にもなれません。菩薩でも例外ではありません。もし観音菩薩が本尊ならば、諸仏は従になります。『地蔵経』を主としたら一切の経は従になり、『金剛経』を主とし

たら『無量寿経』、『華嚴経』、『法華経』は従になります。それ故、仏法は真の平等、真の無碍であることがわかります。次は教学の綱領に進みます。

仏教の中でどの法門を修してもこの法門が一番と讃嘆されます。この法門が一番と言うのは他の法門は第二になるというわけではありません。この点について、はつきりとさせて置くべきです。誤解と過失にならないよう注意すべきです。どういう過失かと言えば、自分を褒めて、他人を貶す事です。これは大いに戒を破る事になります。完全な間違いです。学習の綱領上では、『観無量寿仏経』の縁起についてある典故があります。韋提希夫人の家庭が思いがけない出来事に遭いました。彼女は初めて世間の苦しみを理解し、釈迦牟尼仏に「この世間は本当に苦難がいっぱいで、もはや未練が残っていません。もっといい生活環境、もっと清涼な世界、造悪の無い世界があれば、私はその世界に往生したいのです」と



言いました。釈迦牟尼仏は非常に慈悲深く、十方諸仏の世界を神通力で彼女の目の前に変現し、彼女自身に観察させ、選択させました。彼女は、釈迦牟尼仏の期待に背く事なく西方極楽世界を選びました。世尊にそこに往生する方法を教示するようにと懇願しました。世尊は方法を説明する前に先ず三種の浄業を修める方法を教えました。そして彼女にこの三種の浄業は「三世諸仏の浄業正因」（正因というのは直接な原因、一切のものに本来そなわっている理）であることを説きました。これは非常に重要な話で、三世一切諸仏の修行証果は皆この三福を基礎としています。建物を建てるのと同じように、高さや様式に関わらず土台は一緒です。「浄業三福」は仏法の共同なる基礎であります。必ずこの基礎の上に建てることによって一切の仏法を成就させる事が出来ます。とりわけこれは非常に大切な事です。

1. 人天福

浄業三福は第一：「孝養父母、奉事師長、慈心不殺生、十善戒を修す」第二：「三帰を受持し、戒を備え、威儀を犯さず」第三：「菩提心を発すること、因果を深く信じ、大乘を誦誦し、人に仏法を薦めること」と述べています。経の中で仏が説く「善男子」「善女人」をよく目にします。善の定義とは、善の標準とは、三種の浄業を具える事です。十一の項目を全部守れたら大乘経の基準の善男子、善女人と言えます。その標準の高さは明らかです。小乗経の善男子、善女人であれば、二番目の項目まで実行すれば十分です。もし人道、天道の善男子、善女人であれば、一番目の項目だけが具わっていれば十分です。『地蔵経』と『無量寿経』は大乘仏法です。中に言及した善男子、善女人は三福十一項目を全部具えていなければなりません。もし一つだけでも守れなかったら善男子、善女人の資格がありません。



せん。みなさんは読経の時に自分が「善男子」「善女人」に当て嵌まるかどうか考えた事がありますか？

仏が説法するに当たっては、基本的な修学であろうと、又は宇宙人生の真相についても、一字一句までも大円満に相応しています。すなわち真如本性から顕れたものです。第一句を見ましょう：「孝養父母」の「孝」という字は会意字です。この字の意味を真剣に理解して頂きたいのです。この字の上の部分は「老」で、下の部分は「子」です、これは我々に訴えているかのように前代は後代と一体の事です。一であって二ではありません。西洋人は父と子は二であって一ではないと主張し世代間の溝を生じさせます。これは孝道ではありません。「孝」には世代間の溝がありません。過去に過去があり、未来にはまた未来があります。過去には始まりがなく、未来には終わりが無く、無始と無終は本来一体で

す。これは仏法の中でよく言う事で、縦に三際にわたり横に十方に覆われます。言い換えれば、全宇宙は「孝」という字の表れで、無尽な時空と法界までも一つの「孝」という字で表現しています。どのような人が孝道を円満させることが出来るでしょう？諸仏如来のほかはありません。もし成仏していなければ、孝という字を円満させることは出来ません。

「孝養」の孝は理性を指すことで、養は行徳を指します。単に父母の身を奉養するだけではなく、父母の心と志を養わなければなりません。『戒経』に曰く「一切の男子は我が父、一切の女人は我が母である」これは父母を孝順する心を発揚させる事で、虚空遍法界（虚空をつくし、法界をすみずみまで広く行き渡っていること）の全ての法は「孝道」の表しです。ですから大乘仏法は孝道を基礎として建てられています。仏法は師道であり、孝道の基礎を失くしたら師道も成り立ちません。人は親孝行をしな



いで師を恭敬出来ることはあり得ません。必ず何らかの企みがあります、師のご機嫌を取ろうとしているか、人に言えない目的があるのに違いありません。父母を孝順し更に師を尊重するのは理に適います。誰でもこの様であるべきです。この事実関係を明瞭にすれば、仏と菩薩、中国の古くからの聖人先賢が我々に教えてくれたのは「孝道」だという事が分かります。『地藏菩薩本願經』は仏教の『孝經』です。「孝行」だけでも我々の自性に具わる無尽な宝蔵を開発することが出来ます。因って、この三種の淨業の中で、孝行が一番目にある理由です。根本の根本であり、非常に重要な事です。中国人は先祖を祭祀する事を重要とし、祖先は我々から遙か千年万年の昔に在るのに、どうして年越しと節目になると記念するのでしょうか？内の道理を知れば記念する意義も明瞭になるでしょう。先祖は我々と一体ですから、隔たりはありません。誠心誠意、記念すれ

ば自性に相応します。遠祖を忘れていなければ目の前の父母を孝順しない訳がない、きっと親孝行をします。父母を孝行する人は必ず師長を尊敬します。これは自性の徳の受用です。師長を尊敬せず、老師の言うことを聞かず、勉強もしなければ、父母を心配させることになり、それは不孝な事です。又、兄弟仲は隔てなく親密であるべきであり、もし仲が良くなかったら父母を心配させるでしょう。それも不孝です。従事している仕事に真面目で責任感が強い人は必ず奉公遵法します。父母に心配を掛けないことは孝順です。したがって、孝順は自性に具わる徳用が究極円満になることで、仏は我々にここから学び始めるようにと教示しています。師を尊敬すると言ったら、仏は我々の最初の師で、三千年前の創始者である本師、この本師をいつも思い、尊敬していたら目の前の師を尊敬しない訳がありません。同じ道理で仏像を供養するのはそれが神明ではなく、而



してそれを世尊の遺像と見なします。報恩という意味です。それは仏の弟子が仏像と先祖を供養するという理由です。非常に深遠な意義を有します。仏像と先祖の位牌を見る度に孝道と尊師を重んじる念を思い起こさせることでしょう。

仏法は『地蔵経』で大円満を述べた後、続けて「慈悲」を説きます。三福の中で孝行と尊師の次は「慈悲」です。ここで、「慈悲」が本性にある徳である事が分ります。非常に重要な科目です。孝行と尊敬の拡大は慈悲になります。慈悲とは、第一は不殺生、奥深い意味が含まれています。『地蔵経』を熟読し完全に理解していなければ、この句の真意に対する会得は難しいでしょう。本当に体得したら一切の悪業の中で殺業は最も罪の重いことがわかります。どういう訳でしょうか？一切の命ある衆生は自分の生命を惜しみます。みんな生きようという欲がありますから、死ぬことを恐れます。それは前世で

の善悪さまさまの所為が原因となって、現世でその結果として受ける種々の報いだと言っても、その人は果報を受ける時には前世で他人を殺傷したから、今世でその人に殺害されるのは当然だと思っています。前世で彼の肉を食べたから、今世で彼に自分の肉を供養すべきと思っています。もし彼がそのように考えられたら、業による債がすべて返済されて無になるでしょう。もし彼がこのように考えるのではなく、恨みを忘れず、ある人に殺され来世にはその人を探し出し必ず殺そうと思っていたら、延々と続き、終わりがありません。積もった恨みが益々深まっていくことは一番恐ろしい事です。「慈悲」が重要になります。慈悲に含まれている意味は無限に深く広く、仏はとりわけこのことを重要視しています。言い換えれば、殺生は恩師不敬で、父母不孝です。恩師である仏が五条の根本戒を教えて下さいました。第一条は不殺生です。もし我々が、まだ殺



生し、恩師の教誨に背いていたら、師に対し不敬になります。師を尊敬しないことは父母不孝にもなります。師の教訓に従うことは父母の子に対する期待です。もし師の教えに従わず衆生を殺したら、慈悲心が喪失するだけではなく、孝行と尊敬の念も喪失してしまいます。ここに深遠で計り知れない意義があり、よく吟味して下さい。最後の句は「十善業を修す」十善業は世間に於けるあらゆる善の標準です。仏曰く「この十種の善業を修すれば、決して三悪道に堕ちることはありません」上品の十善であれば、天界に生まれることができます。禪定と四無量心を加えれば（無量な衆生に対し、樂を与え、苦を除かせようと起こす四つの心。慈無量心、悲無量心、喜無量心、捨無量心の四つ。四等心。四無量）、高い天界に生まれることになります。色界天、無色界天などの天界です。仏は「十善」を三大類にまとめます：身業・口業・意業。身業には不殺

生・不偷盜・不邪淫の三種類があります。これは在家の人に対するもので、出家の人の場合は不淫欲となります。貪欲と愛を完全に断ちます。淫欲を断たなければ、功夫や善行がいくら優れても、定力がいくら良くても、せいぜい欲界天に生まれます。欲界には六層の天があります。上に行けば行くほど欲が薄くなります。抛って、真の禪を修する人は禪定を得れば、初禪（四禪の一つ。色界における禪定の最初の階位で、まだ喜・樂等の五種の心のはたらきが伴う状態。これを修して色界の初禪天に生まれる。初静慮（しよじょうりよ）ともいう）を得るだけでも、定力によつて淫心を伏することが出来、決して作用しません。財・色・名・食・睡と五種の念頭も起きず、根が絶えていなくても禪定の功夫によつて妄念が伏せられて、起きない状態に保たれます。この様にすれば初禪天以上に生まれることが出来、この事実が明白になれば参禅して定を得ることは容易



でないことがわかります。参禅するとき、真面目に考えて見て下さい。財・色・名・食・睡という五種の欲に心を動かされているかどうか。もし心を動かされていたら初禅天に生まれません。真に影響されなくなったら禅定成就する事が出来ます。因って、禅定を学ぶ人は沢山いても禅定を体得出来る人は僅かです。小定が少しあるかもしれませんが、真に禅定を得て色界天に生まれる人は多くありません。不偷盗とは与えられてなければ取らない事です。たとえばある人が税金を少なく納めようと考える事、いわゆる「脱税」は偷盗です。国家の所有物を盗む事です。犯した罪は重いです。一人の物を盗めば、将来その人に返せばいいものですが、国の物を盗んだら、この国に沢山の納税者がいれば、みんな債権者になります。米国には二億の人口がいて、二億の人が債権者となります。これは恐ろしい事であり、返しても返し切れず、永遠に悪道で罪を償うようにな

ってしまいます。本当に仏法を学ぶ人であれば、必ず奉公遵法し、不正に利益を得る事は決してしません。つまり、不偷盗戒を犯さず・不邪淫戒を犯さず・不殺生戒を犯さないことを身業清浄と称します。口業には四種類あります。口とは言語を指し、それに四種類の善法があります。第一、不妄言です。妄言とは不誠実のこと、人を騙し正直でないことです。第二、不両舌です。両舌は是非を挑発し、両方の人にそれぞれ相違したことを言って、両人を仲たがいさせることで、陰口を言うことです。甲の前で「乙は貴方の悪口を言いました」乙の前で「甲は貴方の悪口を言いました」これは人々を混乱させて、故意に有無に関係なく両舌を使うことです。この社会には、多くの人は無意識のうちに是非を挑発しています。言葉を伝える時は、伝えれば伝えるほど本来の意味が曲がって行き、間違って伝えることになります。元々この意味はなかったのですが、伝言の



中で任意に意味を増減し、本来の意味が本末転倒してしまいます。これは多大な過失です。小さければ、両者を反目し合わせることであります。大きければ両国に交戦をさせることになります。この様な過失は甚大であり、決して起してはいけません。第三、不悪口です。悪口とは言葉の節度や礼儀がなく、人をあしざまにのしることです。人が聞いたら気分を悪くするようなことです。第四、不綺語です。綺語とは企図があつて都合よく言うことです。非常に人の気に合う言葉で、ただし目的は不純です。社会上の多くの映画・歌劇・音楽は一見害の無いように見えますが、実際よく考えて見るとこれらは大概人に殺・盗・淫・妄を教えています。この様なものは全部綺語に属します。口はこの四種の業から遠のくと、口業清浄となります。

第三は意業です。心にこうしようと思うことで、心の働きです。思業とも言います。あらゆる念頭は

三大類にまとめられます。不貪・不瞋・不痴です。

「貪」は貪愛で、けちや物惜しみすることも含まれ、欲望は満たされず、命を惜しまず満足を追い求めることは貪欲です。手に入った物を手放せない。人の役に立つために施せず、これをけちと言います。修学には一番の障碍になります。仏教では我々に「布施」の手段でけちと貪欲の障碍を取り除かせます。数多くの修行者は名声、富と五欲六塵（五欲、色・声・香・味・触の五境に対して起こす情欲。財欲・色欲・飲食欲・名欲・睡眠欲の五つの欲望。六塵、六境のこと。心を汚して煩惱を起こさせるところから、塵という）などに対する貪欲がなくなり、非常に有り難いことです。しかし今度は仏法に対して欲を起します。これもあれも勉強したくなります。よく考えて見てください。彼の貪欲はまだ断てていません。仏法は我々に欲ある心を断つことを教えていることであり、貪欲の対象を変えさせる



ことはありません。以前は世間法に執着し、今は仏法に執着しています。貪欲は未だあります。これは間違いです。絶対に正しくありません。因って、仏法にも、世間法にも欲があつてはいけません。貪欲は一切の罪障の根源です。その次は瞋恚です。瞋恚とは自分の思いと違うものに対して、怒りうらむことです。どうして瞋恚になるのでしょうか？貪欲が満足できず、瞋恚を起します。瞋恚は大きな煩惱です。この「貪・瞋・痴」を三毒煩惱と称します。「けち」は悪鬼になる業因です。死んだらどうして悪鬼になるのでしょうか。貪欲が断てていないことです。どうして地獄に堕ちるのでしょうか。瞋恚が断てていないことです。どうして畜生に変わるのでしょうか。愚痴です。愚痴とは、智慧がないことです。世間法や仏法には真偽があり、邪があり、是非があり、善悪があり、弁えられなく、認識が足りなく、偽を真と見なし、邪を正と見なし、故意か否

かに関わりなく、「愚痴」です。これらの三毒煩惱は、悟りにとつては一番の障碍になります。仏法の修学は特に禅宗の祖師大徳が「根本を修す」と提唱します。根本とは心のことです。貪・瞋・痴を遠ざけ、消滅させ、自然に真心が顕露します。これを根本修行といいます。

合わせて身三、口四、意三を十善業と称します。我々は孝養父母、奉事師長、慈心不殺を奉行し、実践することができれば世間の善人と言えます。しかしまだ仏の經典の中で説く善男子、善女人に適っていません。その標準はもつと高いものです。最低の標準でも容易に至らないでしょう。台湾では、政府は近年良い人と良い事を称えようという風習が盛んになっていますが、本当に良い人でしょうか？これらの条件が具わっているでしょうか？もしこの四条が具わっていなかったら、選抜された人は良い人とは限りません。良い人の標準は前述した仏法の四つ



の条件を守ることです。簡単には出来ませんが、これは善の最低の標準です。真剣に修学しなければなりません。

2. 一乗福

三福の第二は二乗福であり、小乗仏教ということ です。大乘は小乗を基礎とし、隋唐の時代に、小乗 仏教は中国に伝わりました。翻訳された經典は完璧 に完成されていて、一定の期間に盛んでしたが、期 間は長くありませんでした。唐朝の末期に小乗は 段々衰えていきました。どうして小乗仏教は中国で の伝承が絶えたのでしょうか？昔の仏法を学ぶ人達 は儒家や道家の基礎を有していました。中国の儒学 や道学は、十分に小乗に取って代わることが出来 ました。道家は道教ではありません。儒家や道家の 思想は大乘に非常に近いです。因って、中国で儒と 道は小乗の代替になりました。過去は、仏法を学ぶ

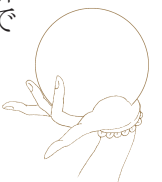
人は「四書」・「五経」・『老子』・『莊子』とい う典籍を読んだことがありますから、大乘仏法の修 学基礎も着実でした。これが原因で小乗が衰えまし た。今日仏法を勉強する人は小乗を学ばず、儒家や 道家も学ばず、建物の土台を省略したのと同じ様 に、一階を抜かして、二階から建てる。いわゆる空 中楼阁です。いくら頑張っても建てられません。こ れはこの一代に真の仏法人材が出現しない原因で す。小乗仏法は人天の基礎に建てられています。親 孝行・尊師・慈心・十善行を修すことで、この基礎 があれば本当に仏教の門に入ることが出来、仏を学 ぶ条件が揃うことになります。仏教の門に入るには 先ず弟子入りし、三帰戒を受けます。三帰戒は盛大 厳肅で大事なことで、小事ではありません。これは 正式に釈迦牟尼仏に師事することです。一生師の教 訓に従って修学し、修行することになります。正式 に弟子入りしたら、師は修学の総綱領、指導原則を



伝授しなければならず、この時点で修行する標準が出来ます。この標準は行為を修正する最高の指導原則で、これを「三帰依伝授」といいます。三帰とは、仏に帰依し、法に帰依し、僧に帰依することです。かつて三帰と言えば、誰もが理解し誤解はありませんでした。しかし、仏法は現在に至って、仏・法・僧と聞けば、三帰の意義を誤解する人はかなりいます。「帰依仏」と聞けば、仏像と考えます、仏像に帰依するのは間違いです。「帰依法」と聞けば、經典と考えます。「帰依僧」と聞けば、出家の人と考えます。三帰の意味を完全に曲解してしまいます。唐時代に禅宗の六祖恵能大師は後人が三帰に対する誤解を防ぐため、『壇經』で三帰を伝授する時、仏・法・僧の文字を使わず、「覺に帰依、正に帰依、淨に帰依」と説かれました。我々はこの斬新な発想によって、すぐに趣旨を理解し、誤解を免れます。そして、「仏」は覺であり、覺悟の意味で

す。「法」は正であり、正しい認知と正しい見解です。「僧」は淨であり、六根清淨、一塵も染まらな事です。因って、我々修行の主要な拠り所は自性覺、自性正と自性淨に依ることです。これを「自性三宝」と言い、我々の真の帰依するところです。決して誰かに帰依するのではなく、必ずはっきりと認識して下さい。こういう事でなかったら、仏教の門に入ったばかりでは、初の授業を間違ってしまう。三帰を伝授証明する師は、必ず三帰の真の意義を説明して下さい。それが本当の三帰依伝授になります。我々は聞いたら喜んで受持し、教訓に従って奉行すれば、その時点から釈迦牟尼仏の弟子になり、諸仏如来の弟子となれます。もし本当の仏の弟子であれば、經典にある三十六位の護法神は日夜保護して下さい。もし帰依するのが間違っていれば、諸仏の加持を得られないでしょう。

まず「帰依仏」を説きましょう。帰依の「帰」は



振り返る事です。「依」は依拠する事です。我々は無量劫を経て、六道で輪廻生死し、真に頼るところがなく、本当に哀れな事です。これは善知識に巡り合えず、良い師に出会えていないからです。今日は良い師に出会えました。師は我々を教導するとは、

迷いと顛倒から振り返り、自性覺に依拠する事です。自性は本来の覺りであり、故に仏に帰依するとは外の仏ではなく、自性仏に帰依することであり、淨宗では「自性彌陀、唯心淨土」と言います。弥陀は自性が変現したもので、釈迦も自性が変現したものの、十方三世一切の諸仏如来は皆、自性が現した仏です。所以に我々が帰依するのは自性仏であり、すなわち自性覺です。仏とは覺りの意味です。今から我々は覺而不迷であるべし。対人・対物・対事にも必ず覺つて、絶対迷ってはなりません。「覺而不迷」（覺つて迷わないこと）とは、本当の帰依です。もし仏に帰依しても未だ迷惑顛倒し、正誤を分

別出来なかったら、それは反省をしていず、拠り所がない事です。この帰依は名だけのもので内容が存在しません。そうなると保護神の守護を得られず、感応ありません。ですから必ずはつきりと弁えて、自性覺に帰依して下さい。

第二「帰依法」です。「法」とは宇宙人生に対する見方や考え方が完全に事実真相に符合する事です。即ち正しい思想、正確な見解です。仏經では「正知正見」（正しい認知、正しい見解）と言い、或いは「仏知仏見」と言います。これが自性の法宝であり、外から来たものではありません。仏陀は我々に間違つた考え方と見方を反省させ、自性にある正知正見に依るべしと説かれます。これを「帰依法」と言います。ですから「法」は自性の知見であり、人に左右されるものではありません。仏の偉大などところで、敬服されるところは、我々を引っぱり回したりはしないということです。仏は我々に正々



堂々と独立自主的な人間になるようにと教えてくれています。これは仏の最も尊敬されるところであるでしょう。

「僧」とは清浄という意味で、六根清浄の事です。六根は眼、耳、鼻、舌、身、意であります。接触する外界は色、声、香、味、触、法となります。

凡夫は根塵が接すると外界に汚染されます。自分の思いに合った境界に出会えば、食欲が起きます。自分の思いに逆らった境界に出会えば、瞋恚心が起きます。瞋恚に汚染されてしまいます。ですから、五欲や七情は全て汚染であることを認識すべきです。これは心地への汚染です。仏は我々に自性は本来清浄であり、少しも汚染がないと教えています。我々は一切の汚染から脱出し、自性の清浄心に依ることを「帰依僧」と言います。

三帰依をまとめて言いますと、「帰依仏」は覺りを得て迷わないこと、「帰依法」は正しい知見に従

い邪を遠ざける事、「帰依僧」は清浄で染まらないことです。仏が我々に教えた行持を修正する三大要領（三つの標準）は「覺、正、浄」であり、自性三宝の事です。覺、正、浄は誰にでも具わっているものです。以前、このことを忘れていた人々は、今日から見返ってこれに依るべきです。仏は我々に四六時中、覺、正、浄を思い出し、覺、正、浄によって我々の思想、見解、言行の修正を三帰依とせよ。それが本当の帰依であると説かれました。

「覺、正、浄」という三原則は三つの宝です。三宝は「一而三、三而一」（一が三であり、三が一である）の事で、一と三の分別がなく、同じである事です。よく考えて見て下さい。悟りを開いた人に見解の間違いがあるでしょうか？その人の心は清浄ではないのでしょうか？もし心が清浄でなかったら、見解が不正確で、その人はまだ覺っていない事です。同様に、正しい知見を持つ人は覺らない訳がな



く、清浄にならない訳がありません。いわゆる「一而三、三而一」の事です。仏は我々に三つの見性成仏の門を開いて下さいました。この講堂に三つの門がある様に、一つの門から入れば一切を得られます。中国の大乗宗派では、禪宗は「覚」門から進入する方法を選択し、大悟徹底（一切の迷いを断ち切って、悟りにも滞らないこと。悟り切って絶対の真理と一体になること）で、本性を見抜いて覚る事を条件とします。教下（禪宗以外は教下に属します）では、例えば天台宗、華嚴宗、三論宗、法相宗などは「正」門から入ります。經典の教訓を所依として見解、思想、言行を修正します。念仏する浄土宗と密宗の両宗は「浄」門より入り、清浄心を修します。つまり、一而三、三而一の事です。これら沢山の宗派は、この三つの標準の中で、任意に一門を選べば、選択が違ってても、成果は完全に一致します。門に入る前は違ってても（覚、正、浄の違い）門に入

ったら完全に同じになります。ここで初めて分かる事は、法門は本当に平等で、上下の差別は全くありません。但し、「覚」門は必ず上根（優れた能力、資質。また、それを有する人）の人でなければなりません。優れた人で、心が非常に清浄な人でなければ学べません。そうでなければ、この門から絶対に入る事は出来ません。六祖大師が『壇經』で述べたのは、大師が弟子を引き受ける条件は上上の人であり、もし上上の根性でなければ、この覚門を通れず、修しても悟りを開けないと明記していました。

「正」門は一般の根性でも歩む事は出来ますが、時間は比較的長く、たくさんの本を読み、学校教育と同じように小学、中学、大学、研究所を経て、長い年月を掛け、長い道のりとなります。「浄」門になると、浄と密の両宗は共にここより入門し、清浄心を専修します。今の末法時期にこの両宗が繁栄しているのは、実に道理に合っています。「浄門」で



は、上根でなくても長い時間を掛けなくても出来ま
す。この両宗の中で、とりわけ阿弥陀仏を専念する
浄土宗が密宗より広く摂受され、成就し易く、更に
容易に清浄心を得られます。我々は自性三宝を明ら
かに認識し、正しい法門を選択出来れば、修行の所
依として真の帰依処が見つかります。そうでなけれ
ば、仏と菩薩の形像の前で形式上に帰依を受けて
も、どこから回帰し、何に依るべきかを相変わらず
解らなければ、間違いとなります。

前述した自性三宝の道理について少し理解出来た
でしょう。もし日常生活の中で一つの抛り所も見つ
からなければ、三帰はまた無に戻ります。我々はど
こで真の抛り所を見つけることが出来るかと言え
ば、それは三帰依を実際の生活の中で実践すること
にあります。仏教のどの宗派でも所依している經典
と修学方法があります。例えば、華嚴宗の所依とす
る三宝では、「仏」は毘盧遮那仏です。「法」は

『華嚴經』です。「僧」は文殊菩薩、普賢菩薩及び
四十一の法身大士菩薩僧で、修学の手本です。我々
は彼らに従って学び、彼らと同じようになれば、三
帰依は落着になります。法華宗と言えば、この宗は
本師釈迦牟尼仏を主として、我々は本師釈迦牟尼仏
を所依として、これは「仏」宝です。『妙法蓮華
經』は「法」宝です。『法華經』に述べた菩薩は
「僧」宝であり、みんな我々修学の手本です。浄土
宗が所依する仏宝は阿弥陀仏で、阿弥陀仏は我々の
真の帰依処です。法宝は『無量壽經』と浄土の五經
一論となります。僧宝は觀音、勢至、文殊、普賢諸
大菩薩です。觀世音菩薩の慈悲を学び、大勢至菩薩
の專一を学びます。『楞嚴經・大勢至菩薩念仏円通
章』では、大勢至菩薩とその他の諸菩薩等、帰依し
た時点から成仏するまで、阿弥陀仏を一心専念しま
す。この一句の仏名で、「方便を借りずに、自然に
心が開ける」と説かれています。「借」とは他の法



門の補助という意味で、浄業を修するものには、他の法門の補助を借りることは必要ありません。初発心から成仏するまで阿弥陀仏を専念するのみです。どのように念仏したら良いのでしょうか？その秘訣は、「都攝六根、淨念相繼」（六根を攝受し、清淨なる念が絶えないこと）です。「淨念」とは、念仏の時、懷疑がなく、混じり合いがなく、心は清淨で、清淨心で唱えます。「相繼」とは、一句又一句と、絶えず続けることです。混じりがなく、懷疑がなく、絶えることがないということは大勢至菩薩が説いて下さった念仏の秘訣であります。「都攝六根」「淨念相繼」の方法で念仏すれば絶対成功します。夏蓮居老居士は、一冊の「淨修捷要」を編集しました。そこには浄宗の初祖は大勢至菩薩であると言います。私は始めて読んだ時、これに驚きました。今まで聞いたことのない説でした。それが理解できた時、私は非常にそれを讃嘆し、老居

士の説は非常に正しいと認識し、歡喜を覚えしました。大勢至菩薩は尽虚空遍法界で、初めて念仏法門を専修した初祖であり、法界に於ける初祖です。我々は再び振り返って娑婆世界を見てみると、娑婆世界に釈迦牟尼仏は成仏を示現し、第一部『華嚴經』を説かれました。華嚴会に普賢菩薩の十大願王で導かれ極樂に帰するということは、『華嚴經』では、普賢菩薩が娑婆の初祖となります。『無量壽經』が中国に伝来してから、東晋の慧遠大師は廬山で念仏堂を建て、意氣投合の蓮友百二十三人を集め、『無量壽經』に依って念仏法門を専修しました。慧遠大師は中国浄土宗の初祖になります。所以に、今日の浄宗初祖は以下の三名の方となります。中国初祖は慧遠大師、娑婆初祖は普賢菩薩、法界初祖は大勢至菩薩です。

私は、米国で弘法していた頃、李炳南老居士に、特別に浄宗を西洋国家で伝道すべしと言い付けられ



ておりました。私はダラスで小さな仏堂を設けました。老師は私に「華嚴蓮社」と扁額を書いて下さいました。私が台湾で十七年間に亘って華嚴經を説いていた講堂もこの名称でした。今回建てた道場は、高さは二十一尺ありましたが、大陸から求めた西方三聖図はただの四尺の高さで、仏堂に供養すると仏堂が高すぎて、どうも釣り合っていないのが気になっていました。それで、壁にもし一枚大きな彩絵の仏像があり、しかも仏像は米国人の顔つきであれば、仏法が米国に伝わったという象徴になると私はしばしば思っていました。今回米国に来る一日前、ある人が一枚の仏像を贈って下さいました。贈り主が不明で、画家も不明でしたが、簡豊文居士が代わりに受けたのです。寄贈された時に「この仏像をダラス仏堂で供養してください」と言い残されています。広げて見たら、それは油絵の西方三聖図でした。本当に不可思議です。阿弥陀仏は印度人の顔

で、観音菩薩は中国人の面相で、大勢至菩薩は西洋人像でした。本当に感応道交（仏と人間とが融和すること。人に応じた仏のはたらきかけと、それを感じとる人の心とが相交わり、合致すること）が不可思議です。大勢至菩薩は浄宗の初祖で、その初祖が米国に来ました。浄宗は本来に米国に伝わったことを意味し、「浄宗学会」は米国で成立しました。夏蓮居老居士が提唱したもので、中国大陆でまだ建立されていず、一番目の「浄宗学会」はダラスで建立されました。大勢至菩薩は米国人像で現されていることに私は歓喜無量でした。これは浄宗の三宝で、我々の真実の帰依処です。阿弥陀仏を学び、『無量寿經』を学び、観音、勢至を学び、彼らは我々修行の模範であり、修行の標準で、これを真の三帰と言います。この次に、説明するのは住持三宝です。

「住持三宝」とは、仏像、經典、出家の人のことです。これらは我々の真の帰依処ではありません



が、その作用は三宝が世に住持する事を象徴し、振り返り帰依する事を気付かせてくれます。家で仏像を供養していれば、仏像を見る度に自分が自性仏に帰依する事を思い起させ、処世や対人、対物の接し方は、必ず覺而不迷であるべきです。もし注意する人がいなかったら、忘れるかもしれないし、迷惑顛倒になってしまいます。仏像は帰依を気付かせる作用が大きいのです。我々の仏像を供養する功德と利益はここにあります。經典を毎日読むことが大事です。仏菩薩に聞かせるために読むものではありません。無量寿經を読むのは阿弥陀仏に聞かせるのではなく、阿弥陀仏の教訓を受けることです。阿弥陀仏は經の中でどのような心掛けで、どのように処世、対人、対物すべきかを教導してくれます。『無量寿經』を自分の思想、見解、言行に活かし、実際の日常生活に用いれば『無量寿經』になります。『無量寿經』は我々の本当の生活の写実であるように実践

すれば、帰依法は確實となります。これは「法室」です。次に「僧室」とは出家する人のことです。出家の人を見たら、持戒であっても、破戒であつても、自分に六根清浄であるべきだと気付かせてくれます。浄而不染（清浄で染まらないこと）は出家の人の大功徳です。どういう方法で修しますか？その方法は沢山あります。所謂八万四千法門があり、更に無量無辺の法門があります。法とは方法で、門とは門戸の事です。もし覺・正・浄を修しなければ、仏法ではありません。所以に、方法は沢山あつても目標はひとつです。これは道が違つても一に帰するということです、法門は平等です。上下の差別はありません。我々浄土を修したら絶対に禅、密、諸宗を貶してはいけません。どうしてかというと、彼ら是我々の歩む道と違つても目標は一致しています。我々はここまで乗車して来るところを、他の人々は歩いて来ます。其の人達は間違つていません。どの



道路でもここまで辿り着けるからです。誰でも自由に選択出来ます。一人の同窓が、私に「仏法にはたくさんの法門があつて、惑っています。どの法門を修すれば良いのでしょうか？」と尋ねました。ちょうど地面に一つのボールがありましたので、私はそのボールを指して言いました。「仏教はこのボールのように、法門は球の表面にある無数な点のようなものです。仏法は円心を求めることを教えています。任意の一点からまっすぐに行けば、円心に到達できます。そして第二の点と第三の点は必要ありません」古人曰く「道を辿って帰宅し、遠回りしない」。彼は理解できました。仏法は求めるのは真心で、本性を知ったら全体を得られることになりました。因って、どの法門であつても、秘訣は「専」（専一）で、専修すれば、必ず成就できます。定が得られ、慧を開けます。大円満の自性を証得でき、自性は完全に開顕できます。所以に、住持三宝は

我々に多大な功德を貢献しています。出家の人は僧宝であり、すべての出家の人を尊敬すべきです。良し出家の人を親近し、如法でない出家の人は遠ざけます。「遠ざける」とはその人を学ばないということとで、尊敬しないことではありません。その行為と姿で、自分に啓示を与え、注意力を養うということが真の帰依三宝です。つまり「帰依三宝」は、絶対に特定の人に帰依することではありません。もし特定の人に帰依しようと思ったら、嚴重な問題になります。どうしてですか？将来は阿鼻地獄に堕ちます。僧団は団結の団体ですから、尽虚空遍法界は一つの僧団になります。法界のあらゆるところまで分布していますが、一個の整体です。もし我々がある法師に帰依すると認知し、この法師を師として見なし、そしてあの法師は師ではないと思ったら、党派を作り、団体を分化するという罪になります。このことは「和合僧を破る」という罪になります。戒経



の中で和合僧を破る罪は阿鼻地獄に堕ちるといふこととです。五逆重罪の一つです。五逆重罪とは、父を殺し、母を殺し、仏を傷つけ、菩薩や阿羅漢を殺し、和合僧を破ることです。帰依していなければこの罪は問われません。帰依しては和合僧を破ることになり、大変な大悪になります。更に知るべきことに帰依は只一回という事。甲法師に会ったら三帰依し、乙法師に会ったら又三帰依し、たくさんの法師に帰依し、自分はたくさんの方師に保護されていると自慢に思うかもしれませんが、実際には泥菩薩が河を渡るように自身も守れず、誰もあなたを保護しません。唯一自性三宝に帰依することで、真に諸仏に護念され、善神に守護されるでしょう。ですからこの観念を明確かつ正確にさせることが大事で、決して間違つてはなりません。すでに帰依を受けた人が帰依についてまだ明白にしていず、再び帰依を受け、反省し、自性覺・正・淨に依れば本当の帰依に

なります。儀式をもう一回挙げる必要はありません。法名を新たに取る必要ありません。ただ誠意に受けければ、真に三帰の主旨を受けることになります。「受持三帰」は仏教入門の最も重要な一節で、非常に重大で厳肅なことです。もし本当に受けたら、仏法を学ぶことを即下に開始すべきです。

三帰を受けたら、保持すべきです。覺、正、淨を失つてはなりません。何時何処でも覺・正・淨を憶念することは我々の行為を修正する標準です。仏教の修行方法は無量無辺であり、覺・正・淨を修する以外にはありません。覺、正、淨、三門は見性の三門で、任意に一門を修し成就すれば三法門が全部得られます。中国では、仏教は十宗派があります。どの宗も修学の着眼点は違います。念仏法門を修しようとして発願した人は淨門から入ることになります。言い換えれば、念仏する人は一心不乱であることを求めます。一心不乱とは清淨心であり、心が清ければ



土も清くなり、浄土に生まれ、阿弥陀仏に会うことにより仏果を得られます。

「衆戒を具える」の「衆」とはたくさんという意味です。たくさん戒律の中で最も重要なのは五戒です。五戒は仏教の根本戒です。出家比丘は二百五十の戒を受けます。而して本当の戒律は前からの十七条目の四重十三僧残です。これらは戒に属し、その他は威儀に属します。威儀とは何でしょうか？威儀とは、礼儀、礼節のことです。日常生活の中で、処世、対人と対物の有様です。規範を遵守すべきです。昔、章嘉大師は「三帰五戒は、仏法を学ぶ人にとって、少しも離れてはいけません」と私に教えて下さいました。当時私は台北に住んでおりましたので、大師は例を挙げて「あなたが汽車で台北から高雄まで行く場合、一枚の切符を手に持ち、乗車した時から目的地に到着するまで、この切符を失くしてはなりません。三帰五戒はこの切符と同じように大

切なものです」大師は、三帰五戒から離れれば、仏法が失われ、仏の弟子でなくなると教えて下さいました。

五戒の第一条は不殺生、第二条は不偷盗、第三条は不邪淫、第四条は不妄語（嘘を言わず）、第五条は不飲酒です。前の四条は「性罪」で、戒を受けるか否かに関わらず、破ったら有罪になります。戒を受けない人が破つても、罪が無いということにはなりません。戒を受けた人が破つたらもう一重の「破戒」の罪が加わります。ただ不飲酒の一条は戒を受けていない人には罪になりません。戒を受ければ罪になります。ですからこの条を「遮戒」と言います。不飲酒は酔った後乱れる事態を防ぐことで前の四種の戒を破らないように設けた戒です。これは予防法で、本来は罪がありません。発心して戒を受けることになりますと法師の詳しい解説を受け、それにより適当な持戒の方法を身に着けます。決して単



に戒律条文を参照するだけでは持戒を保持できません。戒を正しく保持しようとするには、仏が戒を設けた意図を知らなければなりません。其々の戒には「開、遮、持、犯」があります。戒律を守り、保持し、日常生活の中で自由自在に応用させるべきです。戒律に硬く縛られることはありません。ある人達は、戒律が多過ぎて、犯しやすいから、戒を学ばない方がいいと言っています。所以に、大抵の人々は仏教の經典、經論、道理を学ぶことのほうが学び易いから好きであり、戒律は厳しすぎて、学ばない方がいいと言います。戒律とは仏の行持です。行持がなければ仏法とは言えません。礼儀がなければ儒家が滅びます。戒が無ければ仏法も滅亡します。ただ經典を誦読するだけで教訓を奉行しなければ、真実の利益を得られません。真実の学問は実行を重んじます。仏法の実行は戒律です。戒律は正しい生活規範ということです。世尊が在世のときには、生活

と説法に於けるすべてが生き生きとしておりましたので、快樂でした。従って、仏教は一切の衆生に快樂を受け入れられています。仏法は絶対に人を縛ることではなく、一切の衆生を利益し、衆生に眞の幸福と快樂を与えて下さいます。戒律の設定は我々に幸福で円満な人生を得られるようにと導いてくれる規範であります。このことを本当に認識したら、快く仏教の戒律を受けることが出来るでしょう。現在、講經する法師はたくさんいますが、戒律を説く法師はほんの僅かであります。ほとんど説く人がいません。同様に、經を聞く人が多く、戒を聞く人が少ないのです。どうしてでしょうか？それは、これも犯罪だし、あれも地獄に堕ちますし。等々、一回聞いたら二回目からもう来なくなり、三日目からは聴衆がいなくなります。実際、戒律が円満なることは、詳細に戒律の開、遮、持、犯を体得する必要があります。窮屈なことではありません。



台中の李炳南老居士は生活が簡單素朴で、一日一食だけでした。私が台中にいた頃、師の日に一食の生活はもう何十年も続いておりました。一般の持午（昼を過ぎたら食べないこと）よりも厳格でした。もし師が学生に夕食に招かれたら、すぐに快く受けます。しかも自分が行くだけではなく、よく私を連れて行って下さいました。私は持午していたので、夜は食わず、朝と昼前に食べるだけだったので。始めの時、私は困ってしまいました。師は私が持午することを知っていたのに、どうしてまだ私を連れて行くのでしょうか？師はただ「一緒に行く、一緒に行こう」と言うばかりでした。最後に師は私に「あなたはこの不満そうな顔や、この態度では、小乗の人ですよ。衆生を済度することが出来ません。どうしてか」と、衆生を済度するということは、一切の衆生を喜ばせることであり、これは破戒ではなく、開戒と言うのです」と言いました。

私は初めて齋戒にはこんな意味があることを明瞭にしました。老師は又、「人々が誠心誠意にあなたを招いた時、もし行かなければ、あなたは人情が無いと誤解されますよ。彼は仏法に近づこうとしなくなるばかりでなく更に仏法を学ぶ人は傲慢ですから、その人達と付き合わない方がいいと宣伝することになりかねません。これは人に業を造らせることです。」と指摘して下さいました。老師の行動は、齋戒を破るのではなく、「開戒」である。一切の衆生に歡喜心を起させ、随縁し衆生を済度することになるのです。宴会場に着いたら、主人が「先生は持午することを知らなくて、申し訳ございません」と詫びられました。李老師が、持午していても来られたことには、彼を更に感動させました。夜に食べたくて、人に招待させる場合は破戒になります。持午していることを他人が知らなくて、誠心誠意に招待されれば行くべきです。ですから、仏教の戒律は生



き生きと生じていて、自在であることが分かります。これは台中の李炳南老師が教えてくれたことです。以前、私は懺雲法師に師事した頃、厳しく持午しておりました。懺雲法師を離れ、李老師に師事して、經教を学びました。李老師に何回も指摘されていたから、段々柔軟性を持つて適応出来るようになりました。

早年、私に古い友達がいって、抗戦期間中に彼は二人の友達と一緒に日本人に追い掛けられていました。彼らは中華門外のあるお寺に逃げ込んで、お寺の老和尚に救われ、日本人に捕われず殺されずに済みました。抗戦勝利後、彼らが南京に戻り、命の恩人である老和尚を思い出し（何時も心の中で思っていました）老和尚に恩返しをしようと思いました。そして南京の飯店で盛大な宴会を用意し、老和尚を招待しました。老和尚が席に着いて宴席を見たら、テーブルの上に鳥料理、鴨料理、魚料理、肉料理、

等等並べていて、案の定の盛宴でした。この時、彼らは突然思い出しました「困った！出家の人は精進料理だけを食べるのに、どうしたらいいのだろう？どうして精進料理の事を考えなかったのだろう。今日は命の恩人である老和尚に恩返しをしようと思っていたのに、結局こんなことになってしまつて、どうしたらいいのだろう？」そうこうするうちに、老和尚は非常に慈悲深げに、箸を取っておっしゃいました「皆さんどうぞお座りください」そして宴会は始まり、老和尚は躊躇なく食べました。このことが皆を感動させました。この老和尚は齋戒を破つたことになりませんか？否、なりません。これは仏法の中の「慈悲為本，方便為門」（慈悲を根本として、方便を手段とする）の活用です。四摂法の中の菩薩は一切の衆生に歡喜心を起こさせることです。彼らは故意に人を困らせたのではなく、本当に誠心誠意に報恩しようと思いました。法師もそれに対し感激



し、全然彼らを咎める様子は無かったので、皆は感動しました。これは菩薩の衆生を摂取する一つの方法です。もし老和尚が顔色を変えて責めていたら、人々の仏法を学ぶ機縁を断つことになります。しかし、老法師は大智慧がありますから、ちょうど、この機会を利用して衆生を迎え入れたのです。仏法はこんなに方便で、かつ円融であります。これは大乘仏法の殊勝で大切なところです。

「嚴持戒律」（厳しく堅く戒律を守ること）とは、戒律の範囲は非常に深く広くあり、単に釈迦牟尼仏が設定した戒律だけではなく、国家の法律、社会の道徳、各地方の風俗習慣、諺で「郷に入れば郷に従う」、私たちは、そのようにすべてを犯さず、これを遵守すべきです。中国にいれば、中国の法律、中国の道徳観念、風俗習慣を守ります。米国にいれば、米国の法律を遵守し、米国人の道徳観念を理解します。これらはみな戒律の範囲内にありま

す。言い換えると、戒律は日常生活の規範です。現在には交通が便利になったため、通信が発達し、世界各国を旅行する機会も増えてきています。従って、本国の法律、風俗人情を理解するだけではなく、我々が旅行で訪ねる国家や地区の法律、風俗習慣までも知るべきです。そして郷に入れば郷に従い実践する。これを「嚴持戒律」と言います。みなさんが周知の如く、世尊は二千五百年以前の古印度に生まれましたので、その当時の戒律の多くは、今日、適用しなくなっています。どうしてもと、生活方式が違い、服装の着用習慣も違います。二百五十条の戒律の中で、数十条は服を着用する規範でした。我々の服装は、印度人と違って、それらの規範は完全に適応しません。現代人の食事も、古代印度人の食事と違います。現代人は古の人々と違って、所以に現代人は戒を持することは、戒律の精神、理論、先賢典範を守ることです。持戒で最も重要な



は戒律の精神、原理を堅く守ることです。「諸惡莫作，衆善奉行」（惡事をせず、善行を奉行すること）。「諸惡莫作」は小乗戒で、自立的であり、自分で遵守することです。所謂中国人が言う「独善其身」（自分だけを制し良くすること）です。持戒をする者は見る人がいなくても、独りでいても、戒に違反してはなりません。放逸してはなりません。菩薩戒は大衆の中に入って修するもので、他人に対してどういう戒律を守ればいいのか、どういう規矩を守ればいいのかということを、仏は、我々に他人に対しては「衆善奉行」、自身に対して「諸惡莫作」すべきだと教えて下さいました。戒律に従えば間違いがありません。これは、現代の我々が認識した戒律精神の所在です。仏法は、中国に伝わった後、中国の国情、文化背景等は、印度と違い、ましてや中国人の意識形態や生活様式は印度人の文化と異なっていました。所以に戒律は中国に來た後、修訂する

ことが必要になりました。唐代の百丈大師が、清規を制定したのは戒律を本土化、現代化に仕上げる事でした。戒の精神は完全不變で、ただ条文を改めて修正し、国家の法律と同じように、何年かごとに一回修訂します。新しい状況になりますと（原理原則は変りがない）、条文を必ず修訂してから適応します。中国大陸の各地区、各省、各県、各寺院には、みんな清規があります。清規は、必ず現地大衆の修学条件に合うもので、現代化と本土化ということで大衆の修行に協力します。この点を明瞭にしなれば、仏法は行き詰り、生氣がなくなってしまう。現代化と本土化のことが理解できれば、仏法を活気づかせ末永く斬新でいられるようになります、そして全世界に広く伝わり、一切の国家民族に喜んで迎え入れられます。仏は「人は持戒し法を守ればこの人は心身安定になり、憂懼恐怖がなくなる」と説かれました。心身安定した後は定を得ることができ、



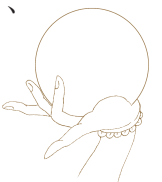
それ故修行はとりわけ戒律を重視します。もし奸詐で法律に違反する人が居れば、政府は制裁しなくても、良心が咎められるでしょう。心身不安であれば定を修することはできません。定を修する前提はず安心になることです。心身穏和は定を修する基礎です。ですから、「因戒得定、因定開慧」（戒により禅定が得られ、禅定により智慧が開く）というのは、道理に適うものです。第二条である嚴持戒律は二乗福であり、二乗にある人々の修学の基礎です。

3. 大乘福

もつと水準を高くすれば、大乘は小乗に基づいて建てられます。大乘福には四つのことがあります。第一は「発菩提心」です。中国は大乘仏教で、菩提心を発する時、よく人に発心を勧めます。一体どういう心を発するのでしょうか？菩提心とは何でしょうか？このことを理解出来る人は僅かです。「三

帰、衆戒、菩提心」は仏教の最も基本的な常識で、十分明白にできなかったら、学んでも迷惑顛倒な話です。「菩提」は梵語で、「覚悟」と訳されます。

菩提心は、本当に覚悟した心で、真実で世俗の迷いを離れた心です。何を覚悟するのでしょうか？人生は本当に苦に満ちているということを理解すべきです。三界の全ては、苦に満ちています。人界には苦がありますし、天界にも苦があります。八苦（生・老・病・死の四苦に、愛別離苦・怨憎会苦（おんぞうえく）・求不得苦（ぐふとつく）・五陰盛苦（ごおんじょうく）を加えた八つの苦しみ）が全てあります。詳しく語れば、二時間でも語り切れません。色界天に生まれるのは、禅定を修したからであり、しかも財、色、名、食、睡との五欲を断ち切ったからです。天界には苦々がありませんが、壊苦と行苦がまだあります。もし禅定の功力がもつと深ければ無色界天に生まれることができます。そうなれば体



を持つ必要もなくなり（三界に於ける最高級の凡夫）、無色界天の人々は、身体が苦の元だと分かり、物は病の根本だと分かり、もしこの物質の色身がなければどんなに自在なことでしょうかという強い願いがあったから、無色界天に生まれました。ですから、その人々には身体が必要ではありません。これを所謂靈界ということ、神識だけがあり、苦々と壊苦は皆消滅しています。色身が存在すれば生、老、病、死があります。物質が存在すれば成住壊空があります。無色天にはこの二種類の苦がありませんが、まだ行苦があります。行苦とは、永久に保持できないということです。我々がよく言う「青春は常駐出来ません」のように、これは行苦です。年を重ねるに連れ年を取って行きます。止められないことです。この三類の苦は、三界にすべて具わっていて、快樂がありません。本当に三界の真相を明瞭にすれば、悟りが開かれます。覺れば、自然に

苦を離れよう、樂を得ようと思うようになります。どのように苦を離れるのでしょうか？それには必ず三界を超越しなければなりません。どのように三界を超越するのでしょうか？それは仏陀が教えてくれる方法に従い、真に修行しなければなりません。これを、本当の「發菩提心」と言い、真の覺りです。又、仏が教えてくれた「四弘誓願」は菩提心が具体的に実践されることです。仏は大乘經典ではよく「二乘人、所謂阿羅漢と辟支仏には菩提心がありません。大乘菩薩は菩提心を發しています」と説かれています。四弘誓願の標準で見れば、容易に理解できます。菩薩の心は、一切の衆生を普遍に濟度することです。自分が苦の中いることを知って、自分を濟度し、更に自分の家族、親族友人を濟度し、無量無辺の衆生を濟度します。平等普遍で濟度することが大菩提心です。小乗人には分別と執着があつて、氣に入つた人を救いますが、氣に入らない人は救い



ません。小乗人は、衆生に求められれば、気が向けば教えますが、求められていなければ、主動的には教えません。大乘菩薩はそうではありません。『無量寿経』に曰く「菩薩は衆生のために呼ばれなくても自ら行動し、菩薩を捜さなくても、彼はあなたを捜しに来る」仏法を主動的に衆生に紹介し、推薦するのが菩薩の事業です。所以に、菩薩の心は、二乗人と違います。これは四願の中の第一願です。我々に「衆生無辺誓願度」と勧めます。実際に四願はこの一願だけになります。後の三願は、皆この一願を完成させる為のものです。衆生を済度しようと願うことは、自分自身が救われなければ、衆生を済度する能力も備わりません。衆生済度の為にはどう修行したらいいのでしょうか？それには、先ず自分の煩惱を断ち切ることから始めます。これは修行の順序であって、第一段階です。もし順序を間違えれば、修学は成功できません。必ず先に煩惱を断ち切り、

それから法門を学ぶことです。ある人が仏法を学ぶうと思ひ、煩惱を断てずに、法門を学び始め、四弘誓願の後の二条だけを取り、前の両願を捨てました。その結果、衆生を済度することと煩惱を断つことが全部失われてしまいました。「法門無量誓願学、仏道無上誓願成」の二願より着手します。四階建ての建物を建てるように、下の一、二階を略して上の三、四階だけを建てようとするのは、一目瞭然で無理なことです。現代は、修行する人はたくさんいても、成就する人々はほとんど見当たりません。原因はどこにあるのでしょうか？それは根本から修することを知らないからです。未だ深切に衆生済度という弘願を発していないからです。衆生を済度する心は大慈悲の心です。この心は、無比な力により、人を押し、精進させ、真剣に修学するようにさせます。どうして煩惱を断てるかと言えば衆生を済度しようとするからです。数え切れないほどの衆生



が、我々の救いを待ち、永遠に苦難から脱出することを期待しています。もし徳行、学問、能力が無ければどうすることも出来ません。ですから、煩惱を断ち、徳行を成就し、広く法門を学び、仏道を円成させようと発願することは、すべて一切の衆生を普遍に済度する為です。自分自身の為ではありません。これは大慈悲の力であり、地藏経に述べられているように大円満の次に重要なのは大慈悲になります。すなわち、これが重要な修学の順序です。

もし、ある方があなたにまず法門を勉強するようにと勧めたら、大変な問題です。早年、私は李炳南老師に師事した頃、李老師について仏法を学ぼうと決めました。弟子として師に礼拝しようとした時、老師は三つの条件を持ち出しました。「第一、今日から私一人の説法を聞くだけで、他のどの法師、居士大徳の説法も聞いてはいけません。第二、今日から読む本は、仏典、他の書籍に関わらず、私の同意

なくして一切読んではいけません」一番目の「聞かず」とは耳を塞ぐことで、二番目の「見ず」とは目を遮ることです。又、「第三、あなたの今まで学んできたことを一切認めません。一律廃除します。今日から私について始めから勉強してください」この三つの条件は、苛刻でした。最初に聞いたとき、この老師は専制跋扈で、まったく道理が通じないと思っていました。その態度は非常に偉く、また人を見下しているように見えました。でも良く考えて見て、最終的にこの条件を引き受けることにしました。弟子入り致しました。その時には、これが戒律だと夢にも思いませんでした。（これは私の煩惱を断たせる方法でした）多く聞き、多く見ると煩惱も多くなります。少なく聞くこと、少なく見ることで、更に聞かず、見ずにいれば、煩惱はなくなります。なるほど、老師はこの方法で、私に「煩惱無尽誓願断」を教えて下さいました。私は老師の教導を遵守



し、半年後には、妄念が少なくなり、心が清浄になり、智慧が増長しつつ、真の利益を得ました。私は、五年間に亘って師の教戒を遵守し、非常に感謝していました。その為、私は真に受用を得ましたので、自ら更に五年間修行を延ばしました。その結果、師の三条の戒を十年間に亘って遵守し、仏法の基礎が築けました。これが「煩惱無尽誓願断」ということです。心が清浄になれば、師の教法も開放となり、幅広く参学するようにと勧めて下さいました。参学とは何なのでしょうか？任意に誰の説く経でも聞いて良いということです。魔の説法であつても構いませんし、どんな本を読んでも構わないのです。その意味は、一切の見聞はあなたに利益を与えただけで、決して害がありません。あなたは邪正、是非を弁別する能力が備わりましたから、人に引張られて、方向を迷ってしまうことはもうありません。こういう能力が備わったら、師はあなたを外に

行かせます。初学の人々は未だこういう能力がなく、これを聞いたならこれはいいと、それについて行ってしまうからです。子供に対し、親が厳しく躾をするのは、子がまだ邪正、是非、得失利害を知らないからです。李炳南老師は、本当に大慈悲で心が強く、責任感も強く、尽心尽力でありました。所以に仏法を学ぶにはこういう道を辿るべきです。大善知識に親近することです。師の三条の戒律を遵守するということは「師承」と言います。徳行と学問が成就するには、師の指導なくしてはなり得ません。

なかなか良師と巡り逢えません。良い師は、どう求めたらいいのでしょうか？これは多生広劫の善根、福德、因縁によつて、巡り会えるものです。一生を掛けても良師に出会えない人はたくさんいます。そこで、ある人が私に「法師、あなたは幸運です。良い老師に出会えましたね。我々はどこを探しても、良師に出会う事は出来ませんでした。どう勉



強したらいいのでしよう」と言われました。これは本当のことです。良師に出会うことは求めても可能ではありません。これは非常に得難い、機縁です。自身が真剣に善根の種を蒔いて善縁を培うべきです。もしどうしても出会えなかったら、他に方法があります。古人より学びます。往昔李炳南老師が私を教えた時、老師は非常に謙虚に言いました、「私の能力で、五年間だけあなたに教える事が出来ません」老師は私に印光法師を学ぶようにと勧めました。印光法師は李炳南老師の師でありました。印光法師を師として敬うようにと私に勧めて下さいました。その頃、私はまだ初学であり、まだ出家もしていませんでした。老師は、又、言いました「古人の中では蘇東坡を学ぶな。今人の中では、梁啓超を学ばないように。この二人は大仏学者でしたが、仏法を学ぶことに於いて成就していません。故に、この二人を学んではいけません」と。ですから、李老師

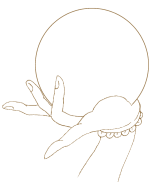
は私に印光法師を学ぶようにと勧めました。印光法師は今日の最も良い模範で、いい典型の師です。このことは、我々がもしいい善智識を見つけれなければ、古人の私淑弟子になるようにと説明して下さいました。この方法によって成就した人はたくさんいます。中国で、古人に師事した人は孟子が最初の人でした。孟子は、孔子を学び、（孔子はその時も生きていませんでした）孔子の本は世間にありましたので、孟子は孔子の著書である『論語』に専念し、本の中から孔子の教訓を受け、一途に孔子を学びました。孟子はこの師だけに従って、専心に一人を学びます。孟子の修学は成功だったと言えます。所以に、中国歴史上で孔子を大聖、至聖として、孟子を至聖として尊敬されてきました。以来中国歴史上でこの方法によって成就した人はたくさんいました。最も著名だったのが漢朝の司馬遷でありました。彼は中国第一部の史書である『史記』を書きま



した。司馬遷は左丘明を学び、ただ一家を学び、專一に『左伝』を讀誦し、『左伝』の文章と修養を学び、成功し、一代の文豪となりました。又、唐朝韓愈のように、唐宋八大家の一人で、すなわち「八代之衰」を執筆した韓昌黎でありました。韓昌黎の師は誰ですか？史記です。彼は司馬遷を学び、『史記』を専攻し、『史記』の文章と教訓を学ぶことによつて、遂に唐宋八大家の首領となりました。仏教で、明代の蕩益大師は淨宗の祖師です。蕩益大師の師は誰だったでしょうか？蓮池大師でした。当時蓮池大師は往生されましたが、蓮池大師の著述は世にありましたので、それで蕩益大師は完全に蓮池大師の著作に依つて修学しました。一人の師について学ぶことで、一人の師の教導に従うことです。李老師が、当時私に教えたように、一人の古大徳に師事すれば、絶対に間違ふことはありません。一人について学び、一家のことを学び、成熟すれば、これも

「師承」となります。

今日、皆さんにこの事を紹介したわけは、私から学ばないで言うためです。私には、あなた方の師になる能力がありません。李炳南老師は、印光法師を学ぶようにと教えて下さいました。私はここで皆さんに最高の師である阿弥陀仏と『無量寿經』を紹介します。阿弥陀仏は我々の師で、我々と一緒に『無量寿經』に依つて修学し、修学が成功すれば成仏します。皆さんが知るべきことは、一門に専念することが大事で、一門を通達したら定を得られ、智慧が開けます。古人はこの段階での修学期間を一般的に五年間として定めていました。この五年間で一門を専攻し、五年後、広く經論を学び始めます。その頃になれば、目に光が輝き、經義は自然明瞭になります。もし智慧が開けなかったら、意識、虚妄、分別を用いて、三百年を学んでも、經義がわからないだけでなく、古人の注解を見ても意味を誤解する



でしょう。必ず、自分は本当に悟りが開けたら、再び、古人の注解を見れば、その境地とこの経に対する理解が瞭然となるでしょう。

李炳南老師が往年教えてくれた三条の戒律は、李老師が独創したものだと思い込んでいました。一昨年（一九八九年）、私がシンガポールで布教していた頃、演培法師に招かれて講演しました。私は、青年学生が数多くいたのを見て、若い頃の経験を青年学生に紹介しました。彼らに、演培法師について修学するようにと勧めました。演培法師一人だけについて学び、一家の言を学べたら、必ず成就しますと。講演が終わった後、演公法師は私の手を取って応接間に入り、お茶を飲みました。演培法師は、自分が小沙弥の頃、觀宗寺にいて、諦閑法師が彼にこの三条を与えたと言いました。この事を聞いて、私は初めて悟ったのです。そもそもこの三条は中国祖師、代々に渡り伝承した生徒を受け入れる三つの条

件でした。特定の人の為のものではありませんでした。これにて本当の「師承」を知りました。師が認めた生徒には、必ずこの三個の条件を遵守させます。先ずあなたの目を遮り、耳を塞ぎ、煩惱を遮断して進入させず、「煩惱無尽誓願断」となります。

本当に断ったら、煩惱は少なくなり智慧が増えます。それから外の世界へ行つて参学します。それが「法門無量誓願学」です。所以に、広く学ぶ。博聞は第二段階に当たります。絶対に、初めから「法門無量誓願学」ではありません。そうでなければ、大変なことになってしまいます。もし信じなければ、次の比喻で感じ取れるでしょう。一人の法師の教導に従って、一つの法門を修することは大事です。二人の法師の教えは、二つの方法になります。三人の法師に学ぶということは、十字路にいるのと同じようなものです。四人の法師に学ぶということは、十字街頭を彷徨っているようで、どう習えばいいのか



分からなくなります。所以に、一人について学ぶのが正しいことで道理に適います。我々は、古大徳が、高僧伝、居士伝でよく二十年、三十年に亘ってひとりの師に随い、悟りが開けてからはじめて外に出て参学した事を知っています。これは非常に道理に適っています。仏法の修学が成就できるか否かはこれに左右されます。この秘訣、この道理を遵守することです。そうでなければ成功は夢になります。良師に出会えなければ、私は「阿弥陀仏」を師とする事を推薦します。『無量寿経』は教科書です。この経を一筋に五年間読んでからまた、他の経を読むことです。これは甚大な忍耐力が必要となります。いわゆる「定慧等学」（定慧を共に修すること）です。この経以外の経を見てはなりません。この一冊だけです。五年後、別の経文を読めば理解は昇華するでしょう。定慧修養を得れば、一切のことに通達するようになります。仏法の教学と世間の教学

は、観念と方法上では皆違います。世間の人々が読書をするように、大学で科目を選び、多い選択肢の中から慎重に選択します。仏法教学は異なります。円満な智慧を開くことが目的です。将来この大学のすべての科目が明瞭になります。仏法はこのように教えています。どこから学べばいいのでしょうか。一門から入って、専一に学びます。所謂「一經に通ずれば、一切の經に通ず」任意に、一部の經典を選べばいいのです。最も重要なのは「一門を専攻すること」です。この經にまだ通じていなければ、絶対に第二部の經を読むはいけません。「通ずる」とはどういう意味でしょうか？通ずるといのは悟りを開くということです。この經から、定を得て、慧を開くことを通達と言います。それから、其の他の一切の經典を読めば、すぐに通達出来るでしょう。ここに比喩があります。世間の人々が学問をする時、学問は、ピラミッドのように、先ず幅広くそれから



磨きをかけて最後は専攻になります。みなさん良く考えてみれば、ピラミッドがどんなに高くても広くても、極限があり、頂上に到達したら終点になります。だが仏法は違います。仏法は、木を植えるように、まず根、本があつて、それからゆつくりと枝、葉、花、実へと成長し、無量無辺に広がります。一点から生まれて、発散され、最後には大円満に至ります。結果的に出世間法に通達出来ないものはありません。世間法の学問では、極限に至ったら突破できなくなり、広めることはできず、上昇することも出来なくなります。しかし、仏法には終点がありません。みなさん冷静にかつ真剣に考えて下さい。この事実の真相を明瞭に出来れば、仏法教学の善巧方便と、教学法の意味するところは、絶対に世間一般の浅識が理解できる事ではありません。最初は、あまり理解できないでしょうが、続けると、後の成就是本当に不可思議な事が起こります。世間法は、最

初は博学多聞の様に見えますが、後になれば、何も通じなくなります。仏法が採用した教学方法は、異なりますから、結果は自然に異なります。

四弘誓願は、世尊が我々に教示した修学の順序で、修学の過程です。この四過程に従い修学すれば、必ず究竟円満に至れます。最後の「仏道無上誓願成」は煩惱が尽き、法門が円満になることです。無量無辺の法門はすべてを通達し、円満になります。

これを「成仏道」と言います。世尊は、『華嚴經』に、とりわけ華嚴最終の「普賢菩薩行願品」を強調します。全四十巻があるため、我々は『四十華嚴』と称します。世尊は善財童子を仏法修学の模範として、我々に、理論方法を教え、更に行動で我々に示し、日常生活の中で表してくれました。善財童子が最初に親近した師は、文殊師利菩薩でした。文殊菩薩は善財に前述した三個の条件を遵守する事を教えました。煩惱を断つことを完成させることによ



って、戒、定、慧の基礎が完成します。文殊菩薩のところで、持戒、定を修し、智慧を開き、智慧を開いたら、文殊菩薩は善財を解放して参学させました。これが著名な「五十三参」です。「五十三参」

は社会の各種の異なる業界、各種の異なる学術、各種の異なる人物、老若男女、仏法を学ぶ人々、出家の人々、在家の人々等を代表することで、色々と何でも触れられ、すべてを学習し、見聞を広げることによって善財の究竟円満な智慧を成就させました。

最後に（ここが特別に注意すべきところである）、普賢菩薩に出会うことになります。普賢菩薩は、

「十大願王」を以て極楽へ導き、西方極楽世界に往生し、阿弥陀仏に会うことを勧めています。阿弥陀仏に会えば、無上仏道が円満成就出来ます。ここで注意すべきところは、無上仏道を成就したければ、阿弥陀仏に会わなくてはなりません。阿弥陀仏に会えなかったら、煩惱を断ち、法門を学べるとは言え

ません。無上仏道は簡単に成就できません。どうしてわかるのでしょうか？『華嚴経』での華嚴会は、偉大な毘盧遮那仏の法会です。一真法界で、十法界ではありません。一真法界（初住菩薩以上の仏の世界、法身菩薩の住む世界）では、文殊、普賢は、皆円教の等覚菩薩で、華嚴会で浄土に往生したいと願を立てました。往年、私は『華嚴経』を説いた時、この事実を見て非常に驚喜しました。華嚴世界の等覚菩薩が西方極楽世界に往生するのは何の為でしょう。当時、本当に必要がないと思いました。よく考えたら、只一つの事と一つの理由の為に、無上正等正覚を証悟しに行くだけです。もしこの事の為でなかったら、実際そこに行く理由がありません。そして、詳しく観察したら、正にこの為であり、善財もこの為でした。私は、ここで忽然大悟したのです。真正に、円満無上菩提を成就したければ（円教の仏果である）極楽世界に行く以外ありません。所以



に、『四十華嚴』の中の「普賢行願品」は、詳細にこの四弘誓願を解いたものです。『四十華嚴』を明瞭にすれば、大乘を修学する時、どうやってこの道を歩んだらいいのかが分かります。真正明瞭、真正覚悟、菩提心を発してから、真実の覚りの心を発することも出来るようになります。真に迷わず、顛倒せず、菩提の道に一路順風になるでしょう。

第二句は「深信因果」（因果を深く信じる事）です。往昔、私は『無量寿經』を読み、何時もこの經文に惑わされ、理解できませんでした。どうしてこの疑惑が起こったのでしょうか。もしこの句が第一条にあれば、疑惑が起きず、道理が通じます。しかし、この第三福は菩薩が修する福で、まさか大菩薩が因果の事実を受け入れず、因果を信じないということはあり得ません。我々でもわかることで、善行にはよい報い、悪行には悪い報いを受けます。善因には善果、悪因には悪果を受けます。どうして菩

薩は分からないのでしょうか？まだ菩薩に「深信因果」を勧めています。どうしても納得が行きませんでした。後になって華嚴經十地品まで読んだら、恍然と悟りました。仏は『華嚴經・十地品』に「十地菩薩は始終念仏を離れず」と説かれました。私はこれで初めてわかりました。華嚴会に登地した菩薩から十地、等覺まで、この十一の位の菩薩（究極な仏果に最も近い位の諸菩薩）は念仏法門を修します。

なんとこの「因果」は「念仏は因、成仏は果」を指しています。この因果に関して、本当のことを言くと、たくさんの菩薩は知りません。中にはたくさん菩薩は、仏が語ったこのことを聞いてもまだ信じていませんでした。所以に、仏はここで彼らに「深信因果」（深く因果を信じ）「念仏は因、成仏は果」と教えています。文殊、普賢、善財が西方極樂世界に往生するぞと發願したのはこの話を信じたからです。私は『華嚴』を読み、『華嚴』を講じた



因縁でこのことを通達しました。つまり、これは本当に簡単に信じてもらえることはありません。

第三句は「読誦大乘」（大乘經典を読誦すること）です。これは菩薩が修行することです。菩薩は仏法を一日も休まず学び、一日も休まず読経します。読経は、仏のためでなく、経は、仏が説いたもので、仏は人々の読経を聞く必要がありません。我々が読経するのは、仏と菩薩の教訓を受けることです。『無量寿経』を読むのは阿弥陀仏が目の前で我々を教導すること、阿弥陀仏が説く道理は、我々に宇宙人生の真相を分かせようとしたものです。阿弥陀仏の教訓は、我々がこの世間で菩薩道をするような態度で、どのような心持ちで、どのような方式で行うべきかを教導したものです。言い換えれば、經典の一切の教訓を確実に遵守すれば読経から真実の利益を得られるでしょう。仏の弟子にとって、読経の最低水準は毎日早晚二課を行うことで

す。早晚課（朝晩の授業）はどうしたら如法でしょうか？みなさんは知るべきで、早課は仏の教訓を聞くことであり、自分を喚起させる事です。私は、今日一日の心持ち、念頭、処世、対人、対物などは仏の教導に反しないことであると発心するのを早課と言います。晩課では反省、検討を行います。經典を開いて真面目に反省し、仏の教誨を心に記したのかどうか。守ったかどうか。もし守れなかったら、真剣に懺悔をし、過ちを改めて翌日は必ず努力し守るようにします。これは早晚課の功德利益です。反対に、朝一回仏と菩薩に読経し、夜再び読経し、自分の心持ちや念頭は、經典の教訓と些もずれていない。ほとんどの人々、泥塑木彫の仏像に面し、朝一回仏像を騙し、夜もう一回仏像を騙し、甚大な罪惡を起しています。あなたがもし生きている人を騙したら、まだ許される余地があります。泥塑木彫の仏像を騙して、しかも一日二回もするのは。それで



功德があると言うのは大間違いです。どんなに重い罪を起こしているのかわかりません。このことを知らなければなりません。現在の早晚課はほとんど形式に流れています、少しも内容がありません。それでどうやって功德利益を得られるのでしょうか？浄土宗を修する人は、過去に於いて、朝晩に各一部の『阿弥陀経』、三遍の往生呪を読み、仏名（阿弥陀仏）を念じていました（回数が多ければ多いほいのです）。朝晩は同じで、これは「専」（専一のこと）です。たくさん経論を読んではいけません。多くなれば混雑になってしまいます。正しい修行が出来ず、精進しなくなります。『阿弥陀経』の经文は意味が浅いように思われていますが、実に意味が深いものです。信心が清浄になることが最も大事です。真実の利益を得られます。私が『阿弥陀経注疏』を講じたのは、今回が三回目で、まだ説き終わっていません。一回目を講じた時、録音テープが

なく、二回目は録音テープに残せました。九十分の録音テープで、計三百十五巻ありました。すなわち三百十五日で説法は円満になりました。所以に『阿弥陀経』は分かりにくく、意味が深すぎます。現在『無量寿経』を読むようにと皆さんに勧めています。『無量寿経』は分かりやすく、『阿弥陀経』程意味が深くありません。『阿弥陀経』は、文字上、平明で分かりやすいのですが、意味が無限で、広く深いのです。『無量寿経』の意味は、さほど深くなく、意味も理解でき、教訓は顕明で明白です。学べばご利益を得られます。もし仕事がとても忙しく、毎日一部を読む事でも難しければ、私は、台湾と米国の道場に教えたように、早課で一回『無量寿経』第六品（四十八誓願）を読むようにと勧めます。どうしてですか？これは浄宗の核心であり、浄宗の根源です。修行するには必ず阿弥陀仏と同様な願を立てなければなりません。弥陀がある願を立てれば、



私もそういう願を立てます。私の心は阿弥陀仏の心と同じで、私の願も阿弥陀仏の願と同じになるようにと願います。阿弥陀仏と同心同願、これは意気投合ということで、将来、当然一緒になります。晩課は三十二品から三十七品までを読みます。仏陀が我々に日常生活の中で、どのように悪を断ち、どのように善を修し、どのように存養するかを教えてください。説いた教訓は、対人、対物に対する原則です。必ず肝に銘じて遵守すべきです。この六品の経は戒律です。受持とはすなわち持戒することです。持戒念仏は阿弥陀仏の行、解と同様であることです。その様に心も一緒に、願、解、行も一緒にあれば、あなたも阿弥陀仏になっています。このように浄土を修すれば、成就しない訳がありません。毎日阿弥陀仏を念じ、『阿弥陀経』を唱えても、信、願、解、行が阿弥陀仏に反していれば、いくら念じても相応しません。古人曰く「毎日十万回仏名を唱

えても無駄である」。どうしてかというと、それは口だけで、心を込めていません。心願が阿弥陀仏と相応していないからです。朝暮課読誦本は、古人が制定したもので、当時の人々の為になりますが、現代社会では、環境がたくさん変化しており、ある儀軌はもう適用されなくなっています。又、過去の人、は、課誦について皆理解出来ていました。そして、本当に人に気づかせ反省させることができました。今日、我々が朝暮課本を読むのは、意味が理解できなければ、人に気づかせ反省させるという目的を果たせず、読誦しただけになります。二、三歳の子供が歌うように、発音は特に問題はありませんが、その意味を知らず、理解出来ていません。もし、読誦は仏と菩薩に聞かせる為ならば、仏と菩薩は聞く事が出来ない上に、我々の努力も無駄になります。これが朝暮二課の効果を得られない原因です。

念誦の目的と方法を理解し、仏法の修学綱領に従



って修すれば、初めて仏法の殊勝な功德利益を得られます。仏教経論は非常に多く、好きな一種を選べば良いのです。選択すれば、一門を専攻し、少なくとも五年間の時間が必要です。現代人は忍耐力に欠けていて、いつも、勧められても忍耐力が少ないため、実行する人はほとんどいません。それで仕方なく五年間を八割、六割にして、三年間にしましたが、これ以上妥協したら、恐らく効果がなくなりま

す。私は、李炳南老師の門下に十年間いて、第一部で学んだのは『阿難問事仏吉凶経』で、小乗経です。第二部は『阿弥陀経』、第三部は「普賢行願品」、第四部は『金剛経』、第五部は大経で、『大仏頂首楞嚴経』です。順序により、一つずつ学び、どの経にも長い時間をかけ、大変な忍耐力をもって完成しました。『華嚴経』になりますと、李老師が第一巻を解き終わったら、その後の七十九巻から晉經六十巻、貞元四十巻に至るまで私は全部体得出来

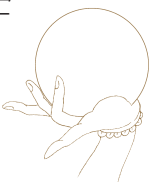
ました。『法華経』、『阿含経』、『禪密集』等に関して、学んだことがなくても明瞭でした。古人曰く「一部の経に通じれば、一切の経に通じ、障碍はない。」この利益は老師の指導に恵まれているからです。この教学法は、一部の経を学べば一部だけを理解できるのではなく、一部の経を学んだら、すべての経が理解出来るということです。所謂真の円融です。孔子の教学では、学生がもし一から三を知らなければ、孔子は教えて下さいません。所以に学習は專一することが大事です。李炳南老師は、学生を教導する時に「経を聴くのは言語と文章を聴くことではなく、経の道理と教理を聴くべきです」と教えました。「理」とは、世間と出世間の一切の法に貫通していることで、もし未だ分かなければ、教義を聞けばいいことです。義は一宗の理論で、もし一支派の理論を通達できたら、それでもいいのです。もっとも高明なのは、教理に入ることです。その次

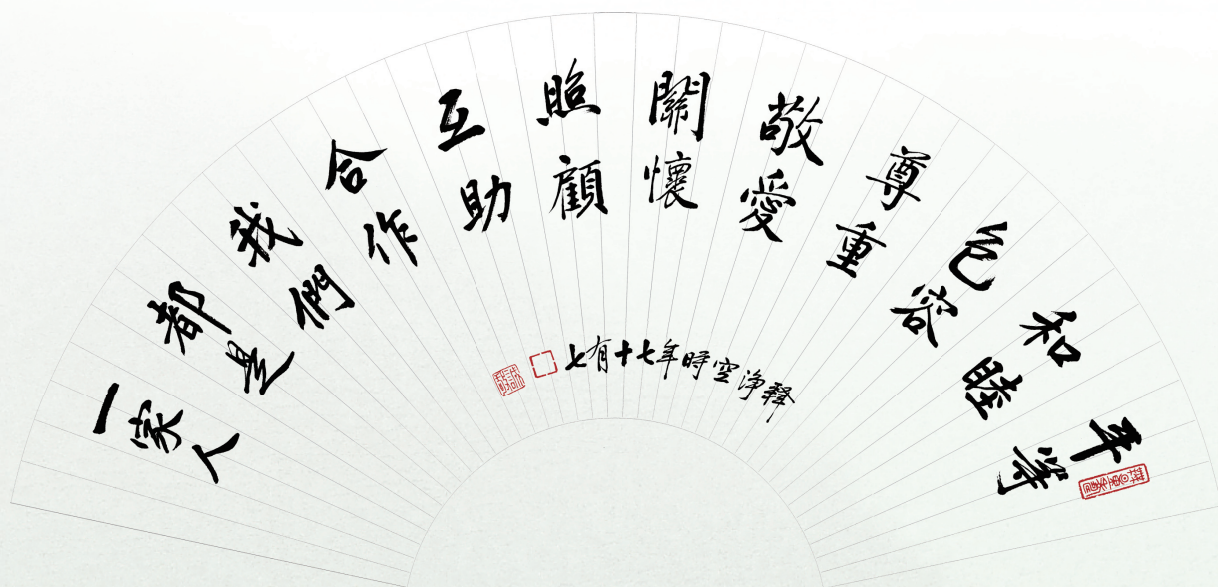


は教義です。これらは一切の法に通用します。このようにできれば本当の受持です。でも、これらは智慧に基づくことです。智慧は必ず「戒、定、慧」の実践によります。言い換えれば、老師の施した教戒と方法を徹底的に遵守し、心を落ち着かせ、変化に心を動かされず、忍辱波羅蜜を修し、強い忍耐力で学ぶことです。もし有る人に他の法門と經典の良さを紹介されても、耐えて動かされず、暫時聴かず見ずに、傍に置き、智慧が開けるのを待つてから、はじめて見ます。智慧が顕れなかったら見てはいけません。とにかく一つの法門に専一する人は、成功する希望は非常に大きいのです。これは修行が成功する秘訣です。

以上述べた十句は自分が利益を得られる事で、自分の修学のためとなります。最後の一句だけは、世尊が我々に仏法を普く大衆に紹介するようにと教えて下さっています。次の一句は「勸進行者」、人に仏法を勧め、他人を精進させようと努める人は菩薩

で、所以に大乘經典に善男子、善女人と云う「善」はこの条件です。「孝養父母」から「勸進行者」まで全部円満に行えれば、大乘經という善男子、善女人に相応します。善には標準があることは明らかです。みなさんはこのことを明瞭にすべきです。『地藏經』で云う、善男子、善女人は地藏菩薩の名号を唱え、地藏菩薩を供養すれば将来百回三十三天（天界のひとつ）に往復でき、惡道に堕ちない果報を得たことを見れば、これが普通の修行者ではないことが分かります。世間法の善男子、善女人と言えば、第一福だけが具わっていればいいことで、小乗教では二福まで、大乘仏法では三福すべてを具える必要があります。所以に、我々が經典の中の善男子、善女人を読んだら、我々自身はその基準を満たしているか、どこまで実行しているか、標準に相応しているか、特に大乘仏法に於いて、我々は善男子、善女人と言えるかを自問すべきです。





平等、和睦、包容、尊重、敬愛、思いやり、お世話、助け合い、協力、我ら皆家族
釈浄空 77歳



(二) 六和敬

『観無量寿仏經』の三福は、我々修行の根本的な基礎で、この基礎から離れたら、大乘ばかりでなく人天の善も成就できません。ですから、我々は此処から仏法を学び始めます。これは、世尊が説かれた『観無量寿仏經』の經文です。三福を特に詳細に述べていました。よく体得し、出来るだけ遣り遂げて自分の修学の根基を築き上げることを期待します。自修の基礎の上に共修の基礎があります。もしこの基礎を知らなかったら、一緒に共修しても得がありません。共同の認識がなく、雑談し、互いに合わないければ、共修より一人で修行した方がいいのです。共修には共修の戒律があります。所謂、世尊が教えてくれた「六和敬」です。

「三福」は個人修行の基礎です。「六和」は大衆が共修するための戒律であり、基本的な修学方法です。仏法の僧団とは、四人以上同じ所に住み共修す

る団体のことです。世尊は僧団のために六条の戒律を制定し、大衆は皆この六条の戒律を遵守します。これが仏法の僧団です。みんなは世尊の弟子です。「六和敬」は団体共修する基本的な規則ですから、出家の団体と在家の団体に関わらず必ず遵守しなければなりません。

第一、「見和同解」（見方が同一であること）で、共同の認識を築くことです。団体の中で修学の理論と方法について共同の見解を持つべきです。これは大衆が共修するときの基礎です。世尊が在世の時、「恒順衆生、随喜功德」（衆生に従順し、他人のなす善を見て、これにしたがい、喜びの心を生ずること）を確実に守りました。その為、たくさんの見解が異なる人々のために無量無辺の法門を開きました。仏教の宗派と法門が多いのは、この縁故によって開かれたからです。大衆が一緒に集まって、今日の所謂社会となり、社会が本当に安定するにはま



ず人々が互いに協同調和する必要があります。唯一「和」は、我々の見解や思想、乃至生活方式まで存在する差を徐々に縮めることが出来ます。いわゆる一切平等であることです。「和」の後は「平」になります。「平」があれば、皆の心も安定になります。「安」の次には「楽」があります。快樂を得たければ、心が安定し身も安定する必要があります。「和」は最初の基礎です。仏法は「和敬」を重視し、世間法も「和」を重視します。孔夫子は、この字を最重要の科目として列し、教導しました。『論語』に曰く「禮之用、和為貴」（礼儀を用いて、和が最も大切である）私は、何年か前に北京の故宮を見学しました。故宮には三つの主要な建築物があり、中国人はそれを「金鑾殿」と言います。実際、その扁額に書かれていたのは「金鑾殿」ではなく「太和殿」と書いてありました。「太和殿」の後は「中和殿」で、「中和殿」の後は「保和殿」です。みなさんはその

命名の宗旨はどこにあると思いますか？三つの大殿は皆「和」と命名され、清朝の帝王は、何によって天下と国家を統治したのでしょうか？「和」を以て治めていました。清朝の末期になって、家庭の不和、朝廷の不和が起こり、国が滅びました。もし清朝が続けて太和、中和、保和の精神を維持していれば、恐らく現代も未だ大清帝国の天下が続いていたでしょう。そうすれば、中国人もこれ程たくさんの苦難に遭わずに済んだのかもしれませんが。ですから「和」は非常に重要となります。皆さんは一緒に集まって必ずこのことを心掛けて下さい。

世尊は我々にたくさんの經典を説き、無量の法門を開き、我々に全てを修学させるのではなく、これは色々な異なった根性を持つ人に合わせる為で、すなわち各種異なる見解と需要を持つ大衆に適合する為です。それが後世になってたくさんの宗派に発展しました。人々の好みが異なりますから、仏法は、

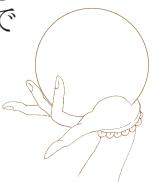


中国に伝来して以来、全部で十の宗派に分別しました。『華嚴經』を好む人は、一つの道場を建て、華

嚴を専修します。『法華經』を好む人は、もう一つの道場を建て、法華を専修します。これで明瞭になったのは、古代の寺院は、実際に現代の専門大学に譬えられます。ここに集まる皆さんは、好み、見解、思想が一致しています。絶対に、一つの道場の中でたくさんのことを学ばないように。そうでなければ一つも成就できません。仏法の法門に関わらず、成就できるか否かは「専」にあり、中国の古代教学で、童蒙に「三字經」を勉強させようと教導します。「三字經」に曰く「教之道，貴以専」（教学の道は専一することが大事である）無上で甚深である仏法は、言うまでもなく専一にならなければどうやって成就できましようか？因って、同士を集めて、この一部の經典だけを修し、この法門を修し、貴重なのは「専」（専一）という字にあり、このよ

うに、互いに検討研究し、精進すれば成就できるでしょう。

我々は浄土を修します。浄土宗が依る經典は最も少ないのです。古代では「三經一論」がありました。が、今は「五經一論」となっています。この五經とは、清朝の咸豐の時、魏源居士が『華嚴經』最後の一卷である「普賢行願品」を三經の後に付け加え、四經にしました。民国初年の印光大師は、『大仏頂首楞嚴經・大勢至菩薩念仏円通章』を四經の後に列し、五經になりました。我々はこれを例として、こちらの人々は『無量寿經』が好きで、あちらの人々は『阿弥陀經』が好きで、この両種の人達が集まれば互いに溶け合わず、和合出来ません。こちらには『無量寿經』を、あちらは『阿弥陀經』を誦読したいのです。そうすると二つの道場を建てなければなりません。浄土宗は同じ宗派で、どうしてそんなにたくさんの方々の道場に分かれているのでしょうか？



なるほど、原因はここにありました。更に一部の経に依るにしても、一緒に『阿弥陀経』に依って修行するとしたら、ある人は『蓮池大師註疏』に基づき修学し、ある人は『蕩益大師註疏』に基づき修学します。この両種の人が依拠する解釈も又、異なります。それで、同様に『阿弥陀経』に依拠し修行する人でも二つの道場に分かれることになります。真実な「見和同解」の道場になります。このような意気投合の人達は、一緒に共修すれば成就できます。我々は、同一の経に依拠し、同一の註疏に依拠しても念誦の方法は違います。ある人は「南無阿弥陀仏」と念誦し、速度が遅く、ある人は「阿弥陀仏！阿弥陀仏！」と、速度が速く、この二種類の人が一緒に共修することは困難です。ここから連想されるのは、以前の仏教道場の莊嚴さは、人が山門を踏み入れた瞬間から肅然と敬う念を起こさせます。道場の道学や修行の仲間は一つの見方と一つ

の考え方で、一つの法門に依拠し修行すれば、少しも乱れはありません。これで現代人は仏を学んでも成功しない理由を敏感に感じ取れます。現代の道場、今日は甲法師を招き、この法門を講じ、明日は乙法師を招きあの法門を講じ、同じ道場の中でたくさんの方を共修していたら必ず摩擦を起こします。衝突も起きるでしょう。このことは実に難しいです。仏にも出来ない事で、まして凡夫でしたら尚更です。「見和同解」は道場が成り立つ基本中の基本ということは明らかです。これを守れば、大衆は共修すれば大いなる恩恵を受けるでしょう。

ひとつの団体での大衆の考え方や見方が一致し、趣味や目標も同一であれば、和合になります。ひとつの僧団として成り立ちます。もし異なる点があったら、一緒に共修するよりは、むしろ別の僧団を成立した方が良いのです。共修すれば必ず互いに妨げになり、互いに成就できなくなります。所以に世尊



が無量無辺の法門を開くことは各種見解や思想や趣味が異なる衆生をみんな成就させる為でした。これは仏法の偉大で周到なところです。つまり「殊途同歸、法門平等」（異なる途でも同じ所に帰し、法門は平等であること）で、仏は絶対に人に某法門を修するようにと無理矢理に勧めません。『観無量寿仏經』の中で、韋提希夫人がこの世界の苦しみを深く感じ、仏国土に往生したくなった時、世尊は彼女に西方極樂世界に往生するようにと紹介せず、無量無辺の諸仏刹土を彼女の目の前に顕現し、彼女自身に選択させました。（自分で選択したものは気に入ります）凡夫はよく他人に無理矢理押し付けます。私はこの法門が良いと思うから、あなたも一緒に勉強しましょうと人を引っ張って、（彼はこの法門に興味があるとは限らず）そういう人が入って来たら、考え方、見方、意見などは多く溶け合えず、団体はよくこのようなことで傷害を受けます。これは警戒

すべきことで、一番良い方法は、大乘仏教を普遍に紹介し、好きな法門を学ぶことです。ここは浄土宗です、念仏好きな人はここに来て自分に合うかどうかを見てください。禅宗好きな人は禅宗法門を、密宗を好む人は密宗法門を学んで下さい。すべてが良いです。必ずしも皆を自分のところに引っ張って来ることはありません。法門は平等であり、みんな仏陀が大慈大悲で機縁に適えるよう建立したものですから、互いに尊重礼賛すべきです。これは「見和解」の意味するところです。

第二、「戒和同修」です。皆さんは一緒に住み修学し規範を定めるべきです。規範がなければ秩序が乱れることになります。当然、合宿規約には必ず仏の制定した根本戒が含まれ、在家の僧団と出家の僧団にもありますが、在家の僧団は五戒を基礎とします。出家の僧団は、比丘戒と比丘尼戒を基礎とし、それから大衆が現在共に生活する中で遵守すべき必



須規範を加えることになります。一般的に言うと、寺院の「常住公約」で、一人か二人で起草されて会議の中で大衆が討論し、最後に議決を通過し、道場に住むすべての人が必ず遵守しなければなりません。常住公約には国家の法律も含まれます。仏法を学ぶには必ず規範と法律を遵守しなければなりません。誰もが奉公遵法出来ればこの団体には争論がなくなります。すなわち、団体の人々は、皆地位が平等で、特権階級がありません。所以に仏教の僧団は民主的持戒遵法の団体です。

第三、「身和同住」です。これは一緒に住んで共修することです。道場の建立は、各々の共修する分子を成就させる為であり、これが目的です。絶対に社会責任を逃避するために仏教道場で生活しているわけではありません。もしこの観念を持っていたら、完全に間違いです。十方の供養を受けてどうしたら返せますか？この罪は無量で、債を償わなくて

はなりません。このことは経の中ではっきりと述べられています。共に住むことは、同一の道場に住むだけではありません。もし一人ずつ自分の部屋があつて、裕福な地区のように豪華な部屋があれば、こんな心地よい環境での修行は成就できるでしょうか？恐らく一人も成就出来ないでしょう。どうしてでしょうか？『地蔵経』に「閻浮提衆生の念頭はすべて罪である」という記述があります。人間には、無始曠劫から迷惑顛倒し無量無辺の罪を成し、悪い習性も多くあります。皆さんが集まれば、多くの目に見られ、多くの指に指され、一挙一動はまだ謹慎で遵法します。もし部屋の門が閉じて人に見られなくなる自由になり放逸し、欠点がたくさん出てしまいます。昼は修行し、夜を放逸すれば、功夫が完全になくなり、成就も難しくなります。仏陀は大智があつて深くこのことを知っておりました。そうしたら合宿はどうしたら如法になるでしょう？共通べ



ツドで寝ることです。夜は皆一緒に寝ます。昼夜共に大衆から離れられず、睡眠の時も格好よく慎重深く自由になりません。これが大衆に頼る真意です。

寺院の寮（寢室）に行つて見れば、全部共通ベッドです。一人一人に決まりの位置があり、布団はきちんと整つていて軍隊のようで、軍隊よりも厳格で、軍隊の規律よりも良く出来ています。道場に住んでこの生活をしていれば、習性は薰陶され、戒、定、慧を以て心行を改め真の修行が出来ます。寺院にはどうして単独の寮があるのでしょうか？それは、住持と執事を務める人は事務が多い為、生活立居は大衆と一緒に出来ないからです（大衆は学生のように規則が正しい）執事は、事務を処理し皆の為に務めていますから、このような小さな部屋があり、住持の部屋は「方丈」（方円一丈）と言ひ、部屋の空間が小さく、心地よく住ませる為ではなく、大衆の修行を妨害しないことが目的です。それから年老いた

人にも単独の部屋があり、病人にも単独の部屋があります。こういう特殊な人以外、皆は共通ベッドで寝ます。「身と同住」はこういう意味で、本当に修行で成功したければ、現代の裕福な社会に於いて、この方法なしでは成功できません。

第四、「口和無争」です。これは皆が一緒に住んでも争論がないことです。真正に修道のために努力することです。人と付き合う時に一番造り易い業は口業です。古人はよく「病は口から入り、禍は口から出る」と言います。話が多ければ、必ず失言します。ある時、言つた者の心になくても聴いた者は気にしているなど誤解を生じやすく、知らず知らずの内に怨みを買つたことになり、後の果報を招く事になります。実際に言うとそのそれは非常に苦惱で、所以に古徳がよく我々に「一句の言葉を減らし、一句仏の名号を多く唱えなさい」と教訓します。言語は少なければ少ないほど良いのです。必要のない言語



は言わないのが最善です。私は、前回ロサンゼルスで説法した時、ある同修が私にあることを教えしました。高校に通っている自分の子供が、夏休みの間に日本に三日間、禅学会に参加し、そして、帰ってきたら又行きたいと言いました。この禅宗道場は日本人が建立したもので、現在、その和尚は世を去りましたが、彼の米国の弟子によって継続が維持されています。その特色は、道場に入ると話すことは一切禁止されます。毎日の日課は座禅です。朝の八時から午後の五時半まで、再び七時半から九時半まで座禅します。それだけで他は何もしません。三日間は一言も話さず（人々はそのようなところにいれば心が気楽に感じられる）三日間ただ座るだけで、私の子供は非常にそれを気に入る、良い印象が残っていると書いていました。この種の道場の特色は「口和無争」です。話さなければ争う事もなくなりま

す。厳格な道場では雑談話が聞こえず、本当の道場には世間話ありません。念仏の道場は四六時中ただ「阿弥陀仏」という大きい声と小さい声が連綿に堂内に響き渡ります。本当の密宗の道場でしたら、呪文を唱える声が連綿しています。私が最初に師事した師は章嘉大師でした。立派な上人でした。私は三年間に亘って章嘉大師に親近しました。章嘉大師が念誦を止めるのは見たことはありませんでした。師が念誦する時、声は出ませんが唇は微かに動きま

す。我々はそれを見て、師が念誦しているとわかりました。これを金剛持と言います。すなわち口が動いて声が出ないことです。どんな時でも、接客の時でも師は念誦を続けていました。話す時だけ念誦を止めます。話し終わったら再び念じ始めます。師は私が今まで会った唯一の本当の修行者でした。師は本当の清浄心を持っています。一つの妄想も雑念もありません。師に教えを求める時、師は、私の心が落着くまでじっと待って観察し、そして答えます。



心が落ち着いていなければ話しません。考え中ではなく、呪文を念誦しています。師の目は、じつくりと私の目を覗き込み、私の心が鎮定になれば始めて話します。師のこの種の教学法は、非常に特殊で、二時間でも三、四の言葉だけを話すかもしれません。

でも師の話は、其々に千斤の力がありました。一生、忘れられません。しかも必ず教えを奉行します。これは本当に「口和無争」を徹底的に教化して下さったのです。故に、浄土宗念仏堂の止口は仏事の時ばかりではなく、普段も行うべきです。そうすれば、自分の修行に絶対利益があります。この方法でなければ目的は簡単に達しません。

第五、「意和同悦」です。これは、いつも言う「法喜充滿」（法により利益を得て喜びに満たされること）のことです。我々、仏法を学ぶ者は、どの法門を学んでも、最低限の成就とは、喜びを得ることにあります。もし楽しくなければ必ず修行に問題

があります。理論に反しているか、方法が間違っている可能性があります。そうでなければ、効果はきつと顕著に現れます。迷いを除き、悟りを開くことは、苦を離れ、楽を得ることです。苦痛、煩惱が日に日に少なくなり、日に日に楽しくなることは、功夫が正しいという証明ができます。もしこの現象が得られなかったら、功夫に必ず問題があります。これは真剣に検討すべきことで、問題点と病の根源を見つけ出し、この病の元を消せば、仏法から真の利益を得られるでしょう。仏法の修学は、生活の中で（歴事練心）自分の心を鍛えることです。「歴」は経験することであり、清浄心、正知正見（正しい認知と正しい見解）、覺而不迷（迷わず悟ること）を鍛えることです。所以に、真実である仏弟子は、善人或いは悪人に会っても、順境、或いは逆境に逢っても、全部自分の罪障消滅する増上縁であると見なし、喜ぶべきことです。心の内の油然と喜悦が生じ



ることを「法喜充滿」と言います。皆さんが共修して皆が法悦を得られますよう。言い換えれば、誰にでも真実の成就が叶えられるということです。

第六、「利和同均」で、共修する人々は、物価的生活に於いても平等であることを指します。古代、道場財源の一部は帝王が護持したもので、所謂、国家が建立した道場です。その次には大いなる富豪長者が布施されたものです。実を言うと、小さい布施が集まって建立した道場は古代にはありませんでした。これは、極最近のことで、如法ではありません。特に出家の方々が小さい布施を求めることは以前にはありませんでした。出家の方の生活は、木の下で一宿し、日中一食でした。食事は托鉢します。寝るときは日陰の大きい所を探し、座禅して一晚を過ごします。修行の功夫は絶えることはありませんでした。道場の建立は、学校の設立と同じように、衆生を教化するためでした。道場は、普通その地区

の学問と遠見がある方々が提唱創建したのか、または富豪長者が財源を提供して建てたものです。道場が出来てから住持となる高僧大徳が礼聘され、修行し衆生を教化していました。これは、学校の設立と非常に似たもので、校舎が出来たら徳行と学問ともに優れている方々を招聘し、校長や教師として務めて頂くのと同じように、出家の方々に、ここで衆生を教導して頂くのと同じ道理です。仏教の道場は学校ですから、国家の供養したものでも、地方大衆の供養したものでも、この道場に住んでいる人々は身分に関係なく、物質的な享受は必ず平等に受けられます。これを「利和同均」と言います。

道場の中では、六和敬の一つも欠かしてはいけません。そうでなければ釈迦牟尼仏の僧団ではなくなります。すなわち仏の真の弟子ではありません。

「家庭が円満であれば、万事がうまくいく」という諺があるように、国家が平和であれば、いくら強い



敵でも簡単に侵犯できません。どうしてもでしょうか？団結の力は想像出来ないほど大きいものです。六和敬の適用範囲は、小さく言えば家庭、会社、社団などであり、大きく言えば国家です。見和解、戒和同修、利和同均を実行できれば繁栄しない訳がありません。見和解になれば、皆は同心同徳で共通の認識を築くことができます。戒和同修であれば、人々は法を遵守します。利和同均であれば、生活享受の面なるべく平等に近づかせ、互いの差が大きくならないように、人心の不平と社会動乱を防ぎます。どうしてもでしょうか？貧しい人は金持ちの人が良い生活を享受するのを見て不平が生じます。そして強盗や造反など不法行為を起こします。目下、商業上では日本を越える国はありません。日本の商社は、戦後から興起し、時間は長くありませんが、今日になって世界一に躍起しました。その理由は、彼らはこの三点を実行できたからです。世界各

国が日本と対抗できない理由はこの三点がないからです。日本では、商社が損益を出せば、高階層の会社役員らは給料をもらえず、普通の社員は従来通りに給料をもらえます。このようであれば、社員は感動し得心が行くでしょう。社員は、意見があるとき、ストライキをせず、いつも通り出勤し、ただ頭に「意見があり、反抗します」という文字が書かれている鉢巻をし、抗議します。社長はこういう状況を見たら、即、会議を開き、交流し、協調します。こうしたら問題も解決され、生産も怠業されずに済みます。ですから、日本が世界一の経済大国という地位にいられるのはこの六和敬を遵守したからです。日本人の長所はたくさんあります。我が中国の古聖先賢の教訓をよく守り遵守しています。しかし、我々中国人は自分の文化遺産を完全に見下し顧みず捨てました。我々の列祖に対して大変申し訳なく思っております。今日の日本を見て、我々は深く



恥じ入るべきです。

二週間前、ある同修がどういう結婚相手を探したらいいいですかと私に尋ねました。私は、彼に「見和同解の相手でしたら、二人は努力する方向と目標が一緒に、興味も一緒に、互いに助け合って家庭はきつと円満になりますよ。愛情だけで判断してはいけません。愛情は無常です。今は愛し合っている、一旦結婚し、お互いの欠点が見えてしまったら、愛情の熱も下がります。家庭の悲劇へと変化します。絶対に無常の感情を抱いてはいけません」と答えました。すなわち家庭も六和敬の基礎の上に建てば、真実の幸福が得られます。この道理を知らなければ、一生涯、家庭円満で楽しく幸せに暮らすことを望んでも簡単には出来ません。

（三）三学——戒・定・慧

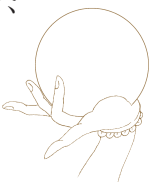
続けてみなさんに紹介するのは仏法の課程と標準

です。みなさんは本質上、仏教が教育で、宗教ではないことを知りました。その課程は非常に多くあります。教育内容はあらゆる方面のことを包括し、絶対に一箇所の大学の課程で包括できることではありません。無量無辺の課程の中で、教科書は經典です。みなさんが知るべきことは、仏典は、すべてが中国に伝来している訳ではありません。当時の交通は非常に不便で、印度の高僧が中国に来たり、中国の法師が印度に行ったりして、長期に亘り選択に選択を重ね、粹を集めて中国に持って来しました。つまり中国に伝来した仏典はみな精華です。中国に渡って来てから、全部が翻訳できなくて、仕方なく再び選別し、最高のものと最重要のものだけを訳出しました。訳経の仕事は相当困難で、昔の訳場の経費は国家に支えられ、全国の出家、在家、中国、外国、各界の優れた人材を集め、大規模な翻訳事業に従事させました。歴史記載上、鳩摩羅什（くまらじゆ



う）大師の訳場は四百人で編成されていきました。玄奘大師の訳場には六百人いました。我々が經典で見る訳者は、訳場の主持人（学校の校長のようである）が代表になっていますが、一人で訳したのではなく訳場にいる皆さんの共同努力の成果です。現在保存している中国の漢文系の仏典は相当完璧なものです。印度の梵文經典は、もうほとんど遺失され、伝承が絶えており、残されているのは僅かです。仏典は、漢文經典以外、第二大系統は藏文（チベット文）經典です。藏文經典の一部は梵文より直接訳出したもので、その他の部分は漢文より転じて訳出したものです。文成公主が西藏（チベット）に嫁ぎ、仏法をチベットに持ち込みました。よって、仏法がチベットに伝わったのは中国より六百年遅れていました。チベットで仏法に対する信仰心が生じた後、又、印度から新たな仏法が伝来しました。所以に、チベットの仏法は中国と印度両方から伝わったもの

で、仏陀がどの国家地区で説法しても、内容は戒、定、慧の三学から離れません。その目的は、我々のこの時期、この地区の衆生が持つ種々の苦痛を退治することです。地区とは、この地球のことで、時期は、釈迦牟尼仏の正法、像法、末法で、全部で一万二千年の法運があることを指します。この時代、この地区の衆生の病や苦痛は一体どこにあるのでしょうか？第一、悪事をなすこと、十悪を指します。仏陀は「戒」を用いて退治します。戒学は悪行に対する薬です。第二、人心が散乱し、定を得られなくて清浄になれない。それには「定」（禪定）を用いて退治します。最後に「慧」（智慧）を用いて愚痴を退治します。造悪、散乱（注意力が集中できないこと）愚痴はこの時代、地区の衆生の三大病です。仏陀は戒、定、慧という妙薬で退治します。仏陀の説法は衆生に因んで説かれたもので、衆生に病がなければ仏は説く法もなくなります。これは医者



が病によつて薬を投与するのと同じ原理です。所以に、衆生に病があれば、仏陀に法があります。衆生に病がなければ、仏陀に法がありません。『金剛經』に曰く「法尚應捨，何況非法」（仏法というものも捨てるべきで、尚更仏法でないものに執着すべきでない）衆生に病が無くなったら、仏法も要りません。どうしても仏法を使おうとすれば、かえつて病気になるります。健康な人が毎日薬を飲めば、病気になるのと同じ意味です。仏法の一切の經典を効用によつてまとめれば主にこの三大類となります。

仏典は「經、律、論」という三藏に分けられます。定学は經藏で、戒学は律藏で、慧学は論藏です。これは図書分類方法です。始まりは、仏教より伝わったものです。後に中国人もすべての書物を分類させました。清朝の康熙、乾隆時代に全国の図書を総整理し、「經、史、子、集」に依つて四庫と分類しました。庫は藏と同意語で、庫は倉庫、藏は収

藏の意味です。「四庫」は、仏法の「三藏」より啓示されたものです。三藏には、大乘と小乗があります。小乗には声聞藏、縁覺藏があり、大乘菩薩藏は分類すればするほど細かく分かります。つまり、戒学は身を調整することであり、定学は心を調整すること、慧学は行為を調整することであつて、心身の行為を調整することです。因つて、仏法を学ぶ人の心の持ち方や念頭、言語作法などは、みんな智慧の流露なのです。快樂も当然の事です。



誠実な心で念仏を唱える



財富是果財施是因聰明
智慧是果法施是因健康
長壽是果無畏布施是因
脩三因者必得三果



財を成すことは果であり、財施（金品を施すこと）は因である。
聡明さと智慧を持つことは果であり、法施（仏法を説くこと）は因である。
健康と長寿は果であり、無畏施（恐怖を取り除くこと）は因である。
この3つの因があつてこそ、3つの果が得られる。



（四）六度

1. 布施

我々は、仏法の教学及び課程の内容を知ってから、日常生活の中でどのように過ごせばいいのでしょうか？どのように人と接し、処世すればいいのでしょうか？これらのことに対し、仏陀は明確な教導をして下さっています。これらはきつと誰でも関心のあることでしょう。これらの問題は、仏陀が一切の大乗経論の中で広範に説明し、その内容は菩薩行の六度です。すなわち日常生活の中で、対人、対事、対物、この六つの原則を遵守することです。それは布施、持戒、忍辱、精進、禪定、般若です。朝起きてから夜寝るまで、この一日の行為は、全部六波羅蜜（迷いの此岸から悟りの彼岸に渡る意味）であり、これが本当の修行です。

大凡で言うと、世間の人々は最優先に財と富を求めます。財と富が無ければ、生活は苦しくなりま

す。ですから、富は第一に追求する目標です。その次は、聡明と智慧を求めます。次には、人々は愚痴を嫌う以外、更に健康長寿を求めます。人々はこの三大目標を追及し続けているのは、古今中外に例外がありません。仏法は、我々の願望と希望を満たしてくれます。この三つのことを得られますか？答えは得られます。諺で「有求必応」（仏教では、求めがあれば必ず叶う）ということがあります。どうして、求めても得られない人がいるのでしょうか？それは、その人が事実真相に不明瞭で、求める方法が分からないからです。事実真相は道理です。もし道理と方法が明瞭であれば、叶わないことはありません。仏陀は、我々に原理原則を説明し、求めがあらば叶えられるように助けて下さいます。この重要な法則をよく心得る必要があります。仏陀は、財と富、智慧、健康長寿は、みな果報であると述べ、悪因に悪果が付きまします。果があれば必ず因があり、因



があれば必ず果があります。これは永遠不変の真理です。ある人が大金持ちになりました。財はどこからですか？彼は賢くて或いは彼の方法が良くて金を儲けたわけではありません。彼より賢く方法が良い人がたくさんいます。どうしてそういう人達ではな

く、彼にできたのでしょうか？仏陀は、財と富を得られるのは、前世で蒔いた因によることと述べられています。どういう因を蒔いたのでしょうか？財布施です。所以に、六度の中で布施が第一になり、「財布施」をすれば、財と富を得ます。「法布施」をすれば、聡明智慧を得ます。「無畏布施」をすれば、健康長寿を得ます。つまり、財と富、聡明智慧、健康長寿という三種の果報を得たければ、必ず財施、法施、無畏施という因を修しなければなりません。世間の人々は、今生でこの果報を得た人の多数は、前世で修得したもので、少数の人は今生で修得しました。我々の一生はもし積極的に修すれば、

来世を待たなくても今生で果報を得られます。果報は必ず因を修することによって生じます。これは永遠不変の定律です。

(1) 財布施

「布施」は、すべての大乘仏法の中で、菩薩にとって最も重要な修行です。無量無辺の法門をまとめると六度になり、この六度をまとめれば、布施のみになります。所以に、仏はまず我々に布施波羅蜜を教えてくれています。「布施」とは、一般の人にはその本当の意味が理解できないでしょう。布施と言えば、よくお寺にお金を供養することと思う傾向があります。これは勘違いです。この理解では、布施は狭小過ぎます。菩薩の修する布施ではありません。実は、日常生活の中でいつも他人の為に考え、自分の為でなければ布施と供養を修していることになります。人々は毎日布施波羅蜜を修し、毎日菩薩



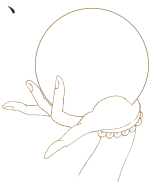
道を行じることだけをただ知らないだけです。例えば、朝起きて家族の人の朝ご飯やお茶などを全部用意することは一家を布施、供養することです。あなたは菩薩道を行じて、布施波羅蜜を修しています。普賢菩薩のように広く供養を修することです。楽しいことと思つて、このように悟れば、自分がどうしてこんなにこき使われるのかと思わなくなります。不満に思つたら、すべての布施の功德もなくなります。念を転じれば、辛勞が布施波羅蜜に変わり、即刻、仏法の快樂と智慧の法益を得られることになります。米国にある制度では、人々は布施をせざるを得ない状況があります。例えば、医療保険は誰も買うものですが、どうしてでしょう？自分が病気になったら、医薬費が高すぎて払えないからです。毎月保険料を払う時、万が一病気になった時のためにと考えれば必ず病気になります。病気にならないければ、払ったお金は無駄になりますから。念を転じて、

私は布施と供養を修しています。病気になる人達を助け、供養しています。このように布施をしたと思えば、一生病気にかかりません。どうしてでしょうか？あなたは病気になる因を作っていないからです。老人の世話をし、布施をしたら、将来は善果を得られます。たとえ年を取っても、たくさんの若者があなたのことを気に掛け、面倒を見ることでしょう。どういう因を蒔いたらどういう果が得られるかというと、人が会社に勤めて、苦勞して仕事するのは、多く給料をもらい、地位が上がるためだと思えば布施ではなくなります。もし、今日私が苦勞して仕事するのはこの会社に布施し、社会大衆を供養するためで、昇給と昇進は私の求める事ではないというような心がけをすれば、菩薩道を行ずることになります。菩薩の施与の心持ちで仕事をすれば、永遠に疲れませんし、益々楽しくなります。これは、諺でよく「喜ばしい事に逢えば気分が清々しくなる」



と同じことです。もし、事は自分が好きでやっているのではなく、しかもやらなければいけないのであれば、疲れて嫌になってしまいます。反対に、好きで喜んでやっている事柄は、すればするほど元気が出ます。私は、世界各地で人々に仏法を紹介するのは、私が好きでやっていることです。これは法布施です。皆さんの分からないことを教え、皆さんの煩惱と苦痛が少なくなり、仏法から喜びと智慧を得て、生命を充実させ、円満なる生活ができることを期待します。一九八四年の時、私は三回目のロサンゼルスに行きました。到着したら、講堂もすでに整っていて、すぐに講演を始めました。一日に九時間講演し、しかも立ちっ放しで。聴衆は座っていました。座っていた人は疲れましたが、私は少しも疲れを感じませんでした。演説すればするほど元気が出てきて、声も次第に大きくなりました。どうしてでしょうか？観念と心境が違ったからです。もし、私

は一時間いくら講演料をもらえるかと考えていて、更に聴衆もあまり元気がないのを見れば、疲れてしまいます。私は、この為ではなく、歓喜心で、無上で奥深く微妙な仏法を皆さんに紹介する為に来ました。この歓喜は最高の栄養なる法悦です。今、皆さんは色んな栄養に気を配っていますが、それは本物ではありません。仏教の「禅悦為食」（禅悦は食であり）というのは、何でしょうか？心地が清浄であることです。悦は心地が歓喜であることです。これは最も栄養のあるもので、ですから健康は飲食からではありません。歓喜心を得て、法悦を得れば、健康長寿と青春を保て、衰老しなくなります。憂いは人に年を取らせ、病氣にかからせます。毎日、気分が晴れなければ、病氣しやすく衰老も早まります。喜悅は健康になる因由で、布施波羅蜜を修することによって得られるものです。もう一つの例を挙げましょう。みなさんは、ここで車に保険をかけていま



す。どうしてですか？事故に遭ったときに賠償がで
きます。念頭を転じて、これは布施を修している
ことで、事故を起こした人達を助けるためだと考え
たら、この車は永遠に事故に遭いません。いつも仏
菩薩に加持されます。念頭を転じれば、菩薩になり
ます。念頭を転じなければ、始終凡夫のままです。
菩薩と凡夫の区別は何でしょうか？一方は覚りで、
一方は迷いです。迷う者は何でも自分の為と考え、
悟る者は何でも衆生の為と考えます。衆生の為でし
たら、自分が受ける恩恵は不可思議で想像出来ませ
ん。自分の為でしたら、得たことは少なく、得れ
ばじきになくなります。どちらの頭が良いでしょう
か？どちらが愚か者でしょうか？一目瞭然です、所
以に、いつも一切の衆生のためと考え、自分のため
に何かをしようかと考えてはならないことを強調し
ます。今生、あなたに財と富があつて、金持ちにな
れたのは福報があるからです。金をどうやって遣う

のかは智慧です。金を社会のために使つて、大衆に
使うことは大智慧になります。本当に金遣いが上手
です。もし何でも自分のために考えていたら、愚か
です。修行によつて得た少しの福報をすぐに使い切
つてしまいます。念を転じれば、福報を衆生に布施
し、福報は益々増大し、無窮無尽になります。です
から、布施の意味は無量無辺です。人々は、毎日、
日常生活の中で、任意の時間と任意の場所で修学が
できます。念を転じれば菩薩道を行ずることに変じ
ます。転じられなければ、六道の凡夫です。以上、
財布施を幾つかの例で説明しただけで、みなさんは
よく心得し、思慮すれば円満に行えるでしょう。

財布施は仏法の中で内財（体の一部、或いは体力
か智慧で布施をすること）と外財（自分の所有品で
布施をすること）に分類されます。外財は身外のも
ので、内財は体と智慧のことです。医学界では角膜
や内臓を寄付することは、内財の一種になります。



尚、我々が体力で人を助けるのも内財布施です。もし、我々が人のために働き報酬を得ずにいれば、すなわち義務で働く事（ボランティア）で、これも内財布施になります。よって、我々は随時に布施していますが、しかしそのような心持がなければ菩薩道を行ずることにはなりません。もし布施する心持ちがあれば、毎日の時時刻刻に六度を修することになり、菩薩法を修することになります。菩薩と凡夫の異なるところはどこにあるかと言え、その一念の心にあります。いわゆる一念の覺りにあります。

一切衆生の為であれば、菩薩です。一念が迷って自分の為となれば凡夫です。所以に、仏教の善惡の標準は、凡て自分の為であることは惡で、他人の為であることは善なのです。このことは初学の方々にとっては難しいことでしょう。人はどうして自分の為にしてはならないのでしょうか？凡夫が成仏できない理由は、兩種の執着障があるからです。第一種は

我執であり、第二種は法執です。我執を破れば、阿羅漢果位を証得します。法執を破り尽くせば、成仏に至ります。いつも自分の為を考える人達は、毎日我執が増え、一切の善法を修しても、執着が増える一方です。執着を脱せませんから、仏陀はこれを悪と言います。三界を出たくなければ話は別ですが、三界を出たければ、必ず我執と法執を破らなければなりません。我執は煩惱障で、煩惱の根源です。法執は所知障の根源です。

（2）法布施

第二種は「法布施」です。法布施は智慧、聡明、才芸と成る因です。包括している範囲は非常に広く、通常は世間と出世間の一切の法と分類されます。すなわち仏法と世法です。他人の知りたいことや学びたいことを私が出来ることであれば、熱心に教えることは法布施です。所以に、布施は必ずしも



講經說法とは限りません。講經說法は無量無辺の法布施の中の一つです。例えば、甲は料理が上手で、乙は下手で学びたいと甲に頼んだら、甲は心を尽くして乙を教導することも法布施です。又、某人は工程が出来ず私が出来るとしたら、私は彼を教導し教えることも法布施です。子供に小学課程を教えることも法布施です。乃至、各業種の知識、技術までを、無条件、無報酬で伝授していたら、皆、法布施に属します。もし代価があつて学費を取るのであれば、布施でなくなります。或いは、ある人からの質問：現在学校の先生は収入があつて、彼らが子供に教えるのは法布施になりますか？これは教師の一念によります。もし教師が後代を教育する目的で名と利の為ではなければ、布施になります。もし昇給の為、昇格の為でしたら法布施でなくなります。本当に法布施を修する人は、非常に熱心で、疲れず嫌がることはありません。反対に、そうでなければ、名

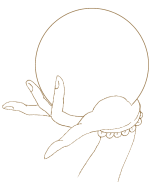
と利を得られなくなると意気消沈してしまいます。教導にも熱心さが足りず、動力も限られています。所以に、菩薩はいつも無尽なる慈悲心で一切の衆生を利益し、絶対無条件で、特に仏法に関することは、尚更にです。仏陀は、『無量寿經』で一切布施の中で法布施は最高であると教えています。この法布施は、仏法布施と言います。世間の法布施は究竟に至らず、唯一仏法による法布施は、一切の衆生を助けられ、更に無量な智慧、無尽な徳用、才芸を獲得させることが出来ます。煩惱を断たせ、生死を離脱させ、三界を越えさせ仏道を円満にさせることが出来ます。このような布施は最も円満で、最も殊勝です、唯一大乗仏教にすべてが具わっています。ですから一切の諸仏如来に讃嘆されます。仏教界を見てみると、經典を布施することは最も重要な一項目です。その次は説法の録音テープや録画テープです。その次は各界に礼聘され、仏法を大衆に紹介し、法



を押し広めることです。これは法布施です。しかし、經典を開いて見て、最後によく「版權所有、複製禁止」などの文字が見られますが、これは法布施ではありません。その訳は、商人が本を売っているのと同じ事です。法布施の功德利益が完全になくなってしまいます。それは、只の世間の商人が本屋を開いて売買しているとやるだけです。録音テープにも「版權所有、複製禁止」の文字があります。更に、少数の法師を礼聘する時も、供養の条件を先に決め、何時間でいくらの供養料では、これも売買に変質しています。これらは全部布施ではありません。所以に、菩薩行は衆生を利益するのみで、絶対に自分の為ではありません。もしある所では供養がなく、大衆が本当に仏法を渴望していたら、仏や菩薩は、自費でも衆生の願望を叶えます。絶対に誰かに無理をさせず困らせず、皆が本当に仏法から殊勝な利益を得られることを望んでいます。

(3) 無畏施

第三種は「無畏布施」です。衆生が心身共に不安と恐怖を感じる時、彼らを助け慰めることは無畏布施です。その範囲も非常に広く、例えば、ある国が他国に侵略されて戦争が起きている場合、皆が恐慌に陥る状況の中で、従軍し前方で敵に抵抗し、後方を守護し、後方の人民に生活安泰を与えることが無畏布施です。又、ある人が夜道を怖がり、鬼や強盗を恐れて家に帰るのに不安を感じている時、自分がその人と一緒にその道を歩き、家まで見送って、恐怖を和らげ安心させることも無畏布施です。その他の例は、すべてを列挙しなくても、衆生に心身を穏当させ、一切の恐怖から離れさせること等をすべて無畏布施と言います。無畏布施の果報は、健康長寿です。此処まで話したら、特に皆さんに気をつけてほしいところは、菜食が無畏布施に属しているということです。一切の衆生があなたを見ても怖がり



ません。どうしてでしょうか？それがあなたは、彼らに傷害を負わせないからです。円満に行えたら、健康長寿の果報を得られます。その上に法布施で聡明智慧を得られます。財布施で、財と富を得られます。これは人生に於ける切実で最も基本的な要望です。この三種の果報をすべて得たければ、真剣に三種の布施をしなければなりません。中国の歴史上で、富、聡明、智慧、健康、長寿が最も大きくて円満な人は乾隆皇帝です。彼は「貴為天子、富有四海」（貴い天子であり、天下の富を有し）で、兼ねてより聡明、智慧、健康、長寿が具わっていました。彼は六十年間、皇帝を務め、その後、四年間、太上皇を務めました。彼は自分のことを「古希天子」（古くから珍しい天子）と自称していました。それは、本当であり、少しも偽りがなく、自慢でもありません。これは、彼が過去生の中で清浄で円満な財施、法施、無畏施を修していたので、これほど

の大きな福報を得られたのです。

仏陀は大乘経で、よく我々に、菩薩は必ず布施波羅蜜を修すると教導してくれています。波羅蜜は「究竟円満」という意味です。どうしたら布施を究竟円満にできるのでしょうか？これは菩薩にとって重要な課題です。我々は、日常生活の中で、朝から晩まで処世、対人、対物に於いて、念を転ずるだけで、すべてが布施することになります。しかし、これはまだ円満ではなく究竟ではありません。究竟円満なる布施とは放棄、捨、いわゆる他人を助けることです。どのように放棄したらいいのでしょうか？放棄とは捨てることです。捨の後には「得」という字が付いて来ます。小さい捨には小さい得で、大きい捨には大きい得で、捨てずにいれば得はありません。仏陀が教えた究竟円満な捨とは、煩惱や憂いやそれに生死や輪廻等、これらの全てを布施したら布施波羅蜜になります。身の外の物から捨てるように



練習し、一切を捨てられれば、（煩惱、生死までも）自性本来の清浄光明に回復できます。

2. 持戒

第二は「持戒」です。持戒とは遵法のことです。

世間の一切の物事は大小に関係なく、それなりの法則があります。法則を遵守すれば、円満かつ速やかにできます。六度の持戒は、我々に普段は遵法させますが、単なる五戒、十戒（根本戒を指す）を持することではありません。家庭には家庭の習慣があります。父子、夫婦、兄弟は倫常です。長幼があります。自然的な秩序があります。絶対に本末転倒してはいけません。顛倒すれば、家が乱れてしまいます。父は父らしくなく、子は子らしくありません。ご飯炊きにも、洗米、鍋入れ、温度調節等の順序があります。この法則に従わなければ、ご飯がうまく炊けません。炒め物にも前後の順序があります。乃

至、学習まで、全部、順序と方法があります。仏法を学ぶことになると、仏法の方法は、もっと精密で厳格です。もし、仏法を学んで成就したければ、仏陀が教えてくれる修学順序を必ず遵守し、大きい心を発することから始めましょう。大きい心とは、一切の衆生を済度する願心を起こすことです。それから煩惱を断ち、習性を断ち、再び法門を学べば、最後に円満に仏道が完成します。成仏すれば、衆生を救うことが出来、円満に「衆生無辺誓願度」を実現出来ます。そうでなければ、言葉だけで、行動が伴わないと実現出来ない願になってしまいます。ある人が、このように聞くかもしれません：「必ず成仏しなければいけないでしょうか。菩薩になるだけではだめでしょうか。」ここで知るべきことは、菩薩は衆生を救えても、階位の高い菩薩を救えません。等覺菩薩でも、同階位の等覺菩薩を救えません。成仏すれば、等覺菩薩も済度の範囲内にな



ります。因って、必ず仏道が成せれば、初めて九法界にいる一切の衆生を広く済度することが出来ます。この願があれば、慈悲の力も發揮できます。どうしてですか？是非、自他、好悪などの分別があつて、私と仲の良い人だけを救う。絶対に私が嫌っている人を救わないとなれば、「衆生無辺誓願度」の下に「一部の人を済度しません」という注解を付ける必要があります。それでは真の願ではなくなります。円満なる願ではなくなります。一旦、円満なる願心を発すれば、菩薩です。分別がありません。『華嚴經』では初住菩薩を発心住と言います。この心を菩提心と言います。仏陀は、よく我々に「慈悲為本、方便為門」と教導します。これは、生活の過し方であると教えてくれています。普段の心持は、慈悲を以て事を成すには方法が要ります。程良く巧みに処理することです。方法の中にもまた方法があります。方法は大変重要です。この教導は、単に仏

法を学ぶことに限らず、普遍に日常生活に応用すべきです。六度は六大綱領、六大方法です。六度の各項の中に、たくさんの方が方法があります。方法は、重ね重ねること、無尽であることが明らかです。うまく運用が出来れば、自在になれて快樂を得られます。これが持戒波羅蜜です。

3. 忍辱

第三は「忍辱波羅蜜」です。忍耐とは忍辱のことです。どんな事に従事しても、忍耐力が要ります。当年、訳経の法師は中国人には、何事にも屈しない個性があることに気づき、古書によく「士可殺不可辱」（殺されても構わないが、屈辱されてはいけない）という記載があります。忍と言えば、何事も耐えられることです。殺されても構わないが、屈辱だけは耐えられない。従って、訳経の法師は、この名詞を忍辱と訳しました。屈辱に耐えられれば、



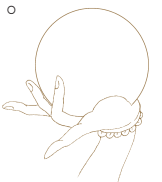
他の何事にも耐える事が出来ます。忍辱とは、中国人の気骨ある性格に対して訳された名詞であり、その本来の字義は「忍耐」だけで、屈辱の意味は含まれていず、その意図は、我々に事の巨細に関係なく

忍耐力の重要性を教えてくれています。『金剛経』では「一切の法は忍によつて成される」と述べられています。忍耐力がなければ、何事も成すできません。学校の勉強と言え、大学で四年間勉強するのは、四年間を耐えることであり、耐えられなければ卒業はできません。ここで、二時間半の仏法講座を聴くにも忍耐力が必要です。終わりまで耐えられれば今回の仏法の講座は円満に収まります。人に、忍耐力がなければ、どんなに素質があっても、何の成功もできません。成功は、永遠に忍耐力と根気がある人に属します。所以に、根気は成功を左右する非常に重要な条件の一つです。世尊は、『金剛経』で我々に菩薩の六度を説き、特別に「布施」と「忍

辱」を強調しており、他の事への言及は僅かです。言い換えれば、この二つのことは成否の鍵となるのです。

世間では、よく「處世難、處人更難」（処世は難しいが、人付き合いは更に難しい）という伝えがあります。以前の人付き合いは簡単でしたが、現在の人付き合いは昔よりかなり難しくなっています。原因は、以前の教育は、身を正しく持てることを教えており、現在の教育は、事の処し方を教えています。現代の人々は、自分の身の処し方を知らず、自分の情緒の不安定についても理解できていません。それ故、人に対する理解は更に難しくなります。それ程、人との付き合いとは大変なことです。

その為に、仏陀は忍耐を教えて下さいました。忍耐には三大類あります。第一、人為的な加害を忍耐すること。屈辱や加害に対しては忍耐が必要です。忍耐できれば絶対に得します。忍耐ができれば、心



が清浄で、定を得やすくなり、修道が成就しやすくなるからです。それは最も大きい福報とも言えます。第二、自然の変化に対して忍耐することです。冷熱、寒暑の変化に対して忍耐することです。飢渴に対して忍耐することです。自然災害に遭っても忍耐することです。第三は、修行を指します。仏法の修学には、もっと忍耐が必要です。法悦を得る前に、功夫が熟達するまでの修行は苦行であり、辛いことですが、この時期を過ぎれば、快樂が得られます。例を挙げますと、功夫が軌道に乗りました。高速道路に乗ると同じように。高速道路の下で、ぐるぐる回っている時は辛いと同じように。普通の道路には車が多く速度も遅いのです。忍耐力が必要です。高速道路に乗れば、気分爽快になって、一切の障碍がなくなります。修行もこれと同じようなものです、学び始めの頃は、無量の法門と宗派を模索し、どの宗派はいいですか？何を学べばいいです

かと尋ねます。ある人は幸運です。三、五年の間に見つかります。幸運な人が短い小道を歩いたら、すぐに大道を見つけ出したように、しかしある人は十年、二十年、一生を費やしても秘訣を掴めません。これは非常に無駄なことで、気の毒なことです。これは、勿論、自分の善根や福德と関係があります、善根、福德、因縁が具備すれば、仏菩薩は必ず加持して下さいます。これは「仏氏門中不捨一人」（仏は一人も見捨てない）とのことです。真心で道に向ける人、道を慕う人であれば仏菩薩は常にそこで守護顧念して下さいます。その人が本当に受け入れるようになれば、仏菩薩の啓示を得られ光明な大道を見付け出せます。仏菩薩は、どうしてまだあなたに啓示を与えてくれないのでしょうか？与えました、あなたは受入れなかったのです。この方法を教えたなら、あなたはこれが良い方法とは限らず、別の法門が、もっと殊勝かもしれないと考えます。あな

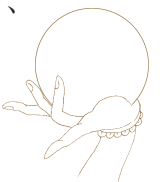


たは仏菩薩と対抗し、口論しているようなものです。ですから、仏菩薩は仕方なく来なくなるのです。このことを細心に吟味して下さい。修行する為には甚大な忍耐力が必要です。忍耐がなければ成就できません。忍耐は禅定の前条件で、忍耐がなければ更に高い境地に進めません。忍耐が精進の予備功夫で、忍耐があれば「精進」まで進むことが出来ます。

4. 精進

「精進」とは、精は專一で、進は進歩です。よって、仏法は保守的ではありません。落伍してはいません。仏法は、毎日進歩を求めます。又、儒家の日新月异（日に日に新しくなること）と同じ意味です。現在、ある人は、儒家が落伍している故、仏教を淘汰すべきだと言います。これは、彼らが仏法の六度の精進と儒家の日新について理解出来ていないから、

謬論を言い出したのです。進歩も良いことですが、最も重要なのは精進です。「精」とは純粹で混じりけのないことです。最近、西洋ではたくさんの有名な科学者が、一生の中で数多くの特殊な発明をしています。この種の人々は專一する特徴を有しています。毎日研究し、粘り強く、その結果、新発見をしました。世間法では、こういう状況であり、仏法も同じ状況です。無量の法門の中で、「一門専攻」（一門を専攻すること）をすれば必ず成就できます。すべての法門を勉強したがると、絶対に成就できません。すべての法門を勉強するのは、一つの法門が成就してからの事になります。一つの法門が成就すれば、その他の無量の法門を読んだ瞬間、聴いた瞬間、すぐに通達します。覺りを開く前、通達する前に、仏法のたくさんの法門を学べばすべて障碍となります。これは修行に当たって知るべきことです。



民国初年、諦閑法師には一人の弟子がいました。

この弟子は四十歳の時に出家しました。彼の年齢は老法師と同じぐらいで、諦閑法師の幼染みでした。

諦閑法師のほうが家庭環境に恵まれていたので、学校に通うことができました。彼の叔父は、商売の関係で、よく彼を旅に連れて行って下さったので、世間を多少知っていました。彼の友達は、家庭が貧しくて学校を出ていませんでした。成人した後の生活は困苦でした。鍋や食器を修復する技術を覚えて生計を立てていました。彼は、毎日道具を肩に担ぎ売り歩き、非常に辛苦でした。彼は、人生の大変さを切実に感じていました。そして、彼が小さい頃一緒に遊んでいた出家した友達を思い出し、諦閑法師のところに行き、お寺に何日間か泊まってから老和尚に「生活は大変辛いです。私も出家したいです。」と言いました。老和尚は「あなたは冗談を言わないで、住み飽きたら、又、商売をして下さい」と答え

ました。どうして出家をさせないのでしょうか？彼は年を取っていて（当時の四、五十歳は老人だった）体力も衰えていました。出家すれば、毎日の功課をできないだけではなく、読経も出来ません。お寺で人と共同生活をすれば、人に見下される恐れがありました。彼がとても辛くなるかもしれません。

講経を学ぶとすれば、彼は字が読めず、最初から習う必要がありました。何時になればできるでしょうか？気が遠くなります。ですから、老和尚は、彼の要求を拒絶しました。しかし、彼はどうしても「私は出家以外もう何もしません。」と頼み込みました。老和尚はもう成す術がなくなっていました。小さい頃の感情を思い出し、老和尚は「こうしましょう、本当に出家をしたければある条件に应符合ねばなりません。」と提案しました。彼は「問題ありません。あなたは私の師父になりますから、あなたの言うことをすべて受入れ服従します。」と



答えました。老和尚は「結構です。私はあなたを剃度します。剃度したら戒を受けなくてもよろしい。お寺にも住まないでください。受戒は、五十三日間も耐えなければいけませんから、あなたには耐えられないでしょう。寧波の田舎に人が住んでいない小さいお寺がありますから、そこを見付けて住めばよろしい」と言いました。老法師は、付近で何人かの護法の人と信徒を見付け、毎月彼に少々のお金とお米を供養させ、生活を安住させました。又、近くの念仏する老婆に頼んで、毎日彼の着替えを洗濯し、昼と夜に食事を作ってもらいました。そして「南無阿弥陀仏」を念ずるようにと彼に教えました。また「この一句の仏名を唱えるだけで、疲れたら休み、休んだら再び唱え、ずっと唱え続ければ将来きつと利益を得られます」と言い付けました。この人は学校を出ていませんが素直で正直です。一心にこの仏名を唱えていました。彼は本当に言われた通り唱

え、疲れば休み、休んだら又、唱えました。そのまま三年間、この寺を出たことがありませんでした。一つの仏名で、少しの雑じりもない事。これを精進と言います。ある日、彼は寺を出て町にいる親戚友人に会いに行きました。晩御飯を食べ終えてから、料理を作ってくれている老婆に「明日は料理を作らなくて結構です」と言い残しました。この老婆は「師父は三年間も出掛けておらず、今日、友達に会ったから、多分明日は友達と食事するのでしよう」と密かに思いました。翌日の昼になって、老婆は師が帰ったかどうかご飯を食べたかどうかを確かめに寺に様子を見に行きました。その寺は非常に古びた寺で、門も閉じていません。寺に着き、師に呼び掛けても反応がありませんでした。探した末に、師は寮の中で、顔を窓に面し、数珠を手にとって立っているのを見ましたが、呼んでも返答がありませんでした。目の前まで近づくと、はじめて彼が死ん



でいるとわかりました。立ったままで亡くなつていました。念仏して往生しておりました。この老婆はびっくりしました。立ったままで死んだ人を今まで見たことはありませんでした。すぐに護法の人に報告し、護法の人達もこの状況をどう対処すべきかわかりませんでした。それで人を遣つて観宗寺にいる諦閑法師のところに行つて報告しました。その頃は

まだ車がなく、消息を知らせに行つて帰つて来るまでには三日かかりました。彼は立つて往生し、しかも三日間も立ち続け、師父が自分の後事を処置して下さるのを待ちました。三年間で成功できたのは、精進のお陰でした。諦閑法師は「あなたの出家は無駄ではなかったです！講經説法の法師や名山名刹の住持方丈でもあなたの成就に匹敵できません！」と、非常に讃嘆しました。一句の阿弥陀仏で、唱え疲れたら休み、休んだら又唱え、それが三年間で成功し、生死を離脱しました。このような殊勝な成就

はどこにも見当たりません。一句の阿弥陀仏は、専一で精進ということです。まじりがなく、止まりがないこと。これが成功の秘訣です。

世間と出世間法に関係なく、この一生の中で成就したければ、精進が欠かせません。念仏、参禅、念呪に関わらず、皆この原則を遵守すべきです。説法を学ぶと言えば、自分が修学するだけではなく、人を助けたいと発心すれば、一生の中で、一部の経を学び、一部の経を講ずる。それだけで、専一で精進ということです。講ずる度に、それ相応の境地に達し、毎回進歩があります。専門に『阿弥陀経』を講じて、十年間続けたら阿弥陀仏になります。専門に、十年間で「普門品」を講じたら、観音菩薩になります。もし十年間の間に、十部の経を講じたら何にもなれません。これで「精進」の大切さを知ります。民国五十八年、星雲法師は、私に仏学院で講義を教えようと招いてくれました。私は彼に「もし一



人の学生に一部の経を学ばせたら、十年、二十年後、あなたの仏光は全世界を普く照らし覆います」と提案しました。彼は「それも良いですが、そうすれば仏学院らしくありません。仏学院の課程は一般の学校と同様にしたいのです」と答えました。私は「このやり方ではある程度の利益があります。」と言いましたが、彼は私の提案を受入れませんでした。私は、そこで一学期だけを教えて、そこを離れました。もしその時、私の提案が本当に受入れられていれば、五割と言えば、百人の中で今では五十人の専門家が弘法できます。皆さんが『阿弥陀経』を聴きたければ、阿弥陀仏に講じてもらえます。『地藏経』を聴きたければ、地藏菩薩に講じてもらえます。こうすれば、仏法は本当に広く世間に知れ渡ります。ですから、皆さんには専門家になってほしいのです。通人にはなつてほしくありません。表面上で、いろいろ学んでも、実際にはどれについても精

通できません。一つの法門に通じれば、結果はすべてに通ずることになり、すべてに通じていても、一つの法門だけを弘法します。このやり方は皆さんにお手本を示しています。どの仏も、どの菩薩も、すべてに精通していても、一門だけに専念します。一つの法門に専念する修学法は「精通」であると教えています。精進の利益、功德は無量無辺です。

5. 禅定と般若

第五は「禅定」です。禅定は世間と出世間の禅定を包括します。世間禅定とは四禅八定ということで。成就できれば、将来は色界と無色界に生まれることができます。これは高級な天界です。禅定によって得られます。出世間禅定には大乘と小乗があります。諸仏如来が修する禅定は出世間禅定です。すべての仏法の修学する要は「定」にあります。禅宗だけが禅定を修するのではなく、他の宗派も禅定を



修します。念仏を例にすれば、一心不乱を得ることです。一心不乱とは禅定です。教下は、止観（雑念を止めて、心を一つの対象に集中し、正しい智慧を起こし、対象を観ること）を修します。止観も禅定です。密教では三密相应を修します。相应も禅定です。要するに、各宗派、各法門が用いる名詞は違いますが、事実はみんな定を修しています。六波羅密の中にすべての禅定が含まれています。生活の中の小さい定もそこに入っています。この小さい定とは何のことでしょうか？心の中で主宰があることです。大きく言えば、一生の中で、人には明白な方向と目標があります。この方向と目標は絶対環境に左右されず動かされません。これが定です。例えば科学者は、あることを研究して、他の事に影響されなければ成功します。彼は仏教という「三昧」を得ています。科学技術における三昧です。念仏する人は、一心不乱にできたら三昧を得られます。さつき

の諦閑法師の弟子のように、彼は本当に一心不乱に体得出来ました。忍辱は基礎です。忍耐できれば辛抱強くなれます。忍耐力があれば精進ができます。精進すれば定を得られます。定は修学の鍵です。

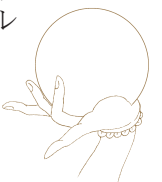
「禅定」とは、六祖大師は『壇経』の中で定義を与えて下さいました。この定義を明瞭にすれば禅定は座禅だけの意味ではないことがわかります。「座禅」は禅定を修する無量の方法の一つです。座禅以外にまだ方法があります。皆禅定を修します。六祖大師が、『金剛経』から悟りを開きました。よって大師が講じたすべてのことは『金剛経』で仏陀が説いた原理原則に依拠しています。大師の解釈は「禅」とは、外で相に執着しません（一切の境界の相に執着しないことが禅である）。「定」とは、内から心が動かないことです。『金剛経』の中で、釈迦牟尼仏が須菩提尊者にどういう態度で弘法すべきかを教えた時に「不取於相，如如不動」（現象に拘



らず、動かされず」という名言を言いました。不取於相は「禪」です。すなわち相に執着しないことです。内に心が動かず、念頭と考えが生じず、それが「定」です。『華嚴經』の「善財童子五十三参」では、禪定の長老である粥香長者を訪ねています。どこで見付けたのでしょうか？この長老は家で座禪をしておりますでしたし、道場にもいませんでした。どこへ行ったのでしょうか？長老は市場にいました。これは、仏経では賑やかな市場で修行するということです。例えば米国の大モール、長老はそこでぶらついているのは何故ですか？禪定を修しています。「外不著相，内不動心」（外では相に執着せず、内では心は不動である様子）を修しています。モールでふらついているようですが、実は長老は禪定を修しているのです。家で壁に面して座禪するのではなく、そこで高級禪定を修しています。我々は、表面的現象に囚われ、座禪する人を見れば、こ

の人の功夫が素晴らしいと思いますが、実はモールでふらつく人の定の功夫のほうが遥かに高いのです。高級な禪定は行、住、坐、臥、みなこの定の中にあてはまっています。

どうして「禪定」はこんなに大事なのでしょう？どうして必ず我々に「外では相を離れ、内では心が動かない」と教えるのでしょうか？その理由は、すべての相は虚妄で、一切の有為法如夢幻泡影（夢・幻・泡・影のようなもの。因縁によって生じたものはすべて実体がなく空であることを譬えた語）です。有為法とは何でしょうか？もしみなさんが唯識を読んだことがあれば分かりやすいのですが、「百法明門」の中で仏は一切の法を、即ち万事万法を百類にまとめています。この百類の八類は心法です。五十一類は心所法（心理作用）です。二十四類は不相応行法です。十一類は色法（物質）です。すべて有為法です。すべての物質は夢幻泡影です。心の動



きや妄想も夢幻泡影です。仏陀は、本当にこの事実真相を明瞭にしていますから、我々に、これらの現象に対して、念頭や妄念を起こさないようにと勧めています。そうすれば、真心も回復でき、宇宙の一切の事物に対する見方も如来と同様になります。その時の知見も仏の知見であり正しい知見で、これは「般若波羅蜜」です。すなわち般若の智慧です。所以に、般若智慧は日常生活の中に応用されています。我々は、菩薩行（菩薩の生活）を学ぶべきです。一切の法を明瞭に通達し、しかも執着せず、尽力に他人を助ける事。どうして他人を助けるのですようか？これは諸仏菩薩の「同体大悲、無縁大慈」という源からで、仏菩薩だけが尽虚空遍法界のあらゆる衆生が自分と一体であることを知っています。一体であれば、助けるには条件が要りません。我々の左手と右手のように、右手が痒くなれば、左手が自然に動くのに条件が要りますか？同じ体です。

現在、我々は自性を見失い、一切の衆生は我々と同体で同じ真如本性であることを知りません。ですから、ここで自分と他人を分別し迷惑顛倒になり、業を為し、自ら苦果を受けています。そのような苦辛は、言語に表せません。仏陀は我々に迷いを除き、悟りを開くことを教えてくれています。これらの迷惑顛倒をすべて打ち破れば、事実真相が初めて見えて来ます。一切の衆生を救うことが自分を救うことです。この慈悲心、愛の心は「無縁慈、同体悲」から出て来たもので、何の条件也没有ません。

つまり、一切の事には方法と順序があります。これが「持戒」です。忍耐と根気は「忍辱」です。怠けず専心に進めることは「精進」です。心に主宰があつて外の環境に動かされないことは「禅定」です。すべての事物について不明瞭、不通達しないことは「般若」です。仏陀は我々にこの六条をすべて日常生活の中で応用するようにと教えて下さっている



ます。実行できれば、真の菩薩行です。絶対に、菩薩戒を受ければ菩薩になるということではありません（この菩薩は迷惑顛倒な菩薩です）。もし六度を理解せずにこの六条を日常生活に応用できなければ、菩薩戒を受けても泥菩薩に過ぎません。

（五）十願

三福、六和、三学、六度を全部日常生活の中で応用出来れば、仏菩薩を学ぶことと言えます。少し菩薩らしくなります。菩薩の修行は、単なる六度だけでは成仏できません。更に、念仏し浄土に往生しようと思うことが大事です。念仏は功夫が純粹に近づき、外観では一心不乱になれますが、理論上の一心不乱には到達出来ません。言い換えれば、六波羅蜜を基礎として一層上に上るにはどういう法門がよいのでしょうか？この法門は『華嚴経』の「普賢菩薩十大願王」です。これは、成仏する法門で、一心不

乱に到達する法門です。法身大士の境地です。所以に、これは最後に修学するもので、順序を越えてはいけません。もし、六波羅蜜を修していなければ「十大願王」の縁にも近づけません。

普賢行の特色は、心の量が広大で虚空法界のようであります。十願のどの願も究竟円満です。第一、「礼敬諸仏」です。諸仏とは何でしょうか？仏陀は、『華嚴経』で我々に「情與無情、同圓種智」（万法すなわち全てのものは自性という同じ根源から生じられ、皆諸仏と同じ智慧がある。すなわち一切平等である）と説いています。これが諸仏です。「情」とは、一切の情が有る衆生です。いわゆるすべての動物のことです。「無情」とは植物や鉱物のことです。所以に、諸仏はあらゆる一切のものを包括しています。我々の仏に対する敬う心を転じて、一切の衆生に向ければ、普賢心です。これは、一般の菩薩の心と違います。単に仏に対する恭敬はまだ



本物ではありません。どうしてでしょうか？みなさんよく考えてみてください。経を聴くときに、もし、もつと重要な人、重要な事があれば、経を聴くのは、次に重要な事になり、仏も頭から離れてしまいます。このような恭敬は純真ではなく、もし至誠に恭敬していれば、法を聞くのが、人生の一大事になります。でも、事実から言えば、もしある人が、あなたが経を聴いている時に「今すぐに百万ドルの商売があります」とあなたに伝えたら、あなたはきつとすぐに出て行って、経を聴くのを止めてしまいます。ですから、我々が仏菩薩に対する恭敬と誠意は、試練に耐える事が難しいのです。試練が来れば、この尊敬と誠意は、発揮できません。少しも、真実性がありません。普賢行の恭しさは真実です。一切の衆生に対する態度は、仏に対する態度と同じです。どうしてでしょうか？一切の衆生は、本来仏です。一人の衆生の気持ちを害すれば仏の気持ちを

害することになります。仏に無礼なことになります。それでは、椅子と机に対してはどうすべきでしょうか？それも衆生です。「衆生」とは、たくさんの縁が交じり合って生じた現象という意です。どのように敬えば良いのでしょうか？毎日、それを頂礼するのですか？このように理解したら、愚か者になります。物に対して、きちんと片付けて正しく清潔に保養すれば、恭敬です。本をきちんと本棚に収めるのが本に対する恭敬です。所以に、真面目に責任感強く、尽力に事を完璧に処理するのが事に対する恭敬です。すなわち、対人、対事、対物は、平等に恭敬することであり、普賢菩薩の大作です。よつて、普賢行はもつとも円満で殊勝なる修行方法です。

第二、「称赞如来」です。第一は、礼敬諸仏で、第二は「称赞如来」と言います。どうして「称赞諸仏」とは言わないのでしょうか？その意図は深いで



す。「礼敬諸仏」は、外観から見た言い方です。相から言えば、一律に敬うべきです。善人を見れば尊敬し、悪人を見ても尊敬します。善悪、正邪を分別しません。正法を恭敬します。邪法も恭敬します。恭敬をしないことはありません。「称賛如来」は、本性から見た言い方です。ここに区別があります。善事を称賛します。悪事は称賛しません。恭敬しますが称賛しません。区別はここにあります。善財童子について、「五十三参」の中で、このような典範がありました。彼はどの善知識に対しても礼儀を以て恭敬称賛しています。ただ三人に対しては、恭敬するだけで称賛はしていません。この三人の一人目は、勝熱婆羅門です。この人は外道です。愚痴を代表します。善財童子は、彼を恭敬するだけで称賛はしていません。二人目は、甘露王です。嗔恚を代表します。この人の性格は非常に悪く、少しでも彼の気を害したら、すぐに罰せられます。油の入った

鍋に入れられ、刀の山に追われ、このように人を報復します。善財が行けば、恭敬するだけで称賛はしていません。三人目は筏蘇蜜多で、淫女です。善財が恭敬するだけで称賛はしません。この三人は貪、瞋、痴（三毒煩惱）を代表しています。恭敬はしますが、称賛はしていません。所以に、讃嘆は徳性を標準とし、必ず善きものと善法を讃嘆します。もし善法、正法でなければ、讃嘆しません。恭敬します。恭敬は、清浄心、平等心からです。他の一般の宗教に対しても恭敬しなければなりません。もし正法、正教であれば、讃嘆もします。例えば、カトリック教は正教です。人を昇天させます。終極ではありませんが、昇天することは、遥かに三悪道にいるより殊勝です。ですから、我々は讃嘆します。もし、人に悪行をさせ三途に堕させる邪教であれば、絶対に讃嘆しません。所以に、この十願の第二願と第一願には、これほど大きな差異がありますが、両



者の心地は、必ず清浄円満です。

第三は「広修供養」（広く供養を修すること）です。普賢行の特色は、心の包容力が無比に広大です。大乘仏法で、円満の徳性が作用を發揮します。一般の菩薩は見性（見性成仏）していますが、円満ではありません。ですから徳性の作用は部分的です。唯一、普賢菩薩の徳性の作用だけが円満です。どの願でも、虚空法界を包括しています。これは六度菩薩と異なる所です。因って、彼の供養は一を供養すればすべてを供養することになります。一体の仏を供養すれば、すべての仏を供養することになります。成仏した諸仏だけでなく有情と無情の衆生はすべて入っています。成仏していないあらゆる有情衆生から無情衆生まで全部含まれています。要するに「一即一切、一切即一」（一は一切で、一切は一）です、これは菩薩の修学方法です。すなわち華嚴境地です。この広い心で局限と分別を円満に開き

ました。普賢菩薩は、經典の中で我々に「一切の供養の中で法供養は最も殊勝である」と説かれていますが。その理由は、唯一仏法が迷いを破り、悟りを開かせることと、人に自性を回復させ、円満なる自性を証得させることです。これは、他の一切の布施と供養では到達出来ないことです。法供養の中で「教に依拠し修行する供養」が一番です。尚、ここで特別に注意すべきことは、仏法は師道です。師を尊敬すること、道を重んじることと師の教導に依って修学すれば究竟円満で不可思議な功德利益を得られるでしょう。

仏法と言えば、どの経が一番ですか？隋唐時代に、中国、日本、韓国の高僧大徳は、世尊が四十九年間で説法された一切の経を比較したところ、彼らのほとんどは『華嚴経』が第一位だと公認しました。『華嚴経』は究竟円満な教学であることは明らかです。これは、挙世公認した事実です。この大徳



方は、再び『無量寿経』と『華嚴経』を比較しました。その結果、『無量寿経』が第一位になりました。どうしてでしょうか？古徳はかつて言いました：『華嚴』、『法華』は二部大経です。中国仏法

では「一乗円教」と称します。一乗円教にはこの二部の経だけが含まれています。この二部の経は、又『無量寿経』の導引です。皆、我々を導き『無量寿経』に入っていく案内役なのです。所以に、『無量寿経』は一番の中の一冊です。古人のこの言葉を読んだ時、私は無比に歓喜しました。私自身にも深い体験があります。私が浄土宗に入ったのは『華嚴経』の引導のお陰でした。過去には『華嚴経』を十七年間講じていましたし、現在も中断していません。目前は、「普賢行願品」だけを講じています。この十七年間の間に、『華嚴経』から浄土に入りました。私は、普賢菩薩が最後の十大願王極樂へ導く意味を深く体得したからです。極樂は、『無量寿

経』の境地です。ここから、真正に『無量寿経』の全部が『華嚴経』の帰着で、『華嚴経』の精華であることを心得ました。改めて古人の話は絶対正確だと信じました。

由つて、釈迦牟尼仏が四十九年間の中で説かれた経の中で、最も良く、最も殊勝な経を見付け出し、選び抜きました。しかし、夏蓮居老居士が五種の原訳本を善本に編集してくれていなければ、我々は、こんなに円満で殊勝な法益を得られていないでしょう。編集の偉大さから見れば、老居士も菩薩の再来であり、普通の人ではないことが分かります。本当に、菩薩はこの一代の衆生を憐憫し、又、衆生の成仏する機縁が熟したとも言えます。所以に、大菩薩が感応されてこの世に生まれて来られました。我々の為に整理し、この法門を末法の九千年の間に大いに弘法され広く衆生を済度することを可能にしてくれました。私が北京に行った時、夏老居士の生徒で



ある黄念祖老居士が一枚の夏老居士の写真を贈って下さいました。台湾に持ち帰って拡大写真に焼き増しましたが、家で供養出来るように皆さんに提供しました。この写真を何度も焼増しましたが、依然として明晰しています。この写真から不思議な感応が見られます。夏老居士の後ろに屏風があり、老居士の頭の上に仏像が見えます。仏は光を放出していて、彼の靴からも光を放出しています。何回も焼き増ししていますが、依然明らかに見えます。老居士の頭の上に、一体の仏が、蓮台に座っています。老居士を供養することは、この大菩薩の恩徳を忘れないためです。我々の修行の依拠である完全なる善本を編集してくれたことに感謝しています。

『無量寿経』は全部で四十八品あります。どの品が一番でしょうか？根底を追求して、一番の中の一冊を探し出します。

善導大師は「如來所以興出世，唯說彌陀本願海」

（如来が世間に出て来た目的は、弥陀の本願を説くことだけにある）と説かれました。今、我々は、『無量寿経』が一切経の中の一冊だと理解出来ました。一切の諸仏如来は、皆この法門を弘法しています。言い換えれば、この経は、諸仏が衆生を済度する最も主要なる經典です。その他のすべての経は補助です。本経の四十八品の中で、第六品が最も重要です。第六品は、阿弥陀仏が説いた四十八願です。弥陀が自分で説いたものであり、釈迦牟尼仏が伝えました。「仏仏道同」（仏と仏は道が同じである）世尊が伝えたのは、阿弥陀仏が自分で説いたものと同じです。『無量寿経』の全経を開けば、釈迦牟尼仏が紹介してくれた西方極樂世界の状況は、四十八願に反するものがなく、各句、各字は四十八願に相応します。この四十八願の一番はどれでしょうか？古代のあらゆる高僧大徳は、皆第十八願が第一だと共同認定されています。第十八願とは何でしょうか？



か？それは、十念往生のことです。十念、或いは一念で往生を決定します。これで、仏法の真正円満で殊勝不可思議な境地が顕示されています。

早年、私は仏法を学ぶ初期の頃、ある疑問を抱えていました。もし、極めて重い罪を犯しすぐに地獄に堕ちそうな人がいたら、仏はその人を直ちに成仏させられるでしょうか？もし仏にこういう能力がなければ、仏の智慧と能力には、まだ限度があることになります。仏を「万徳万能」と讃嘆するのは只の讃美で、事実ではありません。反対に、仏がそういう人を直ちに成仏させられれば、仏の智慧と神力は本当に円満です。我々は、それを感服せずにはいられません。『無量寿経』の四十八願までを読んだ後、心の中の疑問が初めて消えました。仏の智慧と徳用は究竟円満で、少しの欠陥もないということがわかりました。仏は、的確に重い罪を犯した人を直ちに成仏させられますが、問題は、その人が信じる

かどうか、受け入れるかどうかということです。もし信心がなくて仏を受け入れなければ、仏の能力も發揮出来ません。『無量寿経』を読めば、仏の「万徳万能」は真実で、誇張ではなく、盲目的に讃嘆していない事が分かりました。これにより、我々は十方諸仏如来が衆生を済度する妙法を見つけ出しました。この法門に依拠し修学すれば成就しない人がいません。前に、諦閑老法師の弟子を例に出しました。一句の阿弥陀仏を三年間念じ、時刻到来を予知し、立ったままで往生したお話。彼の往生は、上品上生です。普通ではありません。彼は、往生した後でも三日間も立ち続け師匠を待っていました。彼の一句の仏の名号は第十八願です。彼の成就是第十八願の証明となります。この法門を信ずる人には、きつと大善根、大福德が具わっています。『無量寿経』で説明したように、彼はかつて過去世の中で、無量無辺の諸仏如来を供養していましたから、この



法門を信受奉行することが出来たのです。もしこのような善根がなければ、いくら勧められても信じないでしょう。

阿弥陀仏の名号に無量な義理が含まれています。

この一つの名号で、虚空法界のあらゆる意味が含まれています。我々は、この名号に含まれた意味を理解すれば、全部の『無量寿経』はこの名号の注解になります。『無量寿経』を理解したければ、『大方広仏華嚴経』は『無量寿経』の注解です。『大方広仏華嚴経』を理解したければ、全ての『大蔵経』が『大方広仏華嚴経』の注解です。このように、ゆつくりと会得して行けば、この名号の功德は本当に不可思議なものです。ですから、この一句の名号は、全部の仏教を含んでいます。この名号は尽虚空遍法界のあらゆる一切の法です。すべての法を包括しています。所以に、この名号を念じれば、すべての経を念じ尽くす意になります。清朝の乾隆時代

に、中国仏教史で名高い法師である慈雲灌頂法師がいました。慈雲灌頂法師には著作がたくさんありました。『観無量寿経直指疏』の中で、我々に次のように教えてくれています。世間人が災いを避けたい時、経、呪文、或いは種々の懺悔法を用いると皆効果があります。もし極めて重い罪障であれば、あらゆる懺悔法と経法も効かなくなった時、この一句の阿弥陀仏で罪障を消すことが出来、災いを除けられます。災い除け、滅罪にはこの一句の名号を使えば一番の功德を得られます。たくさんの人々は、このことを知らず、何時もこれを捨てて他を求めています。病気になるれば『薬師経』を念じます。災いがあれば「普門品」を念じます。人々は、この一句、阿弥陀仏の功德が遥かに一切の経呪を越えていることを知りません。懺悔法はどうでしょうか？実際に言くと、皆さんは最高のものを信じていず、受け入れていません。ですから、最も良いものと最高のもの



を最後に残します。台湾の故宮を見学する時に、故宮で最も価値のあるものは何でしょうか？商周の銅器です。しかし、一般の人が見れば、それはただの錆が入った銅にしか見えず、興味が湧きません。

明、清の玉器を見れば、本当に価値の付かない宝物のように見えます。実際に、玉器の価値は商周の銅器と比べ物になりません。錆の入った銅が、本当の価値の付かない珍宝です。同様に、世間の人は価値のあるものを知りません。「阿弥陀仏」の功德を知りません。仏は、仕方なく一切の経を講じ、衆生を西方極楽浄土へ導きます。ですから、善導大師の説かれたことは間違いありません。我々は、真に認識し、三宝の加持で浄土宗を専修し、広く弘法するのは、この時代の衆生の機縁が成熟したということなのです。最近の五、六年の中で、各種の異なる形式の『無量寿経』が何百万冊か印刷され、世界各地に流通されています。私は、世界各地で、極力紹介推薦

した結果、喜んで受け入れてくれる人も非常に多くありました。皆さんがこんなに真剣に修学する情景を見ると、本当に嬉しく思い、法悦を感じ、すべての苦労もなくなりました。この法門に依って修学し押し広めれば「広修供養」は円満になります。

諸仏菩薩の衆生を迎え入れる方法手段は無量無辺です。皆が大慈悲の顕見で、最後に全てを阿弥陀仏の極楽世界へと導く為です。密教と云えば、龍樹菩薩は鉄塔を開け、金剛薩埵（始祖）に会い、金剛薩埵が密法を龍樹菩薩に授け、そして龍樹菩薩によって人間世界に伝わりました。金剛薩埵を金剛手菩薩とも称します。普賢菩薩の化身と言われ、即ち、普賢菩薩のことです。もう一人の準提菩薩が密宗での名高い大徳で、観世音菩薩の化身とも言われ、すなわち観音菩薩です。我々凡夫の分別ある心の中には頭と密がありますが、仏菩薩の心の中は全てが完全なる円満、自在、平等、無分別です。このことを会



得すれば、八万四千の法門は、正に異なる道から一に帰することです。仏陀は、各種異なる根性の衆生を迎え入れるため、恒順衆生（つねに衆生の差別、執着に応じて、これを供養し、恵みを与え、衆生に従順するという誓い）随喜功德（他人のなす善を見て、これにしたがい、喜びの心を生ずること）をします。衆生には、学びたいことのみを教えます。最後は本家に帰します。皆さんは、阿弥陀仏に出会えたら、元々は、同じであることに気付けます。この事実を明瞭にしたら、あらゆる宗派と法門に対し、誠意を以て恭敬すべきです。修学の方法は異なっても到達する最終目的地は一つです。

第四は「懺悔業障」（業障を懺悔すること）です。業障は、すべての人が持っているものです。人は念頭を起こせば業をなします。必ず障碍になります。何を妨げるのでしょうか？本性を妨げます。我々の真如本性の中には、無量な智慧と無尽な徳用

があります。現在智慧、徳用、神力は、皆作用しなくなっています。原因は何でしょうか？障碍があるからです。障碍には二種類あります。一つは煩惱障で、もう一つは所知障です。我々は、この二種類の障害を消滅していない上、更に、毎日新しい業障を造っています。みなさんには執着しない時がありますか？仏陀は、『華嚴経』で、我々に「一切の衆生は、皆如来の智慧と徳相を有し、但し、妄想と執着があるため証得できぬ」と説かれ、我々の病根について語っています。医者が病人の病の根源を診断するように、「妄想」は所知障の根です。「執着」は煩惱障の根です。よって、仏法の修学は外にはありません、無量の法門や方法と手段は、我々の妄想と執着を打ち消す以外にはありません。一旦、二つの障害を突き破れたら仏性が見えて来ます。所以に「懺悔業障」は、仏法修学の中の鍵であり、要です。一切の修学法は、業障を懺悔する方法です。し



かし、業障は簡単に断ち切れません。業障が残っていれば、修行は成就しません。無量無辺の法門の中で、唯一浄土法門だけが最も特殊です。極めて重い罪の業障を負っても、乃至五逆重罪を犯し阿鼻地獄に堕ちるところでも、業障がまだ懺除していなくても、本心より過ちを改め、新しい自分を成すと発願し、この一句の「阿弥陀仏」の名号を専念し、真に浄土往生を望めば、業障は打ち消せます。すぐに成仏できます。所以に、慈雲大師は「この一句の阿弥陀仏は、呪文で消せない業障を消せる」と説かれました。これは、随意に言っている言葉ではなく的確なことです。經典の中で証明を得られます。

過去、何年間かの間に業を負ったので往生が出来ない。業障を消してから始めて往生できるという説がありました。この話は、仏教界で大きな震撼を引き起こしました。台湾と米国の念仏人は、皆慌てました。一九八四年、私がロサンゼルスに到着した

時、周宣徳老居士が空港に迎えに来て、彼の最初に出た言葉は「法師、現在、ある人は業を負いながら往生出来ないと言っています。我々は一生念仏しても無駄になってしまうのではありませんか？往生できなければ完全に終わります。どうすればいいのですか？」と私に問い掛けました。

私は聞いて笑いました。それから、彼に「業障を負いながら往生できなければ行かなくてもいいでしょう」と返答しました。

彼は余計に迷ってしまった様で「そうしたら、そうしたら、どういう訳ですか？」と嘆きました。

私は「もし業障を負いながら往生できなければ、西方極楽世界は阿弥陀仏一人だけになってしまいます。あなたが行く必要はないでしょう」と逆に問い掛けました。

彼は「どうしてですか？」と聞きました。

私は再び「よく考えてみてください。西方極楽世



界には、四土、三輩、九品という言い方はありますか？」

彼は「これはありません。經典にあります」

私は「もし業障を負わないと言ったら、この四土、三輩、九品はどこから来ていますか？」と続けて言いました。

彼はこれを聞いて少し理解出来ようでした。四土、三輩、九品は、業の多少によって分類されます。業障が多ければ品位は低くなり、業障が少なければ品位は高くなります。私は、更に「再び考えて見て下さい。観音菩薩、文殊菩薩、普賢菩薩は等覺菩薩です。經典によつて等覺菩薩にも未だ一品の無明が破れていません。それは業障ではありませんか？」と言いました。彼はそれを聞いて笑い出しました。それは業です。私は「誰が業障を負ったら往生できないと言っていますか？」と問い掛けると、彼は忽然と悟りました。ほっとして笑いました。極

樂世界にいる人はすべて業障を負つて往生した人達です。

仏法は、円満を説くことです。人と怨みを結びつけません。私は、又「業を消すというのも間違いありません。どうしてかと言うと、今、業を多く消し、西方極樂世界に行けば品位が高くなります。これも良い事です」と、一言を補充しました。ニューヨークに着いたら、沈家楨老居士も同じ質問をされました。本当にたくさんの人が真相を知らず影響されていました。了解した後、業障を負うということは間違つていず、業障を消すことも良い事です。これは業障を懺悔することです。この一句の阿弥陀仏を唱えれば、真正に懺悔となります。但し、念ずる時、心は阿弥陀仏の心と相応し、願は阿弥陀仏の願と相応し、解行も阿弥陀仏の解行と相応する必要があるあります。どうしたら相応できるのでしょうか？『無量寿經』を読誦するのは、円満に『無量寿經』

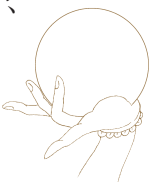


の道理や教訓を真剣に奉じ実践すれば相応になります。これが本当の念仏人です。念仏人は、絶対に「心ここにあらず」ではなく、口で念仏し、心で妄想を起こしていれば、少しも効果がありません。必ず、この名号を念ずる時には、心は仏心と一致し、願は仏願と一致し、四十八願を自分の本願に転じれば、本当の念仏となります。すなわち一切の罪障を消せます。

第五は「随喜功德」です。凡夫の嫉妬という重い煩惱を退治することです。嫉妬心は生まれながらあるものです。赤ん坊が、まだ何ヶ月か、一歳の年頃、飴をもらう時、もし他の人が多く取れば、心の中に嫉妬が自然に現れます。嫉妬心は修学にとっては大きな障害です。所以に、普賢菩薩は特別にこの願を提出し、「随喜功德」を修するようにと我々に勧めました。嫉妬をなくして、更に人の成す善は自分の成す善であることを知り、人の善行を成功させ

ることが重要です。随喜は単なる他人のなす善行、善事を見て喜びの心が生ずることだけではなく、尽力に他人の善行を促成し助ける必要があります。これは儒家が言う「成人之美、成人之善」です。もし、我々に能力がなく助ける事が出来なくても、歡喜心で讃嘆すれば、それも随喜功德です。随喜の時、嫉妬しない上に成就させようと発心しなければなりません。その上、尽力に他人を助けることは真実な随喜で、自分に力があっても尽力に助けず、或いは、単に嫉妬しないことは真実な随喜ではありません。他人を成就することは、自分を成就することと知らなければなりません。人に超えられることを喜んで容認出来れば、随喜の功德はもっと殊勝となります。

中国の古くからの教学は、後世子孫の成就が自分を超越するようにと望みます。超越出来なければ、それは教育の失敗を意味します。現代人のように嫉



妬心と障碍心があり、人が自分を超えることを恐れるのとは全く違います。人に教える時は、完全に

教えず、尽力に教授しない事を吝法と言います。吝法は、愚痴の果報を受けます。吝財は貧困の果報を受けます。このような人は、果報の恐ろしいことを知らないのです。以前の中国では、官位のある人の帽子は進賢冠と言われます。この官帽は法を表していて、深い教育の意義があります。帽子は階段のようにならなくて、前は低く後ろは高くなっています。低い方は、自分を代表し、高い方は、後人を代表しています。大臣は、いつも心の中で、後人が自分を越えられる事を望んでいます。徳行、学問、能力は言うまでもなく、生活水準に至るまで進歩を求め続け、高めさせることは教学の成功と言えます。社会全体は進歩しており、後退ではありません。皇帝の帽子の上は平らになっています。心の平等を表しています。皇帝と大臣の官服は、其々相応

する義務と責任を代表しています。常に、人々が正直であるようにと鞭撻しています。

次の時代は我々の教学の時代です。もし我々の徳行、学問、能力が相当な成就がなければ次世代の衆生を済度出来ません。どうしてでしょうか？現代の子供が受けている教育は、益々科学に偏っています。依存する社会は、益々複雑になって行きます。彼らを済度する人の心は益々清浄になり、智慧が益々高く、徳行は厚くならなければ次世代に対応出来ません。よって、「随喜功德」は非常に重要になって来ます。つまり、嫉妬や瞋恚は深く自性を傷つけることです。根から払い除けなければなりません。払い除く方法は「随喜功德」です。

第六は「請転法輪」（説法を請うこと）です。仏の弟子として、仏の教育を受け、真実の利益を得て、どういう方法で恩師（仏）に恩返しすればいいのでしょうか。仏菩薩の形像を供養し、毎日お供えを



すれば報恩と言えるでしょうか？それは報恩にはありません。仏像を供養し、仏前にお供えするのはいつも報恩することを忘れないようにと自分に気付かせるためです。本当の恩返しは、仏の願望を実現させる事です。仏の心願は、一切の衆生の心を仏心のようにすることです。この心願を実現させる事が本当の仏への恩返しとなります。所以に、本当の仏への恩返しは「請転法輪」です。現代の言葉に言い換えれば、法師を礼聘し弘法利生する事です。これが最大の福德です。その意味は、供養にあります。説法するのは法師ですが、礼聘という間接的な縁がなければ彼は自分から来られません。ですから、礼聘する人の福報は非常に大きいものです。一般に、修福と言うのは、自分のための修福でも、大衆と亡者（祖先或いは親類）のための修福でも、経を念ずるだけであっても功德は、結構大きいものです。講経の場合は、功德はもっと大きいです。経を念ずるの

は、たくさんの方が少しの善根を植えただけで、実際の教理を明瞭にしています。しかし、法師に講義して頂ければ、經典について完全に理解出来、喜んで読誦し、更に教えに従い奉行することが出来ます。そうすれば、講経の福德は誦経より何倍にも増えます。

現在では、講経の法師は少なくなりました。礼聘したくてもできません。私はたくさんの方で聴衆から「法師に弘法に来て頂くことは難しいです」という質問があると、私は笑いながら言いました「法師が講経弘法しに来ることは果報です。果には必ず因があります。修因しなければ、果報は簡単に得られません」修因は何を修するかと言えば、「修因」とは法師を育てることです。老法師、或いは名高い法師が来られれば、歓喜し、皆さんは競い合って供養するでしょう。初学の人は講経が旨くありませんから、聴きに行かないでしょう。関心も持たないでし



よう。そうしたら、初学の人は「講経は難しすぎます。やっぱり学ぶのをやめよう。経を念じた方が利はある」とやる気がなくなります。どうしたら法師を育てられるでしょうか？若ければ若いほど、講経が旨くない人ほど、持ち上げなければいけません。彼が称賛され、こんなにたくさんの人が来られるとは、多分、自分は大丈夫だろうと思って学業に励みます。又、初学の法師を軽慢しないように。特に気を付けなければならないのは、聴くだけで讃嘆しないことです。讃嘆は、誹謗より人を墮落させます。人は誹謗を聞けば、怒りますが、本当に意志の強い人は、誹謗があればあるほど努力精進します。高い成就の成果により人の見方を変えます。誹謗は、かえって彼にとって逆増上縁となります。もし讃嘆されたら、彼は自分が上達したと勘違いします。彼は努力しなくなり、上達も出来なくなります。どうしてかというと、自己満足しているからです。讃嘆は

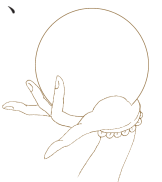
人を駄目にします。若い人と初学のの人に対して絶対讃嘆してはいけません。更に、供養してもいけません。財が多くなり、知名度が上がれば、すぐに墮落します。若い法師は、菩提心を発し出家しますが、信徒の讃嘆と供養によって墮落してしまいます。法師を墮落させるのは、信徒です。法師を墮落させれば、将来果報を受ける時は誰も助けられません。連帯関係がありますから。どういう人に対して大いに供養すればいいのでしょうか？それは、八風に吹かれても動かない人です。このような人は、讃嘆されても歓喜心を生じず、誹謗されても煩惱心を起こしません。このような人の心は永遠に平静に保たれています。このような人は、真に讃嘆に値します。どうしてかというと、讃嘆は彼を害さないからです。彼を宣揚し、更に多くの人に知らされ、より多くの衆生を救えるようになります。ですから、供養することと供養を受けることは両方とも非常に難しいこと



なのです。仏教には、よく「施主の一粒の米は須彌山の如く重い、今世に道を悟らなければ、毛と角を被って（すなわち動物になること）返さなければならぬ」という言い伝えがあります。ですから、供養は受け入れられません。受けて享受することは、尚更できません。人にはどれほど大きい福報があるのでしょう？ 實際を言うと、諸仏、菩薩もこの供養を享受しません。もし、供養者が福報を植えるのであれば、受けるべきです。受けてから供養に転じればいいのです。

近代、印光大師が我々に非常に良い手本を示して下さいました。印光大師の帰依弟子が数え切れないほどいましたので、印光大師が財供養を受ければ、それを全部経本を印刷することに使いました。蘇州弘化社は、印光大師が自分で作った印経機構（經典を流通する機構）です。私は、出家してから完全に印光法師の真似をしました。弟子の一切の供養を全

部経本を印刷し、皆さんに配布しました。そして、心の中で自分が悟らなければ、毛と角を被って返すようにはならないだろうと思いました。どうしてかと言えば、經典をもらったすべての人達が私の代わりに返してくれるからです。これは、布施から修得した福を転じて布施供養となります。このようにすれば、皆さんの福報は、無量無辺になります。信徒の供養を受ける時、このようにすれば如法です。もし、供養を受け自分で享受すれば、絶対に如法ではありません。寺や道場を建てるにしても、本当に弘法利生の為の道場であれば、布施供養の真実なる功德となります。もし、道場で弘法せず、修業もしないなければ、この道場は、鬭争する道場になりかねません。ですから、道場を建てるに当たり特に気を付けなければならないことです。以前、李炳南老師が「道場を建てる当初は誰もが菩薩です。尽力をあげてこの道場を建てます。道場が建ち終わると、皆



が羅刹に変身してしまいます」と言ったことがあります。どうしてでしょうか？権力を争い、利益を奪います。変質しています。道場を建てる初心を、すっかり忘れてしまっています。

法師を供養する時も気を付けなければなりません。仏には、法師への供養は、四事供養であるべきであるという教えがあります。四事とは、まず飲食。法師も人間です。世間にいれば食べなければ成りません。法師に飲食を供養し、生命を支えます。衣服。法師も衣服を着る必要があります。彼の服が破れれば（未だあれば不必要です）一着の服を供養します。病気になった時には、湯薬をくようします。寝る時には、臥具を供養します。現在では、ある信徒が家を供養したり、いい物があれば、それも全部法師に供養したりしています。それ故、法師の生活は居心地が良すぎ、西方極楽世界に行きたいと思わなくなっています。ここも悪くないですね。

どうして西方に行きたいでしょう？仏道を成す道心も、生死を脱する道心も無くなっています。このことは、法師を育てることや法師を成就させることに対し、実に大きな損害です。法師は、出家すれば家がなくなります。もう一軒の家を彼に贈れば、また彼を家に入れることになります。これはその法師を駄目にしてしまいます。法師に所有権があり財産もあれば、元に戻ってしまいます。誰が法師を駄目にしたのかと言えば、信徒が法師を駄目しているのです。このような人は、自分が毎日仏法を破壊し三宝を害していることに気付いていません。自分は、たくさん善行と功德を積んでいると思ひ込んでいます。命終して、地獄で閻王に会えば、弁明しようとしても出来ません。事実がありますから、弁明する余地がありません。

仏教の道場で修福するには、真実なる智慧が要ります。これは、説明すべきことです。たくさん法



師は説明したがりません。明らかにすれば信徒が供養しなくなるからです。逃げていってしまいます。

私の場合、はっきり言えば、私は西方極樂世界に行きたいのです。ここで苦勞したくはありません。ですから、私は皆さんに真実の事を話します。供養がないことを恐れていません。供養がなければ一番樂です。私の手間が省けます。この為に、私は仏陀教育基金会を作りました。専門に經典を印刷します。經典を配布します。私は、責任者の簡居士に、ある原則を言いました。「供養が多ければ多く印刷し、少なれば少なく印行し、供養がなければ經本を印刷しなくて結構です。それが一番いいのです」皆さんの供養が多ければ、氣を遣って、どの本を先に印刷しようか、どう印刷すればいいのかと考えなくてはなりません。供養がなければ、最も清淨で手間がかかりません。ですから、供養を求めず、道場を求めず、何も求めなければ、心は清淨になります。こ

れは道心です。自分で清淨心を修し、他人が清淨心を修するのを助け、絶対に名聞利養から遠ざけることが真の仏法です。若い法師を成就させたければ、彼らに苦しみを味わわせた方がいいのです。彼らが苦勞するのを見てもらえないと思えば、それは彼らを害することになります。（苦勞しなければいけません）釈迦牟尼仏が在世の頃、全ての弟子達は、日中一食、樹下一宿のような貧苦の生活をしていました。あなたがもしそれを見て、彼らを世間に呼び戻したら、彼らはどうやって成道出来るのでしょうか？ 仏陀は、經典で「以苦為師」（苦を師とする）と我々に教えて下さっています。常に苦痛の中に行けば、本当の道心が起こり、固い信念でこの世間を超越しようと思うようになります。所以に、苦は良いものです。自分が苦しみを味わいたくなければ、他人が、苦勞しているのを恭敬心で見守り、障碍しないで下さい。真誠に、確實に、法師を育て上げ成



就させて、その後法を求めれば、本当の良い法師がここに來て弘法利生して下さいます。

第七は「請仏住世」（仏に世に留まってもらうこと）です。「請轉法輪」の主要な目的は、仏教を宣伝することです。普遍に、広く仏教を大衆に紹介することです。我々は、この一生の中で修学し、真の成就をしたければ、「請轉法輪」だけでは足りません。みなさんよく考えて見てください。一生の中で、一回か二回の經を聴いただけで悟りを開き証果した人はいるでしょうか？ 仏陀が在世の時にはありましたが、仏滅した後は、もうなくなりました。所以に「請仏住世」は必須です。すなわち良い教師に常駐して頂くことにより、毎日教導を受けられます。それで、我々が長期的に薰陶を受ければ成就できます。

私が台中で学習していた頃、李炳南老師が、生徒に「其々の志向を述べてください」と問い掛けま

した。孔子が、弟子に「其々の志向と願望を言ってみてください」と問い掛けたように、私にその質問が來ましたので、私は「将来は、あちこちで弘法利生することを希望します。」と答えました。師はそれを聞いて、頷いて言いました「結構です。しかし、それで大衆は成就出来ません。」師は再び「あなたは自分で成就出来ますが、他人は成就出来ません。」と補充しました。私は「どうしてですか？」と聞くと、師は「宣伝する効果を得られるだけです」と答えました。老師は、三十年間台中に住み、台中のたくさんの人々はそこで成就しました。師は更に「もし私が、一年間の間に一日か二日だけ台中に來るのであれば、一人も成就できないでしょう。これは「一日曝之、十日寒之」（一日だけ熱心であり、十日だと興が冷めること）」と説明して下さいました。正に道理はその通りです。しかし、仏教は縁を重視します。仏陀は無縁の人を濟度しません。



無縁の人を救おうとしても、信じてもらえず、結果的に無駄です。あちこちで法を宣揚する縁は、浅くて簡単です。ある地方に住み続け、一方を教化する縁は深くなければなりません。所以に、私は、幾年も外で遊化していました。自分は本当に利益を得られました。最も大きい利益は「家」に対する觀念が淡泊になったことでした。毎日旅行し、毎日旅館に泊まり、どこにも家がありません。確実にありません。自分の道場があっても、一年間のうち十幾日住むだけであり、又、出かけます。旅館に泊まっているようなものです。「家」の觀念を打ち破れば、自分にとって一種の解脱になります。これは容易に理解出来ません。それを私は十分に体得しました。

大衆は、成就したければ、仏陀が住世することが大事になります。仏滅すれば、仏の弟子で、出家や在家（居士）に関係なく、本当に修行を積み重ね、学問があり、徳行があり、我々の手本で、我々

の修学を指導できる人であれば、ここに常駐させるべきです。この地区の人々は、長期的に薰陶を受ければ、本当の成就を得られます。ですから、成就したければ「請転法輪」以外、真剣に「請仏住世」と発心することが必須になります。もし、我々自身が敬虔な仏弟子であれば、仏法の真実の利益を受けた我々自身から、法師大徳を礼聘すべきです。常駐される法師に対しては、誠心誠意に、かつ、尽力に供養する義務があります。本当の大徳であれば、生活が非常に簡単で世話が掛かりません。これが、一定の道理です。又、道場の莊嚴さは、すべて衆生を迎え入れるためであります。もし、道場が莊嚴でなければ、他人が見れば、この道場は、たいしたことがないと思われるしまいます。もし、この道場が莊嚴で立派であれば、彼らがここは素晴らしい所在と思ひ、歓喜心と恭敬心が自然に生じるでしょう。一般の人は見掛けだけで中身を知りません。ですから、



外觀が良ければ広大な衆生を摂取できます。真の価値を理解する人は、外觀に拘りませんが、衆生を迎え入れるために、道場は莊嚴である必要があります。道場が莊嚴であっても、道場に住んでいる出家の人の居所は粗末です。中国大陸に行つて見ればわかります。中国の寺院は、宮殿式で幾重の閣に飛檐で、非常に莊嚴です。反対に、出家の人の住まいは粗末で、方丈和尚が住んでいる場所も単純で素朴です。ですから、莊嚴なる道場は、大衆を摂取する為にあることは明らかです。これらのことを細心に觀察する必要があります。そうすれば、どのような態度で、どのような方法で、どのような儀式で「請仏住世」をすれば、この地方で仏法が根を下ろし、成長し、花が開き、実を実らせることが出来るのかが明白になって来ます。

普賢十願の前の七願は、菩薩の願行で、後の三願は菩薩の回向行です。所以に第八願「常随仏学」

(常に仏を学ぶこと)は、仏陀が修学の模範、典範であることを示しています。今、仏陀は世にいませんが、仏陀の經典は未だ世間にあります。經典を依拠として修行することは「常随仏学」です。この方法は、仏法修学の中で最高標準に当ります。

第九は「恒順衆生」です。これは、法界の一切有情衆生に順ずることを指します。順ずることは難しいです。中国人は「孝」を重んじます。その次は「順」を重んじます。順じなければ不孝になります。仏法を学ぶことは、大孝の行為で、衆生に順ずることです。また恒順の中で、機縁を觀察し、衆生が断悪修善するようにと誘導します。迷いを払い、悟りを開かせます。時期因縁を知ることが大切であり、知っておれば、適時適所で善巧に対処し、円満に効果を収められます。

最後は、第十項で「普皆回向」です。自分の行なつた善根功德を、少しも保留せずに法界一切の衆



生、菩提に差し向けて利益を回向します。心を開くことです。尽虚空遍法界のすべてのことは、自分自身であると悟れます。この境地を証得できれば、究竟の大円満になります。

つまり、我々が修学の依拠となるのは、浄土五經一論です。修行の方法には五科目があります：三福、六和、三学、六度、十大願王。非常に簡単明瞭で、複雑ではありません。我々が一生この原則によって修学すれば絶対成就します。古徳の言葉で「萬修萬人去」（万人が修すれば万人が行く）という教えは、理論の依拠と修行の方法を我々に提供しています。日常生活の中で、どのような態度で対人、対事、対物すればいいかというと、この五科目を遵守すれば絶対に間違いありません。そして専心念仏すれば、成就出来ない人はいません。



放下 我癡我見
隨順佛陀
教誨



無知による誤解を放下（一切を捨て去ること）し、仏陀の教えに従おう。

七、仏法の修学次第

(一) 信解行証

前は、仏法修学の依拠、及び行門綱領に対する紹介でした。更に、仏法教学の善巧を説明しましょう。「善巧」とは手段方法が巧みであることです。もし知らなければ、仏法から真実な利益が学べません。仏法の修学は、四段階に分けられます。すなわち、清涼大師が華嚴経で説いた「信、解、行、証」です。

第一、「信」です。信ずることは、すなわち縁が成熟したということです。我々は、よく「仏は、無縁の人を済度しない。」と言いますが、縁とは、信ずることです。信じない人は、縁がまだ熟していない人のことです。所以に、仏は、衆生を済度するのは、必ず信ずる人から済度します。仏教は、他の宗教と違い、他の宗教では信じれば助かりますが、仏

法の「信」は入門することを意味します。「信」の後は、「解」になります。一切のことを理解する必要があります。すなわち、宇宙人生の真相を理解することです。本当に理解してから修行に入ります。所以に「行」は「解」を基礎とし建てられています。理論を理解せず、方法もわからなければ「行」はできません。そうでなければ、この「行」は、盲目状態での修行となります。本当の「行」ではありません。本当の行は、必ず理論の基礎と正確な方法に基づきます。「行」の最後の目的は「証」に達することです。「証」すれば、本当の受用を得られます。「証」とは、簡単に言えば自分を信ずることです。理解したことと、行ずることを、生活の中で応用し、すべてが融合できれば「証」は円満です。例えば、『無量寿経』で説かれているのは、我々の考え方と行為です。すなわち経のことです。経と生活を一緒に融合させれば「証」です。真如です。仏法



の貴重さは此処にあります。

所以に、必ず修行の次第を知らなければなりません。それは「信、解、行、証」です。「信」とは、第一、自分を信ずることです。これは、仏教がほかの宗教と違うところです。神を信ずることは、宗教で最も重要な条件の一つです。しかし仏法で、最も重要なのは自分を信ずることであり、外のものを信ずることではありません。自分に仏性があることを信じます。自分が本来仏であることを信じます。自分は、諸仏如来と無二無別であることを信じます。自分の真如本性に汚れれば、汚れを払えば自性が回復でき、諸仏如来と同様になります。もし、いつも自分の罪惡が深いので成就できないという恐れがあれば、絶対に成就できません。それは、自分が成就できることを信じていないからです。仏菩薩が、どんなに大きい神力、大智慧と徳行があっても、彼を助けられません。仏菩薩は、立ち上がれる人を救っ

て下さいますが、自分で立ち上がれなければ、仏菩薩でも、なす術がありません。所以に、第一は自分を信ずることです。

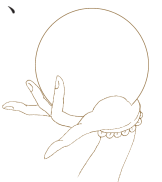
第二、他を信ずることです。「他」とは、仏法のことです。我々は、仏が經典の中で説いたたくさんの道理と方法を依拠し信心が深まります。この通りに修行すれば絶対成就できます。ですから、まず自分を信じ、それから他を信じます。藕益大師は「理」（道理）を信ずることと「事」を信ずることへと義理を拡大しました。「事」は「理」から来ています。「理」とは清浄心であり、真如本性（真心）のことで、一切の万物現象は「理」から顕現されたものです。その根底には、因果があります。しかも、因果は連続に循環しています。前の因に果が実り、果が再び因となり、因は、又、果を実らせ、このように循環し、重ね重ねで、無尽になります。これらの事実を明瞭にすれば、ここから信心が始ま



ります。それから、「解」を求めます。一切の通達
が明瞭になることを求めます。こうすれば、修行に
惑いがなくなり、法悦を得られ、障碍もなくなりま
す。

仏法を学ぼうとするのに最も重要な事は、一人の
師に親近することです。師の教導を受け入れ、師の
教える方法に従い修学することは、古今不変な正道
です。中国古代では、仏教教学は、まず五年間、戒
を学びます。この「戒」は三蔵の律蔵ではなく、師
の教戒を遵守し、師が定めた規矩を遵守すること
です。この学生は、将来成功しても、失敗しても、師
にすべての責任があります。これが師道です。正直
に言えば、今はもう師道がなくなりました。それ
は、先生が無責任だからです。学生も真剣に勉強し
ませんし、師道は本当に没落しています。これは現
代の悲劇です。学生は、先生に対して尊敬の念がな
く、先生も、真剣に学生に気配りせず、学生の願望

を満足させていません。五年間、戒を学ぶことは、
中国人曰く「師承」のことです。どういう戒を学ぶ
のでしょうか？簡単に言えば、「戒、定、慧」三学
の基礎を養うことです。これは師の責任です。師の
教えは、外にはありません。禅宗に弟子入りするよ
うに、この五年間、師は弟子にどういうことをさせ
るのでしょうか？それは、一つの仕事を与えて真面
目に遂行してもらい、毎日型通りの行動をさせま
す。この単純な修行法を変えてはなりません。弟子
は、窮屈に感じ、五年間、道場で雑用をしたただだ
と思うかもしれませんが、事實は、彼の考えと違
い、彼はたくさんのかんことを身につけています。本人
が知らないだけです。何を身に付けたかというのと、
煩惱が減っています。制限されたことを全部遵守で
きれば、五年後には、福と慧の修行を両得出来ま
す。「福」と「慧」は？毎日お寺で仕事するのは布
施を修しています。出家すれば供養する金がありま



せんが、仕事をこなし、労力で布施波羅蜜と供養を修することになります。これは「福」です。毎日、これも聞けずあれも見ず、六根が塞がり摂取されれば、心が定を得られ清浄になります。これは「慧」です。所以に師は福、戒、定、慧の修行を一齊に、少しも痕跡がなく教えています。

この教学法は、教下でも同様です。法華宗を例にあげれば、一旦、天台宗の道場に弟子入りすれば、師は、常住のひとつの仕事を弟子に与え、或いは掃除、水汲み、台所で雑用などをさせて、それから経文を暗記させます。天台宗は、『法華経』を主として修しますので、弟子は、『法華経』を毎日読誦し、五年間ずっと読み続けて、暗記できるようにになります。仕事するときには、経を離します。仕事が終わると、又、すぐに持経します。ほかは、何もありません。一心で雑用をこなします。このように五年間を過ごすのが本当の修学です。絶対に、使用人扱い

されていると誤解してはいけません。これは真実の定、慧を同時に身に付けることで、修学の基礎を築くことです。五年間が経てば、この弟子に福と慧がともに具わるようになり、講堂で聴講が許されるようになります。一、二年、経を聴けば悟りを開き、見性成仏します。

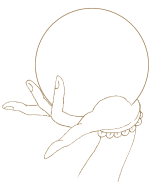
「高僧伝」を読めば古人のこの教学方法が伺えます。生徒は、寺院に長く住んでいなくても、証果開悟が出来ます。しかし、現代の人々は、一つの道場に三、五年或いは一生住んでも開悟出来ません。読経をし、三蔵十二部を全部読んでも悟りを開けません。せいぜいある程度の仏学常識を得られるだけです。たくさん読むことと、たくさん覚えても煩惱は断てず、智慧も開けません。ですから、師に親近して、師の指定した道を歩む最初の時期は、恐らく窮屈でしょうが、この時期を過ぎれば、不可思議な歓喜を得られます。本当に法樂を味わえる喜びです。



今日の修学には、嚴重な間違いがあります。それは、最初から「広学多聞」することです。しかし、古徳は煩惱を断つところから学び始めます。すなわち「煩惱無尽誓願断」です。煩惱を全部断ち切れば、定と慧の修学も完了し、それから「法門無量誓願学」となります。これは正しい修学の道で、どの段階も省くことは出来ません。現代人が、修学で犯す過ちは、煩惱を断たずに広く学び始めることです。しかも益々多く学ぶことを望んでいます。清涼大師は、この修学方法を「有解無行」（理解だけで、実際の行動がない）だと言っています。理解しようと思うばかりで、努力し、自分の本当の功夫を疎かにしているからです。煩惱を断たず、清浄心を修さず、その結果、邪見が増える一方です。このように得た知見は、みな邪知邪見で、正しい知見ではありません。この話は非常に道理に合っています。

（二）戒定慧を同時に修行すること

仏法を学ぶのはどこから始めれば良いのでしょうか？それは、一部の経を読むところから着手すべきです。意味が解らなくてもいいのです。煩惱を断たなければ、福慧が足りず、理解したことは、邪知邪見で間違いです。どうして、ずっと一部の経を念ずるのでしょうか？経を念ずるには禅宗の禅定を修する方法と、密宗の三密加持と異曲同工の効果がありません。方法手段が異なるだけです。経を念ずると、戒、定、慧、三学を一回で完成させられます。戒律とは「諸惡莫作，眾善奉行」（一切の惡を断ち、一切の善を為す）のことです。読経する時、心が散乱しなければ、「諸惡」は自然に止みます。経典とは、仏が真如本性から顯れた言語文字であって、これ以上に善いものではありません。よって、読経は「衆善奉行」の意味です。読経すれば同時に戒律も円満になります。一つずつ修する必要がなくな



ります。読経は、専念しなければなりません。専念とは、定を修することです。念ずる時は、最初から最後まで間違いがなく、漏れるところがなく、はっきり朗朗と念じれば、慧を修することになります。所以に、経を念ずることは「戒、定、慧」三学を一斉に修することです。もし念じながら研究し、仏経を世間の本のように見なしたら、「戒、定、慧」三学を全部失ってしまいます。修行と言えなくなり、読経は、修行の基礎で、修行の根本ですから、決して軽く考えるはなりません。修行入門は、読経を選択し、この方法で取り掛かれば正しいのです。もし、一日に一時間経を読めば、一時間の修行となります。二時間かけて読めば、二時間の修行となります。勿論修行の時間は、長ければ長いほど良いことです。台湾とダラスの道場で、たくさんのお修が一日に、『無量寿経』を十回読みます。彼らは、恐らく二千回以上読んでいることでしょう。経文を熟

知し、一回にかける時間は三十分から四十五分ぐらいです。一日に十回読めばおよそ五、六時間で戒を修していることになります。毎日これだけ長い時間をかけ修行すれば、何年か後には心が自然に落ち着きを得られ、定を得られます。定を得て再び経を読めば、目が輝いて来ます。どうしてでしょうか？一読すればすぐに意味が明瞭になり、全部理解出来ます。仏経は、仏が清浄心から顕れたもので、我々の心も清浄であれば、自然に仏心と相応し、理解出来るのも当然です。今、仏経を理解出来ないのは、我々の心が散乱していて、清浄心である仏心と相応出来ず、共鳴を起こせないためです。それ故、仏の真意を理解できません。この道理を知り、善知識と良き師に親近する時は、師匠の教えた方法は、決して間違いがないのだと堅く信ずることが大切です。

慎重に、一部の経を選びます。浄土を修するには、『無量寿経』になります。天台を修するには



『法華經』になります。華嚴を修するには『華嚴經』になります。任意の宗派を修したければ、その宗の主なる經典を選び、一門だけを専攻することです。まず属している宗派の經典を真面目に五年間かけて読みます。言い換えれば、五年間で煩惱を払い、清浄心を回復させる。それが、仏法を学ぶ第一歩を踏み出すことです。実を言うと、五年の時間は、以前であれば適当でありましたが、現代では通用しなくなっています。以前の人は、心地に汚れが少なく、汚染された程度も軽いので、五年間かけ洗浄することにより、ほとんど取り除けます。現代人は、汚染の程度はひどいものです。尚、以前の人には、十歳を過ぎて、初めて汚染され、是非、人我、貪、瞋、痴、慢が現れます。現在の子供は、二、三歳から、もう貪、瞋、痴、慢が現れています。どこから学んだのでしょうか？それは、テレビから学んだのです。家庭では、毎日テレビを見ていますので

汚染を防げません。天真爛漫な幼少時代がなくなっています。本当に不幸なことです。私は、幼い頃、農村にいました。十三、四歳になってから初めて物心がつきました。幼少の時間が長かったのです。幼少の頃は物事がわからなくて、本当に幸せでした。世間の苦しみを一切知らず、毎日、遊ぶことに専念していました。物心がつけば楽しさは薄れて行きます。人の顔色を見るようになり、言うまでもなく、この時代の人々は、以前と比べられません。人生は本当に辛いものです。心が清浄になり智慧が開けるまで修学すれば参学は許されるようになります。あらゆる物を見ること、聴くことと接触することが許されます。自分に定がある故、外の環境に影響されなくなっています。自分が主宰出来れば、見ることや聴くことが多ければ多いほど、智慧と定力の増上縁になります。定と慧はどのように増上するののかと言え、外の環境に動かされなければ定力を増上さ



せます。全てが明瞭であれば、智慧を増上させます。ですから、この時に参学すると、定と慧は更に上昇出来ます。これが古人の教学方法です。まず戒、定、慧を修します。根本智を修してから、再び参学すれば円満なる後得智が成就します。すなわち、全てが明瞭です。仏は『般若経』で曰く「般若無知、無所不知」（根本の智慧は何も知らないが、作用すれば、すべてが明瞭なり）所以に、まず「無知」を修します。五年間戒を学びます。すなわち何も知らないことです。それから社会に出て、何でも明瞭にします。つまり「無所不知」です。本当の修行はこういう次第で、こういう方法で目的を達成して行きます。

古大徳の教えによれば、釈迦牟尼仏が教導した規矩を遵守するだけではなく、更に儒家の基礎を修学の基本とします。その訳は、中国仏教は小乗を捨て、儒家を小乗の代替としました。特に、孔子の徳

行を仏教に入門する根基とし、すなわち『論語』に説く「五徳」です。温厚、善良、恭慎、節儉、忍讓です。即ち「温、良、恭、儉、讓」です。この上に三福、六和、三学、六度、十大願王を築いて行けば、真正に究竟円満に成し遂げられます。全部の仏法は、宗派と法門に関係がなく、宗門、教下、顕教、密教は皆この構造と基礎から離れられず、この原則に背けません。言い換えれば、この構造と段階に従って修学すれば、宗派に関係なく必ず成就します。由つて、五徳、六和の上に基礎を築くのが中国大乘仏法の特色だと言えます。

これ以外に、仏法は教学上、もうひとつの進歩的なやり方があります。近代になってからやっと発見されました。進修教育のことです。仏陀が在世の頃、未だ卒業していない聲聞弟子達は独立していません、仏陀から離れずに一緒に生活していました。菩薩は成就を得た弟子でした。菩薩は仏陀の代わりに



一方を教化し、（仏に代わって弘法することである）各地で道場を建て、講經說法をして仏教を押し広めていました。しかし、毎年ある期間だけ、学生の夏休みのように又仏陀の所に戻ります。学生は休みに入りますが、教師はまだ進修学習しなければならない故、仏陀の所に戻って再教育を受けます。普通は、三ヶ月間の学習生活であり、これを「結夏安居」と言います。結夏安居というのは、四方で教化に従事する学生を呼び戻すことです。全員を召集し、仏陀の講經說法を聴かせて、彼らの戒、定、慧を更に増上させます。その上、教学上における各種の境遇や難題、及び解決法を研究討論し、互いの参考改進となるように着目します。このような教学方法は、中国歴代では見ることが稀でした。このような暑中休暇での進修教育は、非常に称賛すべきです。結夏安居を取り入れることは、まだ台湾で少数の地区に残っていますが、しかし形式上だけとなり本来の精神はもう残っていません。現在の

寺院、或いは居士団体が行う夏冬の修学旅行、仏学講座、念仏会、法要などのことも進修教育に類似しています。普遍に提唱すべきです。煩惱を断ずることは、戒、定、慧を修することです。生死を了するという話題などは、この世間では非常に珍しいものであり、語っても人に受入れられないでしょう。しかし、進修教育法は非常に殊勝で効果的です。現在の人々は觀念が違いますので、始めからたくさんこのことを学びます。その結果、ひとつが有限で、ひとつ（一門専攻すること）が無限です。実に差が大きいのです。何千年に亘り、この方法を用いて数え切れない人達が成就しました。反対に、現在の新しい教学方法を見れば、せいぜい、人々に仏学の博士学位や少しの名聞利養を与えるだけのこととなっています。煩惱を断ずること、生死を了すること、三界を超越することとなれば、恐らく非常に困難でしょう。ここで深く反省すべきです。



南無阿彌陀佛

南無大勢至菩薩

南無觀世音菩薩



西方極樂淨土の三尊、左から大勢至菩薩、阿彌陀仏、觀世音菩薩。

仏教では、一般的に供養している仏像は、一体の仏像と二体の菩薩像です。仏は「自性本体」を代表しています、菩薩は「相」と「用」を代表し。無量無辺の「相」「用」は、主に二種類に分けられます。一つは「知」、ひとつは「行」です。すなわち、「解」、「行」のことです。浄土宗は、阿彌陀仏を供奉し、自性本体を代表します。觀音菩薩は、大慈大悲で「行」を代表しています。大勢至菩薩は、智慧第一で「解」を代表しています。ですから、仏像のお供えの仕方はそれぞれの意義があります。必ず、一体の仏像と二体の菩薩像で、絶対に二体の仏像と三体の菩薩像になることはありません。

八、仏法の教学芸術

更に、仏法の教学芸術を語ります。仏陀が在世の頃、各地を巡って講經説法していました。その姿は、列国を周遊する孔子によく似ていました。印度にいた頃、仏陀の大団体は、何処かに招かれたら、そこに行きます。ある時期を経て、別の地方に招聘されたら、又そこへ行きます。しかし、どこにも定住しませんでした。仏陀は一人で行くのではなく、千二百五十人を連れて行動しました。ですから、招聘する側も容易ではありませんでした。本当に財力と物力がなければ招聘はできませんでした。仏法は、中国に伝来してから寺院が整えられました。すなわち固定した住居ができたのです。その理由とは、帝王が仏教を迎え入れたことです。印度で托鉢する僧侶は、大変尊敬され、恭敬かつ供養されていました。反対に、中国では、托鉢は、乞食に等しい

という印象があり、人に見下されていました。僧侶達は、皇帝が迎えた貴賓であり皇帝の師の身分でしたから、皇帝の師に物乞いをさせませんでした。したがって、仏法が中国に伝来すると、自然に中国化とされました。托鉢や、樹下一宿の習わしが廃除され、僧侶の中国での生活方法は、住居がある生活に変わりました。朝廷は侍従を指定し、僧侶の世話をさせました。よって、僧侶は生活のために苦勞することがなくなりました。唐時代になってから、寺院は、叢林に発展し、百丈大師と馬祖は大寺院制度の二人の創始者でした。馬祖とは、禪宗の道一禪師のことです。俗姓は「馬」で禪宗第八代目の祖師で、六祖慧能の孫弟子でした。「馬祖が叢林（学校制度の寺院）を建て、百丈が清規を制定し」叢林の一切の清規は、百丈が起草したものでした。この二人が、中国叢林制度を制定しました。叢林とは仏教大學のことです。叢林は、規模と制度を兼ね備えて、



仏教教学を制度化させました。従前のように、個人私塾式で、小規模の伝授方式を変え、馬祖以来、中国仏教は制度化されて大規模な学校へと発展しました。数多くの叢林専門大学に変わり、完全に中国式に変貌しました。それは、外国に類のないものとなりました。叢林の教学、講義、教材、及び教法は、すべて最高の芸術的境地に至っています。経典、音楽、彫刻、仏像、建築、供具など、種々のところから仏教の円満な教学に心が満たされるはずです。しかし、最近では、たくさんの円満な教学法の伝承が絶えつつあります。現在、仏教にある梵唄は変質しています。従前の梵唄に比べられません。仏教は、現代では非常に人材が乏しく、芸術人材もいません。仏教の芸術人材は、奥深い仏法の修養が必要とされます。それにより生き生きとした表現が出来、表現するものに命を宿らせます。世間芸術のように、哲学的内容を充実させなければ創造したものは

完璧になれません。所以に、一幅の画、一首の詩、一節の曲には必ず高度な哲学的修養が含まれています。すなわち「真、善、美、慧」を表せることです。仏教梵唄の歌詞は、みな古人が作ったもので高い境地に達しています。しかし、現在唄う人の心は清浄ではなく、声も清浄になっていません。心が悟りの境地に至っていないため、靈感が現れず、その上、俗っぽくて耐えがたいものです。キリスト教の聖歌の方がずっと人を感動させられます。これは、仏教が衰えていることを意味しています。仏教人材が欠乏していることは、仏教に内容と真実みが欠乏しているということではなく、実は、本当の修行者がいないからなのです。絵画、彫刻芸術と言えば、敦煌壁画、雲崗石窟、それから、最近北京の房山で発見された石経を見れば、中国仏教芸術の偉大さと壮観さが覗かれます。石経は、中国仏教の代表作と言えます。文化大革命の後に発見されて、現在収録



している『大蔵經』より内容は遙かに豊富です。後期に翻訳された經典はまだ全部『大蔵經』に収録されていませんが、石經には全部入っています。石經は、大きくて、厚めの石板の両面に彫られ、字の大きさは親指ぐらいで、字体は非常に優美です。全部の『大蔵經』は、四百年に亘って彫られました。このような大事業は、万里の長城と比べても少しも遜色がありません。最近発見されたものは完全なもので、全部で何万個も石があり、七つの洞窟に分けて保存されています。未だ全部取り出されていない様子で、二つの洞窟だけが開放されています。私は参観しに行きました。本当に奇跡です。古人の苦心に感心せずにはいられません。經典を逸失させないために、この方法で仏經を保存し後世に伝えました。彼らは、後代の子孫のために、本当に責任を果たしたのです。

仏教寺院の体系は、学校と博物館の融合体に譬え

られます。現在は、学校と博物館がそれぞれ独立していますが、寺院では、統一されていて特殊な体系を作り上げました。仏教の一切の芸術は、高度な教
学芸術です、単純な芸術品ではありません。深い教育目的、高い靈性と、智慧が含まれています。これは一般の凡夫には見出せないものであり、更に味わえないものです。一般の人はたくさんの仏と菩薩の像を見ると、仏教はたくさんの神を崇める低級宗教と誤解します。高級宗教には、ただ一人の神があります。それは唯一の神です。仏教では、供養されている諸仏菩薩が神を象徴しているのではなく、法門を代表しています。世間には、無量無辺な事理があります。ひとつの形像や、一種の方法では完全に表せません。たくさんの異なる種類の芸術品で表現されています。仏教芸術は、教育上に設けられている特殊な目的を明瞭にすれば、仏教は、神教と誤解されることはなくなるでしょう。本当にこのことを理



解出来れば、尊敬する念も油然而湧き出て来ます。

一切の諸仏は、我々の本性の徳用を代表しています。一切の菩薩は、修行の徳用を代表しています。修さなければ、本性の徳用がありながら顕現できず、受用もできません。本性の徳用は、修行の徳用によって顕現されます。菩薩は「修」を代表し、仏は「本性」を代表しています。所以に、仏教では、一般的に供養している仏像は、一体の仏像と二体の菩薩像です。仏は、ここで真如本性を代表し、菩薩は本性から用を起すことの代表です。本性は「空」であり、「体」であり、作用を起すことは「有」です。体、相、用の「体」は空寂であり、「体」から「相」が現れ、「相」が現れば作用が起きます。菩薩は「相」と「用」を代表し、仏は「自性本体」を代表しています。所以に、『華嚴經』の中では仏は説法していません、「本体」は話すことがありませんから。菩薩は説法されます。作

用が起きれば説くことになります。「相」と「作用」から説くことはありますが、「本体」から説くことはひとつもありません。本体は話せないだけでなく、念頭ありません。所謂「口が開くこと、念頭が起きることのいずれにかかわらず間違いである。」本体を指すことであり、供養される仏は、一体だけです。どうして二体の菩薩（用）を供養するのでしょうか？無量無辺の「相」「用」は、主に二種類に分けられます。一つは「知」、ひとつは「行」です。すなわち、「解」、「行」のことです。王陽明が「知」「行」合一の学説を提唱することを仏教から学びました。仏教は「解行相応」（理解と行動は相応する）と言います。彼は「知行合一」（知ることと行動が合一する）と言い換えて、自分の哲学を作りました。実際に彼の哲学は、完全に仏教から得たものです。「解」「行」は、すなわち「理」「事」です。通常、我々は釈迦牟尼仏を供



養するのは自性を尊重するということの表しであり、釈迦牟尼仏の両脇には阿難尊者と迦葉尊者という名の二体の羅漢がいます。阿難尊者は、多聞第一で「解」すなわち智慧を代表しています。迦葉尊者は、苦行第一で「行」を代表しています。釈迦牟尼仏の両脇には、文殊と普賢となる場合もあります。

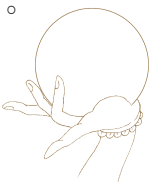
文殊は、智慧第一で「解」を代表しています。普賢は「行」を代表しています。言い換えれば「解」

「行」の両種類から離れません。浄土宗は、阿弥陀仏を供奉し、自性本体を代表します。観音菩薩は、大慈大悲で「行」を代表しています。大勢至菩薩は、智慧第一で「解」を代表しています。ですから、仏像のお供えの仕方はそれぞれの意義があります。必ず、一体の仏像と二体の菩薩像で、絶対に二体の仏像と三体の菩薩像になつてはなりません。

諸仏は、それぞれ本性の一部分を代表しますが、どの部分も究竟円満であつて、即ち「一即一切、一

切即一」（一が一切であり、二でないこと）です。

釈迦牟尼仏の名前は、名号を説明するもので、名号は徳用を表します。「釈迦」は、仁慈という意味です。人には、仁慈の心で、慈悲深くあれということです。「牟尼」は、静寂という意味で、静寂とは、清浄です。自分に対する態度の表し方です。人には、慈悲、自分には清浄を求めます。これが釈迦牟尼仏の表している意味ですが、我々の本性には、もともと具わっているものです。阿弥陀仏は、梵音から直接訳されたもので、意味を訳せば「阿」は「無」で「弥陀」は「量」です。それで阿弥陀は、無量という意味です。一切が無量で、万事が無量で、智慧無量、神力無量、功德無量、寿命無量…無量の中では寿命が第一となります。寿命がなければ、一切の無量も言えなくなります。無量なる寿命があれば、一切無量なる徳用も発揮できます。どうすれば無量である無量を獲得できるのでしょうか？



実際には無量は自性であり、真如本性です。六祖慧能大師曰く「自性には一切が具備されており、自性が万法を生み出す。（一切の現象は自性により変現されたものである）」自性には無量な意味が含まれています。どういう方法でこの無量を得られますか？観音と勢至両菩薩の方法を真似て修行すればいいのです。観音菩薩は、大慈大悲を教えてくださいます。大勢至菩薩は、一心念仏を教えてくださいます。大勢至菩薩、曰く「浄念を継続させ、他の方法を借りずに、自然に心を開け」一句の「阿弥陀仏」の名号で成就できます。しかし、単に仏名を念ずることは小乗に属します。観音行を加えれば大乘に変わります。観音行は、所謂、大慈大悲な行為です。

人には大慈大悲で、自分には一句の阿弥陀仏を一心で念じると、必ずや「無量寿」を得られます。本性の徳用が開発され、無量無辺な功德が現れて来ます。ですから、其々の仏像菩薩像が、一種の修行方

法と宇宙の真理を代表しているという認識が大事です。

仏教建築の中で、仏像を供養する大殿を外から見れば二層になっており、中に入って見ると一層しかありません。中には、ある意味が含まれています。外から見る時は真俗二諦ですが、中は、真俗不二、万法一如（真実で永遠不変である真如のことです。この意味は外見に差別がありますが、実質は一致しているということです。仏教正規の建築は、門内に入れば、最初に見える建物は天王殿で、中には護法神である四大天王と、正中にある弥勒菩薩が供奉されています。このような設計でありますから、人が山内に入れば、一目で弥勒菩薩が見えます。弥勒菩薩像は、布袋和尚像であり、弥勒菩薩が笑みいっぱい顔で人を迎えてくれます。仏法を学ぶことは、笑顔で人を迎えるところから始め、怒つ



てはなりません。怒りっぽい人が、仏法を学べないと訴えているようです。彼の腹は、非常に大腹です。「大」は、何でも包容できる意味です。細かいことに拘らない、平等心と、喜悦相を表しています。すべての人と事物に対し平等心と、喜悦心で接することです。この条件を満たせば、初めて仏教の門に入る資格が得られます。

両側にいる護法が、東西南北という四大天王となります。東方天王は責任感を代表し、持国天王（国を守る使命のある人）と呼ばれています。家庭の事務を主持する人は主人であり、会社の実務を主持する人は社長と会長であり、国家の実務を主持する人は帝王、総統です。各自の職場で、責任を果たすことが大事です。この社会にいる誰にも、自分なりの職責があります。尽力に職責を円満に果たせれば、社会が調和し、国家も、強く豊かになれます。持国天王は、このことを教示しています。

南方は、増長天王です。単に、職責を果たすだけでは足りません。日々進歩を求めるべきです。進めなければ、後退してしまいます。時代は、永遠に進歩しています。増長天王は、徳性を増上させ、乃至、学問、智慧、才芸、能力、生活水準まですべてを増上させて下さいます。仏教は、落伍していません。仏教は、進歩を重視し、常に、時代の最先端に立っています。時代の後を走っているのではなく、時代をリードしているのです。どのようにすれば持国、増長という役目を円満に果せるのでしょうか？この二人の天王が、実践方法を教えてくれています。

西方広目天王は、我々に多く見ることを教えています。北方多聞天王は、多く聴くことを教えています。中国では「万卷の本を読み、万里の旅をする」と言う諺があります。読書は、根本の学問を成就し、万里の旅をすることは、今日という観光旅行、考察、見聞を広めることです。人の長所を取り込



み、人の欠点を見れば自分自身のことを反省し、自分にも同じ欠点があれば改めます。我々は他人の欠点を捨て、他人の長所を取るという原則を以て、自分の社会と、国家を建設すれば、この国家は、世界で最も優秀な国家となります。これが、本当の護法です。所以に、仏菩薩の彫刻には教学の意義が含まれています。時々刻々、自分に気付き、この理想と目標に向け精進する。この通りに実行出来れば、仏教は、迷信ではなく、偶像崇拜でもないことがわかります。

四大天王の手は、道具を持っています。この道具も法を表すものです。東方持国天王の手は琵琶を持っています。物事の進展は早すぎても行けません「中道」とは、過ぎても至らなくても良くないことです。琴を弾くように、弦が緩くなれば弾けませんし、きつすぎれば弦が切れてしまいます。儒家は、中庸を提唱し、仏法は、中道を重視します。

すなわち、責任を果たせる過程の中に、過ぎることもなく至らないこともなく、中道に沿うと、事が円満に達します。南方増長天王は、日新を代表しています。彼の手は、剣を取っています。智慧の剣「乱れもつれる麻糸を切り、智慧の剣で煩惱を断つこと」の意味です。西方広目天王の体は、龍に巻かれています。時には蛇の場合もあります。蛇と龍は同じ意味で、変化を代表しています。「神龍の首が見えても尾が見えず」という諺は、この現実社会の一切の人々、事、物が変化多端であり、無常であることを意味しています。はっきりと認識できれば応変自由になり、龍はこの意味を代表します。北方多聞天王は、手に傘を持っています。傘は、遮蔽という意味で、千変万化の世界で、種々の汚染を防ぐ意味です。広く学習し、多聞すると同時に、自分の清浄心が汚染されないように保護しなければなりません。現実社会について、完全に理解出来れば智慧と能力



を以て適切な態度と方法で臨機応変に処理し、対人、対事、対物に関わらず、円満に処理できるようになります。天王殿は、我々にこのようなことを教えています。単なる神様に、お香をお供えすれば平安になれるという考えは大きな間違いです。

以上の説明から、仏教寺院の中では、すべてが教
学から離れておりません。供具にもそれなりの教育
意義があります。仏前に一杯の水を供える意義は、
法を表すことです。水は清く、清浄なるもので、
我々の心が水のように清浄であるように、水のよう
に平静であるようにという願いが込められていま
す。この水を見れば、自分の心が、水のように清浄
で平等であると想起することです。仏前に供える花
は「因」を表しています。花が咲けば「果」（実）
を結びます。花は、六度万行を表しています。果物
を供えるのは、仏菩薩に召し上がって頂くのでは
なく、「果」を見た時に、望む果報を得たければ、

それに相応する因を修すべきと思ひ起こさせてくれ
るからです。ですから、仏教の一切の施設や供具な
どは、自分を気付かせ教育するものです。仏菩薩
は、嗅がず、食わず、何も要りません。更に「灯」
は智慧と光明を表し、「香」は戒定真香を表してい
ます。すべては法を表すことで、教育を表していま
す。現代では、仏法を学ぶ人は、これらの教育意義
を全く理解出来ていません。お香を上げるのは、何
の為でしょう？供え物をするのは何の為でしょう？
それら、すべてを知りません。ですから、仏を信ず
ることは迷信になってしまいました。社会上では、
仏法を学ぶ人々は、迷信しているという批判があり
ます。更に神経病であると言う人もいます。もし、
自分が仏教を明白に理解出来、再び、その人達に説
明すれば、彼らも学べるようになると思います。私
は、このように仏法を中国大陸に紹介し、押し広め
て来ました。たくさんの人々が「こんな良いものを



知らなかったのです」と感嘆し、仏法を学ぼうと思うようになりました。

つまり、仏法は真実の智慧と無量な大覚で、一切の衆生に真実の利益と幸せを与え、離苦得楽（苦を離れさせ楽を得さす）を与えます。仏は、無尽な慈悲心で衆生を教化しています。古くから今日まで、顕教や密宗或いは任意の法門や宗派に関わりなく、仏教史の中で、この理論方法に依拠し修行していた朝廷の時代では、非常に殊勝な成果を得られていました。これは真実です。最近の一代は、仏法が衰えています。本当の仏教が理解されなくなりました。成果も自然に少なく薄いものです。末法の時期は、衆生の業障が重いので、念仏法門は取り分け殊勝で便利になります。念仏法門が殊勝なところは、簡単に容易で長い時間がかからず、儀式ありません。どんな人でも随時随処で修行出来ます。この法門により成就出来る人は特別に多くなっています。台湾

は、広くはありませんが、人口も多くありません。保守的に言えば、この四十年の間に、念仏法門により西方極楽世界に往生出来た人々は、少なくとも五百人はいます。これは素晴らしいことです。西方極楽世界に往生することは、成仏することです。こんな小さなところで、これほどにたくさんの人々が成仏出来るとは、台湾は宝の島です。中国大陆の寛律法師が、一冊の「近代往生伝」を書きました。それには、大陸の念仏往生した人々を記載しておられます。およそ百人余りで、もちろん漏れた人もいます。これは、浄宗の成就が殊勝なことを示しています。浄宗で成就したければ、必ず五経一論を理論の根拠とすることが根本です。經典では、明白に「發菩提心、一向專念」は重要な方法だと述べています。理論に依拠し、正しい方法を習得すれば我々も成就出来ます。これは修行の殊勝を闡明することです。



馬鳴菩薩は、大乘起信論の中で「本覺本有、不覺本無」（覺りは本来あるもので、迷いは本来無いもの）と述べています。「迷、邪、染」は惡業です。

本来無い物です。「仏性正知」は、至善であり、本来有る物です。本来有る物は当然回復出来ます。本来無い物は、当然、断ち切ることが出来ます。「罪業」は、迷であり、邪であり、本来無いものです。

当然、消去出来ます。「仏道」は、本来有るものですから、仏道は必ず証得出来ます。理論上、根拠を見付けました。業障は消去出来るという証明を得られます。ですから、我々は、一句の「阿弥陀仏」で心の中の旧習や惡習を一掃し、更に、苦行で我々の志向を固めます。真誠懇切に念仏を続け、長い時間が経てば、自然に念仏三昧（一心不乱）を得られます。この時には、心身自在で、万境如如になれます。これは、功夫が成就したということです。実を言うと、自在往生で西方に往生出来ます。どうして

「自在」というのでしょうか？ 行きたい時にすぐに行けるからです。もう暫く世間に住みたければ、住んでも構いません。これが自在です。他人は、自在を得られて、どうして自分は得られないのでしょうか？ それは、得られないのではなく、功夫が足りないからなのです。どれくらいの時間を念じれば得られるのでしょうか？ 正直に、古来の経験に拠れば、大抵の人々は、三年で、自在になれます。その時には、この世間に住んでいても、恐怖がなくなり、心安になれます。もし、第三次世界大戦が起きたとしても、原子爆弾が頭の上で爆発しても、あなたは「極樂世界に行きます」と微笑んで言えるでしょう。苦しみを味わわず、恐怖がなく、本当に自在を得られます。これが經典で述べた「衆生に真実の利益を恵ませる」ことの証明です。

歐陽竟無大師が「當知佛法，方便多門，不拘形式」（仏法は方便多門であり、形式に拘らないこ



と)と述べています。正面教学で、利益があれば正面を取ります。反面教学で、効果があれば反面を取ります。順境、逆境に関わらず、臨機応変に出来ます。しかし、一個の目標で、衆生を利益し、衆生に惑いを払わせ、悟りに到達させ、「離苦得楽」を実現させることが目標です。もし、体罰と罵りでこの目標を達成出来れば、これも教学の手段として用いられます。例えば、禅宗の棒で喝をかけることは本当の慈悲です。反対に、一切虚妄のもの、感情的なもの、迷い、及び執着は、すべて仏法ではありません。これをはっきりと認識すべきです。みなさんは迷いと執着を遠ざけ「破迷開悟、離苦得楽」という正確な目標へ邁進出来るように衷心からお祈りしております。

一九九一年十二月

浄空法師が米国マイアミにて講じました



「国連十年生涯教育」アジア ア非政府情報ネットワーク 組織会議に於いて

場所：日本岡山・岡山国際センター

期日：二〇〇二年六月十日

この度は、会議主催側のお招きを頂き、ユネスコの「生涯教育」に関する私の所感を述べるようにとのご要望をお受けまして、これはまさに二十一世紀に於ける最も厳粛たる課題であると認識しました。

昨今、世界の不安と社会の動乱などに直面して、多くの方々はその発生の原因や解決の方法を模索していますし、これについての私に浅見を求められることも多々にありました。私見には、これを教育の問題であると考えております。まさに、「建國君民，教學為先（国を建てようとする君主とその臣民にとって、優先すべきは教育である）」という中国古代の『礼記』にある訓のとおり

であると思います。

一体その原因はどこにあるのでしょうか？それは各段階で教育の失策があり、とくに古代聖賢の説について教育がおろそかにされたところに原因があるのではないだろうかと思えます。中国は今、欧米社会からのカルチャーショックによって、民族的自信を失い、古代先哲たちの教えを疑うようになり、孔孟の説やお釈迦様の教えから疎遠になってしまいました。一方、欧米社会では、科学技術の発展によって、宗教教育の働きを疑い、『聖書』の説教を今さら信仰しなくなっただけではなく、主の死亡を宣言する動きさえあるのです。これこそ、今日世界で起きている全ての天災と人災の根本的な原因なのであります。

中国では上古時代に堯舜が教育を呼びかけましたが、その際もう既に1.父慈子孝（父は慈、子は孝）、2.君仁臣忠（君は仁、臣は忠）、3.夫婦恩愛（夫婦は愛し合う）、4.兄弟和睦（兄弟は仲睦まじい）、5.朋友有信（友人との付き合いに信用第一）といわゆる「五事」を教化の主旨とされていたのであります。ほかに、身を修め



る為には「言忠信，行篤敬（言葉は忠実に、行いは誠実に）」、事を扱う為には「正其誼，不謀其利（相手との付き合いを大事にし、それを利用しようとせぬ）」及び「明其道，不計其功（道理を相手に解らせて、其の苦勞を気にせぬ）」、人との付き合いをする為には「己所不欲，勿施於人（己の欲せざるところ、人の施すことなかれ）」及び「行有不得，反求諸己（行い得ざる者は、諸を己に省み求めよ）」など、数々の教えもあります。その後、儒家の孔子と孟子は堯舜の説を継承し、次第に四千余年にわたる中国教育の基本理念と教学の総指南として確立させました。

「人之初，性本善（生を受けた初め、人は本来善なり）」と儒家がよく口にします。これは、教育哲学に於いては何よりも先ず人間が生来善良であることを認め、善良でないものは、それは後天的に悪い習性だと主張しているのです。それが故に、歴代聖賢たちはみな教育には非常に熱心なのであります。教育こそ悪を防ぎ、本来善良であるものを守り、さらにそれを高揚させていくことができるのであります。そして教育こそ人を

して悪から善へ、敵から友へ、迷いから悟りへ、平凡から聖賢へと転じさせることさえ出来るのであります。

古代中国において官民とわず各界の聖賢哲人は、上記の道理を心得ておりました。そうであるこそ、「建國君民，教學為先（国を建てようとする君主とその臣民にとって、優先すべきは教育である）」という重要な訓辭が生まれたのでありましょう。一つの国または一つの政權にとつて、国民全体を教化するために何がいちばん重要でしょうか？それは教育である、というのが、この訓辭が人々に諭そうとするところであります。

教育は主に四つの部分に分けられますが、実はこれらは一体のものであつて、どれも引き離してはなりません。第一は家庭教育であります。第二は学校教育であります。第三は社会教育であります。第四は宗教教育であります。この四つの教育は、家庭教育を根本とし、宗教教育を円満終結としております。この四つの教育をうまく出来れば、世の中が泰平になり、社会全体が安定し、そして人々が幸福になるのであります。逆に、この四つの教育をおろそかにしたら、世の中は動乱に陥らないは



ずはないでしょう。

今日の世の社会構造を見てみますと、基本的な家庭組織から国家まで、どこも功利的な教育に走っているフシがあることに気付くでしょう。家庭では、倫理道德などを気にせず、多くの夫婦はひたすらに離婚の泥沼に陥っているか、仕事やら金儲けやらで、子供の教育をおろそかにし、自らが子供の良き模範になっていないため、今の子供は両親の言うことを聞かなくなっているのです。学校教育でも、科学技術や経済競争に役立つ知識を伝授することしか重視しなくなり、道徳人文的教育をおろそかにしたことによって、学生が先生の言うことを聞かなくなっています。社会教育においても深刻に汚染されている状態であります。毎日目にする新聞や雑誌、テレビ、映画、インターネットなど、その中の多くは人々に殺しや、盗み、売買春および非現実的な妄想を走らせることを教えていて、ものごとの因果関係についての教育はロクにされていらないのであります。おかげで、人々はお互いに利害関係しかなく、恩愛や道徳もなければ、義理も人情も薄れてきているのであります。一方、

宗教教育も形式だけに流され、宗教的儀式だけを重んじる代わりに、お経は読めても、經典の本当の意義については分りません。教義も解らなければ、どうして行動に移せるのでありましょう？ こういう意味では、もう宗教教育は存在していないとも言えるのではないかと思えます。現在は、この四つの教育とも没落してしまった以上は、世の秩序が乱れないわけがないではありませんか？ 世の有志者よ、この世を悪運から救いたいと思えば、この四つの教育を至急に回復させること以外の方法はないのであります。

家庭は社会の基本的な組織であります。「家和萬事興」と言われますが、この「萬事」には社会、国家、世界が含まれており、家庭では家族みんなが和氣藹々としていれば、世界全体には平和が訪れないわけがないでありましょう？ 社会は安定しないわけでもないでありましょう？ 親たる者が手本として子供に倫理道德を重んじ、悪口非行を防ぎ、常に学習しながら善行を積み重ねていくという一連のことを示してはじめて家庭の円満を感得できるのであります。以前では人の親たる者たちはみんな



このことを心得ていたので、親は子供の前では、その一挙手一投足を以って礼儀を背かないよう注意し、子供には絶対に良くない印象を与えないようにしていました。

そして、親は教師を尊敬し、その様子を子供に見せることによって、子供なりに親の行動に理解すると同時に、彼ら自身も教師に対して信頼感が増し、喜んで教師の指導を受けるようになるのであります。これこそが家庭教育だというものであります。そして一方、教師も学生の良い手本となつて、子供に親を尊敬し親孝行するよう指導します。こうすれば、子供が親の言うことを聞かない、学生が先生の言うことを聞かないという現象の原因がどこにあるかは分かつてくるのであります。孟子は「養不教，父之過。教不嚴，師之惰。（養うだけで教えないのは父の過ち。教えながら厳格でないのは教師の怠り。）」と言われている通り、その原因は良き手本になれなかった親自身であり、教師自身なのであります。

ここで宗教教育について、もう少し見てみましょう。宗教は本来多次元的な社会教育なのであります。すべての宗教の經典では家庭教育を重視しないものではありません。

ん。例えば、キリスト教の『新旧約・聖書』には「神は世の人を愛している。」「と何回にもわたつて語られておりますし、イスラム教の『コーラン』には「アラーは世の人に対して、確実な仁愛と慈悲を有している。」「と記されており、また「汝らは親を孝行し、親族と仲を睦まじくし、人に対しては善なることを言うべし」とも書いてあります。仏教では「慈悲は根本であり、方便は門である」と説いています。即ち、すべての宗教教育は、どれも「仁慈博愛」を教義としていたのであります。宗教教育は国家を問わず、民族を問わず、人々に互いに尊重し合い、仲睦まじく付き合い、平等に対応することを教えるのです。そのため、どの宗教も広く人々を愛する平和博愛の教育をしており、すべての宗教においてその宗教心は寛大なものであります。仏教では「心包太虚，量周沙界」と言いますが、人はもし、その心に自分しか認めず、他人を抑えたり貶したりすることならば、それは決して神の意志ではなければ、宗教教義で説く内容でもありません。それはただある個人の考えに過ぎないのであります。



こういう意味で言えば、信者がその宗教の經典について深く理解し、その經典の説く教えを実践しようとしなければ、その宗教は迷信的な存在になってしまいます。でも、宗教そのものは迷信ではありませんし、宗教教育の本質も素晴らしいものであり、宗教こそが真正正銘にすべての人々を救うものであります。

聖賢たちの經典によれば、我々はこの社会で暮らしている間、どんな職業に就いていても、みんな「君、親、師」の使命を背負っている、とされます。すなわち「作之君、作之親、作之師」ということであります。どなたでも一生を通して善行を成就したいと思い、事業を成就しようと思えば、この原則に背いてはなりません。

「作之君」というのは、つまり大衆を正しい道へ導いて、後ろにいる人間が立ち往生させないようにリードすることです。そこで、このリーダー役の人間は智慧、行いとも優秀な人で、さらに臨機応変の能力を備えていなければいけません。「作之親」についてですが、親というのは恩徳を布施することであり、親がその子供を愛するような深い愛情を抱き、他人と親し

く接していくべきだという意味であります。会社の社長ならば、職員全員を自分の子供だと思って、愛情を持って接していれば、忠誠心のない職員はいなくなるのであります。そして「作之師」というのは、人を導いて教育することである。即ち、教師が学生を大切に思うようにすべての人にとって最良の手本になることであります。すべての人は上記三つの使命を背負っており、みんなが聖賢の教えを道德の帰依として「君、親、師」の三文字を実践しましたら、必ずや家庭は幸福であり、社会は安定し、世界は平和であるようになるでしょう。

ご周知のとおり、各国の聖賢たちと各宗教の神聖な教えは、それぞれの經典に記載されており、その内容は非常に豊富であります。我々はその經典をマニュアルに行動していけば、いわゆる四つの教育を回復させることはきつと出来るであります。そのために、皆様には是非とも倫理道德教育の重要性を理解し、特に聖賢神聖についての教育の重要性を理解していただきたいと思えます。具体的にどうすれば良いのでしょうか？私浄空は、二十一世紀の為に「世界宗教大学」を設立するようユネ



スコに提案しており、宗教ごとに学院を設立して、宗教教育が牽引車となつて、徐々に生涯にわたる四つの教育に立ち戻ることを希望しております。そうなりますと、二十一世紀の世界には一縷の光が差し込まれ、救われることになるのであります。

今回はこのような盛会にお招きいただき、ここにて自分の感想を述べさせていただきました。多くの方々のご指導をお願いしつつ、今日の発言を終わりにさせていただきます。

最後に皆様のご多幸をお祈り申し上げます。
どうもありがとうございました。

浄空

オーストラリアゴリフェス大学

クンジラン大学名誉教授

(翻訳：安小鉄 審訂：涂玉盞)



仁愛平和教育を根付かせる ために

場所：日本岡山 期日：二〇〇四年八月二十四日

先の岡山国際貢献会の会議の席において、私浄空が呼びかけました「倫理道德教育の復活」に対しまして会のみなさまがたよりご支持を賜り、再びこうして「如何にして四つの教育を根付かせるか」という点についてお話をさせていただくこととなったことは、私にとって大きな励ましになると同時にこの上ない喜びでございます。この動乱の世界にあつて、ここにお集まりのご有識のみなさまが、世界を救うために肩を並べてともに奮闘することとは、世界にとつての曙光であり、人々の生きる力となるであります。今回、このような機会を賜り、ご臨席の大徳のみなさまに「如何にして四つの教育を根付かせるか」という点について浅見を述べさせていただけることを大変感謝しております。この四つの教育こそが、

二十一世紀の世界の存亡と盛衰のカギとなっていくであろうと私は思っております。

衝突をなくせるのはただ道德教育のみ

教育には大きく四つあり、この四つの教育は一体であつて決して分けることはできません。第一に家庭教育、第二に学校教育、第三に社会教育、そして四つ目が宗教教育です。四つの教育は家庭教育を根本として、宗教教育で仏教の言うところの「円満」、つまり完璧なものとなります。そしてこの四つの教育の主体はまた中国の先人が後世の人々に教える倫理道德教育でもあります。古今東西、すべての聖人賢者、すべての宗教の經典はこの道德教育を述べており、それらはみな自然の法則に従うものであります。そして自然の法則こそが神仏の教えなのです。その神仏の教えとは誰か一人の教えを指すのではなく、大自然そのものの法則を指すものであり、真理を指すもののなのです。この四つの教育がうまくいけば、天下泰平、社会は安定して人々は幸せでいられます。ところがもしこの四つの教育を疎かにしたら社会に深刻な



衝突をもたらすでしょう。

今日、私たちはみな同じような問題に悩まされています。家庭の不和、夫婦の確執をどうすればいいのでしょうか。国と国との対立、グループを異にする人同士の対立、宗教と宗教の対立、これらはみな社会における大きな衝突です。また自分の心が、外の人や物事に対立するとしたら、それは自己における大きな衝突でしょう。こうした衝突は深刻な問題で、その深刻さは一般の人々の想像では及ばないほどです。今日の問題は、仏法でいうならば輪廻するたびごと、そのアラーヤ識（深層心理）に怨みや憤りが積もり積もって今この時に爆発したものです。ゆえに人と付き合えば、どうも気に入らないことばかりが目につくようになってしまったのです。誰かを見るたびに、あるいは何かを見るたびにどうも気に入らない、不愉快になる…などと言う経験は、おそらく多くの人にあることでしょう。それはどうしてなのでしょう。それは「無量劫」、つまり果てしないほど長い時間をかけて累積されてきた怨みで、とてもやっかいなものです。もし、すべて爆発してしまったら、この世界

は西洋の宗教の言う「終末」となってしまいます。「終末」というのは世界が滅亡し振り出しに戻ってしまうことで、とても恐ろしいことです。だからこそ、衝突は必ずや解消させなければなりません。解消させなかったら、この世に生を受けるたびに互いの怨みを晴らそうと報復合戦が続き、永遠に終わることはなく、相手も自分も苦しみが続くのみです。

対立や衝突は解消することができるのでしょうか。どのように解消したらいいのでしょうか。衝突を解消する原理は仏法の「境随心転（境に随いて心を転ず）」、「一切法従心想生（一切の法は心の想うところに従って生ず）」という教えにあります。もし、すべての人に怨恨の心が宿っていたら恐ろしいことです。この世界は破壊してしまいます。もしすべての人の心に喜びが、愛が、感恩があったらこの世界は極楽となります。ですから娑婆（苦しみが多く、忍耐すべき世界、人の世）と極楽に違いはないのです。極楽は阿弥陀さまがお造りになったものではなく、私たちが住むこの世界も神さまがお造りになったわけでも閻魔さまが支配しているわけでもあり



ません。この世界をつくり上げているのは私たちの心そのものであると、仏さまはお経の中で教えてくれています。私たちの心に善があれば、この世界に善でないものはおなくなり、すべての人も、すべての事も、すべての物も善となり、善でないものはなくなります。純淨、純善となってこの世界は華藏となり、極樂となり、天国となるのです。

純淨純善はどのように育てるのでしょうか。それには古の聖人賢者が唱えた仁愛と平和の教育が必要です。古代の中国の『礼記』の中に「建國君民、教學為先（国を治めるにも、身を修めるにも、まず教育や学問が大切だ）」という言葉があります。「教学」というのは悟りを教えるものです。では、何を悟るのでしょうか。宇宙（いつさいの存在の総体）と人生の真を悟るのです。

宇宙と人生の真実には三つの課題があります。一つは人と人との関係です。二つ目は人と自然界との関係で、三つ目は人と天地鬼神（死者の靈魂と天地の神靈）との関係です。もし、この三つの関係を理解し明瞭なものとする事ができたなら、その人は仏であり、菩薩です。

「仏」「菩薩」「聖人、賢人」とは宇宙の真実、真象を理解した人に対する呼び名なのです。明瞭に理解することができなければその人は「凡夫」であり、凡夫には宇宙の真実はわからないのです。

真実がわからなければ、ついつい自らの妄想や判断、執着を以って人や物事に向き合ってしまう。そうしなければどうして問題が生じずに済みましょうか。それこそ自らの生活環境を娑婆世界、極苦の世界に変えてしまうのです。もし、人々がはっきり明確に悟ることができたら、この世界は極樂世界に、天国に、天園になるのです。

ゆえに現前の世界の混乱の根源は、各レベルの教育において倫理道德の修養が疎かになっている、とりわけ古の聖人賢者が唱えた仁愛と平和の教えが疎かになっているところにあるのです。中国人は西洋文化の衝撃を受け、民族の自信を失い、古の聖哲たちの教えに疑いを抱いて孔子、孟子、釈迦から離れてしまったのです。そして西洋は科学技術が発達し、宗教教育に疑いを抱くようになり、『聖書』の教えを信じなくなりました。信徒た



ちがそれらの教えに心から従わなくなってしまったことが、現下の世界で起きているすべての災いの根源なのです。

宗教教育からほかの三つの教育へ

今日の社会の結びつきを見るに、基本となる家庭から、国家や世界のつながりまで、ほとんどすべて功利的な競争や闘争に向かっています。家庭では倫理道徳を教えず、離婚率はうなぎのぼりとなり、また、親たちはお金を稼ぐのに忙しく子どもたちの教育を疎かにし、また身を以って子どもたちの手本にもならないため、今の子どもたちは親の言うことを聞かなくなってしまうしました。学校教育は科学技術や経済における競争のための知識を詰め込むことに忙しく、道徳、人文の教育を疎かにしているため、学生は教師の言うことを聞かなくなってしまうしました。社会教育が最も深刻で、毎日の新聞や雑誌、テレビや映画、インターネットは人殺しや盗み、姦淫、妄言ばかりを教え、因果を教えるということをしません。それらは人と人との関係を利害の衝突ばかりにし

て、恩義や情義を失くしてしまいます。そして宗教教育もまたその多くは今日すでに形式化が進み、宗教的な儀式ばかりを重く見ています。経が読めても、經典に書かれた本当の意味を知らず、教義がわからなかったら、どうして人々の心の中にしっかりと根付かせることができるでしょう。これら四つの教育がすべてだめになってしまったら、天下が乱れないはずがありません。

今日の家庭教育、社会教育、学校教育は倫理道徳を捨ててしまいました。これら三つの教育を通して倫理道徳を復活させることはもはや不可能です。その中にあって唯一宗教教育だけが今でも仁愛、平和、尊敬を語っているのです。世界にまだ一筋の光明があるとするならば、それは宗教教育です。宗教教育は私たちに神や仏を信じ、その教えを信じ、因果応報を信じることを教えます。世の心ある人々が現前の世界の救おうと思うなら、緊急に宗教教育を復活させるほかはありません。神や仏を信じ、その教えを信じ、因果応報を信じることができたら、宗教教育が牽引車となって徐々に「倫理を崇め、道徳を重く」した家庭教育、学校教育、社会教育に



立ち戻ることができ、世界は救われます。そうなれば終末がおとずれることはありません。

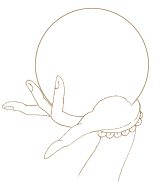
今年一月、私たちはこの国際平和会議の席上、ユネスコの「国連持続可能な開発のための教育の十年」について話し合い、一致した考えに到りました。それはつまり宗教教育こそ安定と平和を得るのに最も有効な方法であり、その宗教教育にこそ人、モノ、お金を集中させ、地球規模に広げなければならないということでした。

イスラム教、キリスト教、仏教などすべての宗教は人々に倫理道徳、仁愛平和を説いています。倫理道徳を根付かせ、それをしっかり語れるようになり模範となることこそが重要であると私たちは知るべきです。中国人は何を以って天下を治めていたのでしょうか。それは武力でも、警察力でも、あるいは技術力や経済力でもありません。これらはみな問題の解決にはなりません。では教育はどうでしょう。「国を治めるには、まず教育や学問が大切だ」です。古代中国の聖人賢者たちが用いた方法とはつまり教育なのです。彼らの教育は簡単にして要領を得ていました。

仁愛平和教育とは

イギリスの著名な歴史学者トインビー博士は「二十世紀の社会問題を解決するには中国の孔孟思想と大乘仏教の教えが必要だ」と言っています。彼が一九七三年に発表した文章にはこう書かれています。「一部の進んだ宗教と哲学の創始者は、神性の本質は威力ではなく、愛や仁慈、人道であると考えている。仏や菩薩、イエスは威力を示すものではなく、克己、献身、自己犠牲のあらわれなのである。儒家と神道教は人と自然界との調和共存を説き、道教は自然を一番として、人間がおろかな行為で自然を乱すことを禁じた。叡智に富み、より柔軟なこれらの伝統的宗教と哲学の基礎の上に打ち立てられた世界観こそ、確かに今日のすべての人々を救い得る可能性がある」。

儒教と仏教は五つの教えを説いています。「父慈子孝」、「君仁臣忠」、「夫婦恩愛」、「兄弟和睦」、「朋友有信」で、この五つを教えの根本としています。父子、君臣、夫婦、兄弟、朋友の道で、この人の道は、天理、天然であって、どこかの誰かが思いついたもので



はありません。人と人の間はもとより自然に形作られた関係なのです。そして自然の法則こそが「道」なのです。

道に従うことがすなわち「徳」で、中国の聖人は八つの徳を説いています。それは「孝悌忠信、礼義廉恥」、あるいは「忠孝仁愛、信義和平」です。この二つの説を一つにまとめれば「孝悌忠信仁愛を以って人に対し、礼義廉恥和平を以ってともに生きる」ということです。倫理道德の教育もこれを旨としなければなりません。

古代中国の聖人賢者たちはみなこの道理を知っていました。だからこそ「国を治めるには、まず教育や学問が大切だ」という大切な教えを垂れたのです。これはつまり、国を建て、全国の人々を教化するのに最も大切なのは教育だ、ということです。

儒家は「人之初、性本善（人の初め、性は本より善なり）」と説いています。教育哲学では、まず人間は善であるとしており、善でないものは、後天的に身についた悪い習性であるとしています。ゆえに聖人賢者は非常に教育を重視しています。教育のみが善でないものに染

まることを防ぎ、本来の善を発揮させることができるからです。また教育は「転悪為善（悪を転じて善と為す）」、「転敵為友（敵を転じて友と為す）」、「転冤為親（仇を身内と為す）」、「転迷為悟（迷いを悟りと為す）」、「転凡為聖（凡夫を聖人と為す）」こともできます。

家庭は社会において基礎となるグループです。「家和万事興（家庭和やかにして、万事興る）」と言いますが、「万事」とは社会や国家、世界のことです。人々の家庭が円満であれば、世の中が乱れたり、社会が不安定になったりすることはありません。親が子どもに分をわきまえることを説き、物事の是非を論じて、善い行いすることを教えてこそ、家庭の円満を感じることができま

す。昔の親たちはその道理を知っていました。ですから子どもたちの前では礼儀正しくあろうとその言動を慎み、子どもに悪いイメージを持たないようにしていました。また親は教師を尊び、教師を敬っている姿を子どもに見せることで、子どもたちは教師を信頼してその教えを受け入れました。これこそが家庭教育なのです。そ



して教師は子どもたちのよきお手本となり、子どもたちに親孝行を説き、目上の人を敬うことを教えるのです。子どもが言うことを聞かないとか、学生が言うことを聞かないという人がいますが、果たしてその責任はどこにあるのでしょうか。「養いて教えざるは父の過ちなり。教えて厳ならざるは師の惰りなり」と孟子は言っています。親自身、教師自身がそれをきちんと実行していないのではないのでしょうか。

聖人賢者の著した古典は私たちにこう教えています。この社会に生きる私たちは、たとえどんな仕事に就いていても、各人それぞれの場で「君、親、師」、つまりリーダーとして、親として、教師としての使命を持っています。「之の君となり、之の親となり、之の師となる」と言います。どんな人であっても、その一生において徳行をなし、何かを成し遂げようとするならば、この原則を離れることはできません。

「君、親、師」というのは古代の聖人の物事に当たる態度や、人への接し方を指しています。中国の商の時代、湯王という聖人は「万方罪あらば、罪朕が躬に在ら

ん」と言いました。天下万民に罪があるなら、その罪をわが身にあらしめたまえ、という意味です。どうして彼はこのようにいったのでしょうか。彼は君主だったからです。万民に罪があるとしたら、それは彼の教化が足りなかったからです。ひるがえって、もし自らの家族の一人が過ちを犯したなら、自分自身にも責任があります。なぜかと言えば、きちんと教えていないからです。ほかの人のせいにしても、兄弟姉妹のせいにしても、親のせいにもしてはいけません。もし私たちがそれを悟ったら、彼らを感じしなかった自分自身にも罪があることを知るでしょう。罪はわが身にあるのです。聖人は普通の人間とは違います。普通の人は罪とは相手にあるもので、よいことが自分のものだと考えます。しかしその考えは大きな誤りで、ほかのいかなる誤りよりも重いものです。湯王は「どのような集団であっても、集団が誤りを犯したなら、指導者に罪がある。それは指導者がしつかりせず、きちんと教えていなかったからだ」と言いました。指導者の責任とはつまり「君、親、師」です。この三つの役割をきちんと果たせば、功德無量でありましょう。



「君」とは指導者であり、計画を立て人々を導くことです。「親」とはつまり父母となつて、子を育て養い、きちんとした暮らしをさせることです。「師」とは教え諭すことです。もし、きちんと教えることができず、生活における問題を解決してやることができないとしたらリーダーとして失格で、この罪は何よりも重いでしょう。湯王のこの話は本当にその通りで、社会における多くの指導者はこの道理を知るべきです。

すべての人に「君、親、師」のこの三つの使命があり、すべての人が古の聖人賢者の倫理道德をその拠りどころとして、この三つをよく行ったなら、すべての家庭は幸福に満ち、社会は安定し、天下泰平となるでしょう。

私はこの岡山で行われた先の会議における送別会の食事の席でこう申しました。平和のために働くなら、まずは自らの考えを直さなければならぬ、と。相手は正しく、間違っているのは自分なのだ、と。「相手が間違っているのも正しいのです。私が正しくても間違っているのです」と私が言うと、みなさんはしみじみと聞き入った

後に「いや、それは難しすぎます」とおっしゃいました。私は申し上げました。「たとえどんなに難しくてもそうしなければならぬのです。これこそが世界の安定と平和のためにできうる貢献なのです。私たちがそうしなければ、口先だけで安定や平和を叫ぶのと同じです。それでは安定も平和も本当に根付かせることはできません。平和のために働こうという人は『相手が間違っているのも正しい。自分が正しくても間違っている』という気持ちでいかなければならないのです。」と。これこそが、莊子の言う「得を以て民に在りと為し、失を以て己に在りと為す（何かの利益があれば民のおかげだとし、損失があつたら自分のせいだとする）」なのです。

すべての宗教団体はともに仁愛と平和の教育を推し進めよう

すべての宗教の根本は多文化の社会教育です。仏教は多文化的な社会教育であると言われています。なぜならばお釈迦様の教えは、国や民族、文化はもちろんのこと、身分や地位、富の多寡を超えてなされたものだから



です。釈迦の教えを喜んで受け入れさえすれば、その人はもう釈迦の弟子となります。その教えを学ぶ弟子たちの地位はみな同じです。ゆえに仏教は「多文化の社会教育」と言われるのです。すべての宗教、たとえばイスラム教にしてもキリスト教にしても、その教えは国や民族、社会階層を越えて受け入れられています。実際、世界のどの宗教を見ても、ひとつの国の人や、あるグループにだけ信者を限っている宗教はありません。すべての宗教は世界に開かれています。ゆえにすべての宗教は多文化的社会教育であると言えるのです。

また、世にあるどの宗教の経典を見ても、仁愛、平和を重視していないものはありません。イスラム教の『コーラン』には「アラーは人々に愛と慈しみを以って対する」とあり、また「汝、父母に孝養を尽くし、親族と仲睦まじくし、人には善言を以って対せよ」とあります。また、キリスト教の『新約聖書』には幾度となく「神は汝を愛する」「神は世人を愛する」と説かれています。仏教では「仁慈博愛、和睦平等」をその教えの宗旨としています。つまり、これらの宗教は互いに受け入れ、互

いに尊重し合い、仲良く共存して、平和的な態度で相手に接することを教えるもので、国や民族の違いを超えています。ゆえに宗教教育とは平和と博愛の教育であり、人を愛し、衆生を愛することを教えるものなのです。すべての宗教の経典は広い心をもっています。仏教は「心包太虚、量周沙界（心に大空を抱けば、無数の世界に到達することができる）」と言っています。もし、自分ばかりでほかの人を貶めたならば、それは神や仏の意思ではありませんし、その宗教の教義でもありません。それはおそらくある個人の考えによるものなのです。

もし信徒がその経典を深く理解せず、その教えを自らのものにしていなかったらその宗教は怪しくなってしまう。宗教そのものは怪しいものでも迷信でもありません。宗教教育の本質は正しいものであり、本当に人々を救うことができるものです。

多くの人はある疑問を抱いています。宇宙はどうなっているのか、生命はどこから来たのか、世界はどう形作られてきたのか、などです。仏教の言う虚空、法界、刹土衆生というのは一体どこから来たのか、誰が造ったの



か、などもそうでしょう。宗教はこれらの問いにこう答えます。「それは神が造ったのだ」、「創造主は神である」と。宇宙にはたったひとつの「真神」しかいません。宗教によってその創造主の名は異なりますが、けれども宇宙を創造したのは確かにその神なのです。仏教では「神」とは言わずに「法性」と言います。『華嚴經』の中には「唯心所現、唯識所変」とあります。仏教は「心、識」と言いますが、「心」と「識」はつまり「真如（一切存在の真実のすがた、この世界の普遍的な真理）」、「自性（物それ自体の本性、本来の性質）」のことです。そして「真如、自性」と他の宗教の言う「神」や「主」、「アラー」などとは同じで、これはひとつの事実、ひとつの道理を指しているのです。これこそ私たちが宗教教育を学び、受け入れる最も基本的な条件と信念なのです。

ゆえに私たちは異なった宗教はそれぞれの神が創りあげたそれぞれ異なった形式、異なった教えであるということを理解しなければなりません。神の姿がそれぞれ異なっているのは、その教えの普及を助けるため、違う地

区、違う文化、違う精神世界を持った衆生にあわせて変化させたに過ぎないのです。私どもの研究所にはすべての宗教の經典がありますが、それらの説く道理はみな同じであり、方向も目標も同じです。悪を断ち、善を行うことを教え、迷いを振り切り悟りを開き、凡を転じて聖とする道を説いていないものではありませんでした。そこを出発点に観察し、理解すれば、宇宙には確かに唯一にして、すべての宗教に共通する「真神（法性、つまり一切存在の真実の本性。真如・実相・法界などと同義）」があることがわかるでしょう。

また異なった宗教同士でも団結は可能ですし、互いに協力し合うこともできます。宗教活動をともしに行い、すべての信徒が真の心、清浄な心、平等、仁愛、平和を学び、互いに受け入れ合うこと、互いに尊重すること、互いに敬愛すること、互いに信じること、謙虚な気持ちで互いに譲り合うこと、互いに思いやること、互いに助け合うこと、互いに協力することを学び、一緒になつてこの地球、この世界にひとつの天国、あるいはひとつの極楽世界、あるいはひとつの天園を作り上げることを学ぶ



のです。これこそが私たち宗教教育を受けたものの使命であり、天職です。この目標に向かって全身全霊をかければ、この世界から災いが消え、安定と平和、そして幸せが必ずや訪れることでしょう。

仁愛と平和の教育を根付かせるための提言

仁愛平和教育を根付かせるため、僭越ではありますが、私はここで二つの提言をいたしたいと思います。

（一）衛星放送（インターネット）による教育活動

まず、衛星放送局に「仁愛平和大講堂」という番組を持つということが可能です。ここではユネスコによって選ばれた講師が「孝悌忠信、禮義廉恥、仁愛和平」を掲げて、倫理道德を教えて宗教教育を行います。すべての番組は英語、中国語、スペイン語、アラビア語の四言語で放送します。その他の言語についてはこの四つの言語から翻訳をすればいいでしょう。

最初は既存の衛星放送局の放送枠を利用し、毎日最も

それにふさわしい時間帯に一時間番組を全世界に向けて放送します。その後は放送時間を拡張し、最終的な目標は専用の衛星テレビ局を立ち上げて、仁愛と平和を説く道德教育番組を二十四時間放送することです。

番組の主軸となる講師はユネスコに世界各地から選抜してもらいたいでしょう。道德の面でも、学術的にも信頼できる経験豊富な人材、たとえば退職した大学教授などがうってつけかもしれません。社会の安定や、背景の異なる人々の共存に何ら害を及ぼさず、すべてのエスニックグループ、国家に対して善意の立場を貫ける、そんな人です。

もしどこかの国が興味を持って、土地や宿泊施設、スタジオを提供してくれたらいいかもしれません。そうすれば番組に出演する講師はそこに一ヶ月ほど滞在して番組撮影を行うことができます。撮影後の番組はユネスコの審査を経て社会に危害を及ぼす恐れなしと確認した上で四つの言語で世界に向けて発信します。このアイディアは番組制作や教材の準備にかかる時間などを考慮してすぐにでも実行したらいいでしょう。おそらく一年で高



い効果が期待できると思います。

私浄空は仏教教育にたずさわり四十六年になります。

ここ二十年は個人や民間の力を借りて、大量の仏教經典の解説書やテープ、ビデオ、CD、VCD、DVDなどを作成、流通させてまいりました。最近六年はインターネットを利用したり、昨年からは衛星放送によるテレビ教育を開始しましたが、これは世界各地で仏教を学ぶ人々に対する大きな影響力を生み出しました。これは世界各地での仕事に携わろうという人の数の増加からも証明できます。もしここで国連が今日の科学技術による遠隔教育をサポートしてくれたなら、その一年の効果はきっと私たちの過去二十年の効果を上回ることでしょう。そして一年の後、世界の安全は大幅に改善され、各国は民心の淳厚、社会の安定、経済的繁栄、そして世界平和に向かって大きく邁進することでしょう。これこそが世界を災いから救う最良の方策です。もしこれが本当に実行できたら、みなさんは神が使わしたまう使者であり、救世の聖人賢者となるのです。

もし、国連がこの教育番組の設立を望むならば、私は

この衛星放送を利用して、全世界に募金を呼びかけます。また、私は国連に対して一日十時間、無料で衛星放送の放送枠を提供しようと考えています。私自身はただ脇でお手伝いをするだけで、番組製作については直接関わらないつもりです。私浄空は国連が世界規模の衛星放送局を開局し、全世界に向けて仁愛と平和の教育を発信していくことを心より願ってやみません。

(二) 仁愛平和国際大学校

宗教教育事業には必ず継承者が必要です。そこで国連の指導の下、どこかの国に土地を提供してもらい、そこに学校を建設します。幼稚園から大学、大学院までです。学生たちはそこで純粋に道徳と深遠なる学問を学びます。外界からの悪影響を受けることなく、生活におけるレクリエーションもすべて健康的な正しいものを選び、最高の教材を与えます。学校での生活にはすべて専門のスタッフが必要ですが、この仕事は心やさしいよい人材にお願いしたいものです。

教師陣については上述した衛星放送局同様、世界各地からユネスコの選抜を経た、道徳、学術の二方面で評価

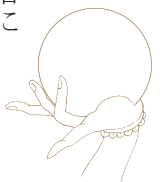


できる先生にお願いします。

そしてこの国際大学校は世界に向けて生徒を募集します。ここでの教育のモットーは「孝悌忠信仁愛を以って人に対し、礼義廉恥和平を以ってともに生きる」です。これも衛星放送局開設の目標と同様に、世界を救える現代の聖人賢者育成を目標とします。核となる学生たちは幼稚園の段階からこの学校で教育を受けますが、設立したばかりの時期は、世界の著名な学校や大学から推薦を受けた学生を品性、道徳を基準に選抜して入学させます。おそらく世界各地の心ある親御さんの多くが、この学校に我が子を送り出してくれることと私は信じています。

仁愛平和国際大学校では「修身、齊家、治國、平天下（身を修め、家を整え、国を治めたら天下泰平となる）」の理念の下、教育を行い、「修身」がその根本となります。中国の四書の一つ『大学』には「天子より以って庶人に至るまで、堯是に皆身を脩むるを以って本と為す（上は天子から、下は一般庶民にいたるまでもつばら身を修めることが根本である）」とあります。また

「修身」とは「入れば則ち孝、出れば則ち悌、言忠信にして、行い篤敬（家では孝行し、外では年長者に対して従順、言葉は誠で、行いは人情に篤い）」ことであり、人や物事に対しては「己の欲せざる所、人に施すなかれ。行いて得ざる者あれば、皆反りて諸れを己に求む（自分が望まないことを、人にしてはいけない。何かやってみてうまくいかない時は、相手を責めるより自分のやり方を反省するべきだ）」でなければなりません。これこそ孔子の説く「仁」です。自分がほかの人に何かを望むなら、まず自分が先にほかの人に対してそうするべきですし、相手が自分にしたことがいやだったら、自身もほかの人にそのようにしてはいけません。これはとても自然なルールです。「行いて得ざる者あれば、皆反りて諸れを己に求む」は私たちに常に自らの過ちを改めることを教えるものです。私はよく学生たちにこう言います。人や物事と相対した時、もし何か問題が生じたら、必ず自分が誤っていて、いつでも相手の言っていることが正しいのだと考えるようにしなさい、と。私自身もまたたゆまず過ちを改め、心を入れ替えるよう努力し



ています。『呂氏春秋』にこう書いてあります。「凡そ事の本は、必ず先ず身を治るべし。其の身を成して而して天下成り、其の身を治めて而して天下治まる。天下を為す者は、天下に於いてならず、身に於いてなり」。つまりすべてのことはまず自らの身から始めなければならぬのです。釈迦も、孔子もみなまず自らが悟り、成就して初めて、人々を教化することができたのですし、平和をもたらす可能性につながるのです。

この学校の教育の質を保証するためには、人、モノ、お金を集中して注がなければならぬので、しばらくは分校設立などしません。奨学金や学資ローンなどの制度を整え、優秀な学生や貧しい地域からの学生を助けることも考えています。私浄空自身もこの学校に奨学金を提供する用意があります。

私たちは非力ではありますが、ともに手を携えてこの一大事業を支えてゆけば、必ずや全世界の平和を愛する多くの人々の応援が得られることと思います。そして、それこそが二十一世紀の輝く一筋の光明となり、世界は救われるのです。

本日はこのすばらしい会議におきまして、このようなお話を述べさせていただき、感謝の言葉もございませんが、最後になりました、みなさまのご健康とご活躍をご祈念いたしまして、私の話を終わらせていただきたいと思ひます。皆様、どうもありがとうございました。

浄空

豪州浄宗学院院長

豪州グリフィス大学名誉教授

豪州クイーンズランド大学名誉教授

(翻訳：永井江理子 審訂：涂玉盞)



眞誠、清淨、平等、正覺、
慈悲、看破、放下、自在、
隨緣、念仏



2550年ウエーサーカ祭

國際座談會&文化交流

佛教徒對人類之貢獻

世界平和の永續的な發展

2006年10月7日~9日

CELEBRATION OF THE 2550th ANNIVERSARY OF THE BUDDHA

International Symposium and Intercultural Dialogue on

Buddhist Contributions to Humanity
and Sustainable Development of World Peace

From 7 to 9 October 2006

二五五〇年歡慶衛塞節

國際座談會&文化交流

佛教徒對人類的貢獻

永續發展世界和平

二〇〇六年十月七至九日



Keynote Speeches

- Learning from Buddha Sakyamuni:
Reconciling Conflict and Promoting Social Stability
and World Peace Through Teaching
Venerable Master Shi Chin Kung
- The Buddha's Contribution to Humanity and World Peace
Prof. Dr. Ananda W.P. Guruge

Panel

- Buddhist Contributions to Culture and Human Development
Moderator: Dr. T. Dharmaratne
- Role of Religion in World Peace
Moderator: Prof. Dr. Ananda W.P. Guruge

Roundtable

- A Happy Life
Mr. Tsai Li-sha, Education Director, Cultural Education Centre
of Lijiang, China
- Education is the Priority to a Harmonious Tanshi
Report from Mr. Li Yidao, Deputy Director
of Cultural Education Centre of Lijiang, China

Documentary

- *Prayer for World Peace: Buddhist in the World Today*
Asian Cultural Performance
To Understand the Buddha's Life and the Essence of His
Teachings, Painting of Hell and Causality, Painting of the
Stories of Confucius and the Six Arts of Confucius.

專題演講

- 學習佛陀創始教學 化解衝突 促進社會安定 世界和平
釋淨定法師
- 佛陀對人類與世界和平的貢獻
古魯哥教授

圓桌會

- 佛教徒對人類文化及發展之貢獻
主持人:法寶博士
- 宗教在世界和平與和諧的角色
主持人:古魯哥教授

紀錄片

- 幸福人生
於傳記 麗江文化教育中心主任謝長
- 和諧發展 教學影片 來自麗江文化教育中心的報告
李毅多 麗江文化教育中心主任

同步翻譯

- 同時翻譯 中、英、法、越南四國語言

紀錄片:今日的佛教

- 為世界和平祈禱

亞洲文化表演

- 認識佛陀一生及其教義, 講述地獄因果、孔子聖訓

孔子六藝

UNESCO HEADQUARTERS PARIS FRANCE 法國巴黎聯合國教科文組織總部

7, Place de Fontenoy 75352, Paris 07 SP - France Hall I and II

Metro: Segur, Cambonne

Tel: 01 45 68 25 45 / 01 45 68 31 22 / 01 45 68 31 23 Fax: 01 45 68 31 24

Contact: un2550@yahoo.com



with the collaboration of
the Permanent Delegation
of Thailand to UNESCO



The World Fellowship of Buddhists



The World Buddhist University



Pure Land Learning College

二五五〇年ウエーサーカ祭活動概覽

第一展示エリア

仏教徒の人類に対する貢献

華嚴三聖と阿弥陀仏、柱面墨書

仏教徒の人類に対する貢献：仏教徒が仏陀教育を実行に移すことができれば、国土清浄、衆生安泰、天下泰平の目標を達成することができる。

華嚴三聖：毘盧遮那仏、文殊菩薩、普賢菩薩は、修行者が苦しい娑婆世界で修学し、そして大行と大智の円満な世界を完成し、華嚴教義を学習かつ実行することを象徴している。つまり、宇宙万有は一つの生命共同体であることを肯定している。

阿弥陀仏：「阿弥陀」とは無量の智慧と福德、寿命という意味である。「仏」は「智慧、悟り」の意味である。

柱面墨書：会場には七百センチメートル近くの高さの柱がある。柱には、さまざまな宗教や教義について書いた墨書が掲げられている。国境や種族、宗教を超えて、人々が平等に向き合い、仲睦まじく共存できるよう祈るものである。

仏陀示現 凡人の成仏―十二相成道

仏陀は凡人の身で苦行を積み、智慧円満の境地に達した。その生涯にはいくつもの大きな出来事があった。この展示では、仏陀の「十二相成道」について説明している。この「十二相」を通じて、凡夫がいかに「転凡成聖」、つまり凡を転じて聖と成すことができるかを理解することができる。

▲仏教徒の人類に対する貢献。



▲仏陀示現 凡人の成仏-十二相成道。



▲華嚴三聖。



▲阿弥陀仏。



▲柱面墨書。



第二展示エリア

多元的な文化を包容し、世界平和を促進する

仏陀はその一生を、教学にささげられた。教学の目的とは、われわれを迷いから導き出し、悟りを開かせること、苦から離れて真実の樂を得させること、宇宙人生の真相を認識させることにあった。教学内容は一切の学説、宗教、科学、文化を融合し、民族を融和させ、異なるものを分け隔てず、共存共栄、平等互愛を実現するといふものである。





第三展示エリア

国境を越えた教え

仏陀の教えを広めるため、インターネットとサテライト授業を行っている。学習者は时空の制限を受けずに、自分に適した授業を受けることができる。それぞれにカスタマイズされた、自主的な学習スタイルを確立している。

孔子六芸圖

至聖先師孔子は『詩』、『書』、『礼』、『樂』、『易』、『春秋』の六經を確立し、これを広めた。六經にはいづれも大道が記されており、人を啓蒙して自性に目覚めさせる。これを学ぶ者は、六經を読んで大道を知る。礼と樂に従い、自らの天性に従って学べば、すべての六芸を発揮し、あまねく人々に福をもたらし、聖道を歩むことができるのである。



第四展示エリア

孔子聖蹟の図、地獄変相図、童趣の印鑑

孔子聖蹟の図：孔子の生涯における重要な行誼や教えの内容を、三十二枚の絵で表現している。孔子が無類の精神を教え、仁孝礼義の思想内容を教えていたことを説明している。

地獄変相図：この絵の目的は人を脅かすことにあるのではなく、深い因果について教えるという意義を持っている。地獄変相（地獄絵）の描写は真に迫っており、まるで目の前の出来事であるかのようにうだ。このため人々に与える影響は深く、これを見た人々は悪いことは行わず、良いことを行うようになる。

童趣の印鑑：廬江中華文化教育センターの篆刻クラスで学ぶ十歳前後の子供たちが、刀によって彫り上げた中华文化の金石の美である。



▲孔子聖蹟の図。



▲廬江中華文化教育センター篆刻教室の学生たちの作品展が、会場の一角で行われた。



▲地獄変相図。





▲法寶區

第五展示エリア
 廬江中華文化教育センターの紹介
 廬江中華文化教育センターでは、徳行教育を施すことと、教師を育成することを中心し、中華社会における伝統的な倫理道徳教育の回復に尽力している。また、身を修めることを根幹とし、教学を優先し、調和の取れた社会の手本にならんとしている。

第六展示エリア

写真撮影コーナー

参加者が記念撮影できるように、パリのエッフェル塔と今回のイベントのテーマを背景にした撮影コーナーを用意。



▲2550年ウェーサーカ祭会場。



▲9つの宗教が手に手をとっている。宗教は団結できることを象徴している。



▲浄空老法師が基調講演で「宗教は団結できる。人々は良く教育できる」と強調。



▲参加した来賓に
地獄変相図を贈呈。



▲大勢の人々が心をひとつにして平和を祈る。



▲会場で「今日の仏教」を上映。仏教の過去、現在、未来の使命について明確に知ることができる。



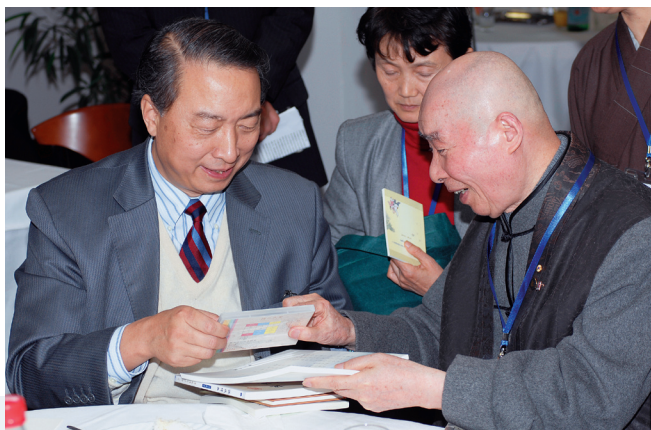
▲全員が起立して祈祷。



▲左から2人目は国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)の松浦晃一郎・事務局長、左から3人目はタイの Preeyanuch Jariyavidyanont 副大使。



▲左はオーストラリアのユダヤ協総会の Uri Themal 会長。



▲左は中国のユネスコ代表、章新勝氏。

▼会議室。



▲一番右は世界仏教学人の Phallop Thaiarry・秘書長。右から2人目はイベントの主催者、法宝法師。



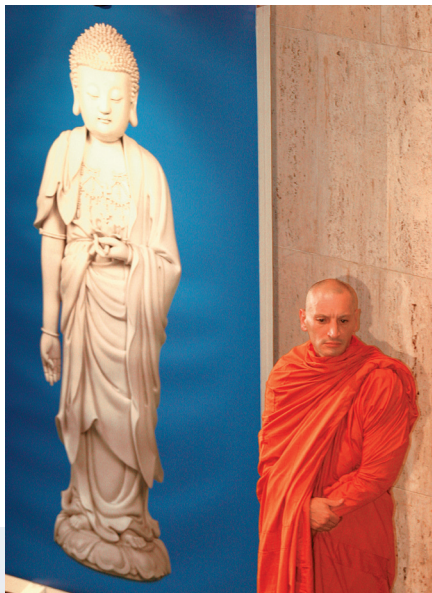


▲ 閲読会場の案内書に注目があつまる。



イベントのハイライト

▲ 童趣の印鑑。



▲ 仏と僧侶。



▲ 人々の関心を集めた金石の美。

▼ インタビューに答える浄空老法師。





▲2006年10月、浄空老法師がケンブリッジ大学で講演。



▲2006年10月、浄空老法師がロンドン大学東洋アフリカ学院で講演。



▲2006年10月、浄空老法師がロンドンで行ったFriends House講座の実況。



▲ケンブリッジ大学の一角。



▲国籍を分け隔てることなく共に聖賢教育について学ぶ。



你要盡心盡力愛主上帝要愛人如己這就是我對
你們的要求彼此相愛 基督教 釋淨空



行為正直就是智者不要傷害別人無論是用
思想行為語言放下憤怒 印度教 釋淨空



慷慨的人才是富有的人供水者別人也
將供給他水 猶太教 釋淨空



不分國界不分種族不分宗教皆應平等
對待和睦相處 釋淨空



心を尽く、力を尽くてあなたの神を愛しなさい。自分を愛するように隣人を愛しなさい。これが私のあなた方に対する要求です。互いに愛し合うのです。キリスト教 釈淨空

正しい行動をする者は道理をわきまえた者である。他人を傷つけてはならない。思想であれ、行為であれ、言葉であれ、怒りを拭い去りなさい。ヒンディー教 釈淨空

悲憤慷慨する者こそ、富める者である。水を与える者は、他人からも水をもらうだろう。ユダヤ教 釈淨空

国境、種族、宗教を超えて平等に向き合い、仲睦まじく共存しよう 釈淨空

不可論人是非害人者自嚐苦果

佛教 釋淨空



慈愛萬物實踐美德利益眾生他就是最快樂的人

佛教 釋淨空



一個人所能做的最美好事情就是原諒他人的過錯

猶太教 釋淨空



讓彼此敵視的人重歸和好的行為比忠誠慈愛禱告更好

伊斯蘭教 釋淨空



人の是非を問うてはならない。人を害する者は自ら苦しみを味わうことになる。 仏教 釈淨空

万物を愛し、美德を實踐し、衆生を利益する。彼は最も幸せな人である。 仏教 釈淨空

人ができる最も素晴らしいことは、他人の過ちを許すことである。 ユダヤ教 釈淨空

敵視し合う者たちを仲直りさせることは、忠誠心と慈愛に満ちた祈りよりも素晴らしい。 イスラム教 釈淨空

生活在感恩的世界

Living On a Grateful World

感激斥責你的人 因為他助長了你的定慧
Be grateful to those who have denounced you,
for they have increased your wisdom and concentration.

感激絆倒你的人 因為他強化了你的能力
Be grateful to those who have made you stumble,
for they have strengthened your ability.

感激遺棄你的人 因為他教導了你應自立
Be grateful to those who have abandoned you,
for they have taught you to be independent.

感激鞭打你的人 因為他消除了你的業障
Be grateful to those who have hit you,
for they have reduced your karmic obstacles.

感激欺騙你的人 因為他增進了你的見識
Be grateful to those who have deceived you,
for they have deepened your insight.

感激傷害你的人 因為他磨練了你的心志
Be grateful to those who have hurt or harmed you,
for they have reinforced your determination.

感激所有使你堅定成就的人
Be grateful to all who have made you
firm & resolute and helped in your achievement.



感謝の世界に生きよう。

あなたを叱責してくれた人に感謝しましょう。なぜならその人はあなたの定と慧を伸ばしてくれたからです。

あなたを陥れた人に感謝しましょう。なぜならその人はあなたの能力を高めてくれたからです。

あなたを捨てた人に感謝しましょう。なぜならその人はあなたに自立を教えてくれたからです。

あなたを鞭打った人に感謝しましょう。なぜならその人はあなたの罪業を取り除いてくれたからです。

あなたを騙した人に感謝しましょう。なぜならその人はあなたの見識を広めてくれたからです。

あなたを傷つけた人に感謝しましょう。なぜならその人はあなたの精神を鍛えてくれたからです。

あなたを成就させてくれたすべての人に感謝しましょう。